

私たちもA級隊員めざしたい。

rerimeru

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如異世界からの門が開いた三門市。

ネイバーと呼ばれる異世界人が侵略してくるなか、三門市を防衛すべく、界峽防衛機関ボーダーが日々戦っている。

三門市に通う男子高校生の一人である浅上博雅もまた市を守るため幼馴染とともにボーダーへ入隊するのであった。

入隊後、那須先輩のランク戦での戦闘をみてバイパーをメイントリガーにすることを決めた。1流のシューターをなるための課題は多い……。

ワールドトリガーのSSです、オリキャラ有。

感想や設定ミスの指摘などありましたら気軽にお願いします。

目次

入隊。そしてB級への道

始まり | 1

弾丸トリガー | 5

試運転 | 8

初めての個人ランク戦 | 11

3つの課題 + おまけ (バイパーナツ

クル) | 16

入隊から一月を経て | 21

番外編 フレア (多分割立体拡散弾

道) | 25

弾道とタイムラグ | 31

資料1 | 36

雅樹サイド | 41

正規隊員の会話 | 45

隊結成までの課題 | 49

オペレーター候補 | 53

ザキさんのおせっかい。 | 57

オペレーター加入と初ミーティング

62

B級昇格とランク戦

昇格とトリガー | 66

各トリガーの試運転 | 73

スナイパー初訓練とかわいい指導者

77

初の防衛任務 | 81

初防衛任務 with 来馬隊	85
反省会	91
作戦室にて・・・	96
かわいい指導者 その2	99
作戦会議 対間宮隊・早川隊	104
試合前日。	110
訓練終了 そして	115
初ランク戦 当日	119
初ランク戦①	123
初ランク戦②	128
初ランク戦③	134
初ランク戦④	139
初ランク戦⑤	146

初ランク戦⑥	152
初ランク戦 ⑦	157
初ランク戦 解説	161
祝勝会	164
雪下 月花	169
初ランク戦 ラウンド2 作戦会議①	174
初ランク戦 ラウンド2 作戦会議②	179
初ランク戦 ラウンド2 作戦会議③	185
雪下 月花 ②	190
雪下 月花 ③	194

初ランク戦	ラウンド2	⑪		261
初ランク戦	ラウンド2	⑩		255
初ランク戦	ラウンド2	⑨		249
初ランク戦	ラウンド2	⑧		243
初ランク戦	ラウンド2	⑦		236
初ランク戦	ラウンド2	⑥		231
初ランク戦	ラウンド2	⑤		226
初ランク戦	ラウンド2	④		222
初ランク戦	ラウンド2	③		216
初ランク戦	ラウンド2	②		210
初ランク戦	ラウンド2	①		205

199

初ランク戦 ラウンド2 当日

初ランク戦	ラウンド2	⑫		266	＋解説
初ランク戦	ラウンド2				反省会
して・・・				275	そ
通路にて・・・				279	
通路にて・・・②					そして顔合わせ
287					
移動、それから・・・				292	
視線過敏体質				300	
資料 2				305	
吉里隊・茶野隊対策①				310	
飯屋 秋人				315	

入隊。そしてB級への道 始まり

私は浅上博雅。三門市の高校に通う男子高校生。そして今日からボーダーのC級隊員の一人だ。

最初は自分の家族と目の前の人を守る力をつけたく入隊したが、入るからにはA級を目指して頑張りたいと思う。

「ヒロ、顔がこわばってるぞ、もっと気楽にいこうぜ。」

「悪い、どうにも緊張してな。」

一緒に入隊した同級生にして幼馴染の明野雅樹が話しかけてきた。雰囲気にもまれて緊張しているのは事実だがこいつはこいつで気楽すぎる気もする。

「まあいいか、で、ヒロはポジションどうするのか決めたか？俺はアタッカーになろうと思うが。」

「まあ雅樹ならアタッカーかガンナー当たりだと思ってたよ、アタッカーなら使うトリガーは弧月だろ」

「あたり。ガンナーも考えたけどな、それはB級に上がってから持つようにして最終的

にはオールラウンダーを指すよ」

「まあそんなところか。私はシューターを指そうと思う。」

「シューター？てつきりスナイパーだとおもったが・・・」

確かにスナイパーのほうが私の性にはあうだろう。けど・・・

「その予定だったんだけどな・・・。ボーダーの規定ではスナイパーがB級に上がるには訓練で三週間以上上位に入る必要がある。私の適正がどれほどかはわからないけどB級に上がるのが最低でも2、3か月はかかるとおもってな。お前と同じでB級に上がってから取ろうとおもう。」

「まあ確かに4000ポイントためたら上がれるほかのポジションよりかは遅くなるか・・・。それで、シューターっていうのはどうしてなんだ？」

「理由は三つだな一つ目の理由として私は保有しているトリオン量が人より多いみたいだから、ガンナーやシューターでも十分な火力が出せるということ、二つ目はシューターはガンナーより射程が劣るが弾丸の調整ができるみたいだから、幅が広い戦い方ができると考えた。最後に、私はスナイパーも兼任したいと考えてるから、中距離用の銃と狙撃銃と2丁もつては戦いにくいだろうから、いちいち出し入れするのは時間とトリオンの無駄だし、シューターがいいと考えた。」

「なるほど。俺が近・中距離でお前が中・遠距離か幅の広い戦術が取れるし、一緒にがん

ばろうぜ。」

「ああ」

雅樹が拳を突き出してきたのでコツンとぶつけ返した。

「そうそう、さつきアタツカーの最初の訓練の時に一緒に受けてる奴の中に隣のクラスの椿を見たぜ。」

「椿？ああ剣道部のか？」

「そうそう、その椿。で、B級に上がったら一緒に組まないかって誘つといた。別にいいだろ？」

「事後承諾かよ。まあ、椿ならアタツカーとしては優秀だろうから大歓迎だけだな。」

椿健太 中学のときに同級生だった男で剣道部の中でも上位の実力を持つていた人物だ。高校では別のクラスだったから接点は薄かったが、それなりに仲はいいし、性格はよく知っているからほかの人より連携もうまく取れるだろう。反対する理由はない。

「それはよかった。それじゃあこれからよろしく。」

噂をするとなんとやら、ちようどやってきたらしい椿が話しかけてきた。

「ああ（ちら）そよろしくな」

互いに拳を突き出してコツンとぶつけあう。

「さて、じゃあさっそくだけど、当面の目標は全員B級に上がるってことだな、がんばろうぜ。」

「まあぼちぼちやっていこうか、だが、雅樹、勉強のほうも怠らないようにな。成績を落とすと親にボーダーやめさせられかねないぞ」

「……まあぼちぼち、やっていこうぜ……」

心配だがまあ今言っても仕方がない。ひとまずは雅樹の言った通り、ボーダー目指して頑張るとするか……

弾丸トリガー

二人と別れた私は個人ランク戦のブースへ行き他の人の戦闘の様子を見ることにした。

シューターになると決めたいいものの、何を使うかまだ決めていないからである。

「まずは基本となるアステロイドを使うべきか……まあ他のトリガーも見てみるか……」
特殊な効果のない代わりに威力・弾速などの素の能力が高いアステロイド。

爆発して広範囲を攻撃できるメテオラ。

自動追尾機能、視線誘導機能のついたハウンド。

そして、設定した弾道を描くバイパー

C級のトリガーには一つしか入れることができないから自分に合ったものを選ばなければその分だけ昇格がおくれてしまう。慎重に選ばないと……

個人戦の様子を見てみるとアステロイド、ハウンドが同じくらいで人気。次いでメテオラ、最後にバイパーというのが使用されている割合になる。特殊な機能のないアステロイドはシューター入門としては当然だろうし、くせがない、ハウンドもアステロイドに比べると威力は下がるが自動追尾機能があるから当てやすく人気があるのだろう。

広範囲を攻撃できるメテオラはともかく、バイパーは弾道の設定をうまくしないといかないから人気がないのは当然か・・・

と考えていると一際注目を集めているシューターがいたので見てみる。

B級のシューターのようだ。しかも女性。男性の比率の高い戦闘員の中で珍しい。それにかなりきれいな人だ。

バイパーを用いて相手の退路を塞ぎ、相手の死角を突いて圧倒している。

「やっぱり那須先輩のバイパーすげえよ。あんなの防げねえって。」

「きれいなだけじゃなく強い先輩、素敵です。」

「やっぱりリアルタイムでバイパーの弾道引けるようにしないとだめか・・・」

近くにいたほかの隊員も同じ人を見ていたようで称賛の声が聞こえる。

那須先輩というのか。それにリアルタイムで引いてるって言うていたな・・・まああれだけ正確な弾道だ・・・あらかじめ設定してある弾道ではむりだろう・・・。

バイパーの弾道設定には二種類ある。

一つはあらかじめ弾道のパターンを決めておくというもの、もう一つは弾道を一から設定して弾を打つというもの。大半の人が前者であり、後者はごくごく少数であり、それを使いこなせる人はボーダーでも数人しかいないとオリエンテーションで言っていたな。

あらかじめパターンを設定していると素早く攻撃に移れるからな。1から弾道設定は瞬間的に引くことができなければそれだけ攻撃が遅れて不利になる。まあ当然といえば当然か……

けど、それができたら……協力的な武器になる。

「決めた、バイパーをメインとするシューターでいこう。」

私は立ち上がり、トリガーの設定をするべくエンジニアのところへ向かった。

試運転

「エンジニアのところまでパイパーを設定してもらった後にC級隊員用の個人訓練ブースに向かった。」

「さて、では試運転と行こうか。」

パイパーを起動する。すると、手からキューブが出現する。大きさにしておよそ20cmくらいだろうか、全体的に見て大きいほうのようだ。比較対象が少ないのであまり実感は持てない・・・。

「これを分割なしでそのままの威力を試してみるか・・・。」

分割なしで30メートルほど離れた的に向かって直線で弾道を放つ。

まずは威力の確認だ、複雑な軌道は必要ない。

ドオゴオオウン!!

的がほとんど跡形もなく吹っ飛んだ・・・。分割なしだとアステロイドに比べ、威力の劣るパイパーでもかなりの攻撃力があるようだ。いや、人よりもトリオンが多いからか・・・？まあ他人と比べても仕方ない。大事なのは十分な攻撃力が確保できるということだ。

まあ分割なしで相手に充てるにはよほど接近しないといけないだろうが・・・それに、今のは弾の威力、範囲、弾速の設定が初期設定の均等に割り振られているものだ。

まだまだ威力は上がるし命中や遠くの敵を倒すことを意識すればそちらにトリオンを割り振って威力を下げなければいけない・・・。

「細かいチューニングは相手と状況に合わせてするとして、威力、射程、弾速のそれぞれを重視したものと普段使いのバランス、あとはこれから探す必要があるが自分の使いやすい設定と最低でも5パターンを基本として戦うべきか・・・」

特に弾速の変更には注意が必要だ・・・。弾速が変われば弾道の引き方をうまく調節しないと命中率は下がる。これは骨がいりそうだ。

「それに加えて、何分割するか。そしてバイパーはそれから弾道の設定をしないといけない・・・。パターンを決めておくならまだしも弾道を1から設定するとなると・・・。いいね、最高に難しそうで最高に面白い。」

ひとまずは8分割、27分割で弾道を設定して試してみようか・・・。
弾道を設定し、的に向けて放つ

複雑な軌道を描けばそれだけ射程も必要とするし、弾道の予測が難しく、よけられにくくはなるが弾が届くのも遅れる。ある程度は直線で相手へ向かい、近くで複雑な軌道

を描くように設定するのがいいか。弾道の設定もそのほうが楽だし。それがいいな。じゃあそれでしばらく練習するでしょうか……。

——それから2時間ばかり練習を行った。

「さて、だいぶスムーズに打てるようになったけれども1から弾道を引くのは実戦では8分割が限界か……。ある程度距離が近くなればその余裕もないだろうから当分の間は設定したパターンと2種類を使い分けて戦うしかないか。」

それに、静止している相手はともかく相手も動く、うまく充てられるようにしないといけないな……。

まあ今日の練習はこのあたりにしてA、B級のバイパーの使い方。特に那須先輩の弾道などを学ぶとしようか。

ランク戦の記録を見るべく、個人訓練ブースを後にした。

初めての個人ランク戦

——翌日

今日からは本格的にランク戦と行こうか……。次の合同訓練までにある程度は動けるようにしないとな……。

「お、ヒロもランク戦か？」

個人ランク戦のブースには先に雅樹が来ていたように話しかけてきた。

「ああ、昨日は一人で練習してたからな、今日から実戦経験をつむと同時に本格的にポイントをとめていこうと思う。」

「へえ。そういえばシューターって言ってたな。トリガーはどれにしたんだ？お前のことだからロマンがないとか言ってハウンドとメテオラは使わないだろうからアステロイドかバイパーのどっちかだろう？」

「……よくわかったな。バイパーだよ……。」

さすがは幼馴染とでもいうべきであろうか。広範囲を攻撃できるメテオラや自動追尾で相手を攻撃できるハウンドは私にとってはあまりロマンを感じられない……。シンプルで戦うアステロイドか状況に合わせた弾道設定で相手を攻めるバイパーが

魅力に感じていて、昨日の那須先輩を見ていなくてもどちらかにしていたのは事実だ……。

「へえ、バイパーか……、昨日バイパー使いと戦ったけどなかなかよけれなくて困った。早くシールドか旋空持ちたいぜ……。」

「確かにC級はシールド持てないからな、レイガストでもない限り距離を詰めるのは難しいだろうな……。」

「ああ」

「まあ私が近づく練習に付き合おうか、報酬としてお前さんのポイントもらうことになるけどいいよな?」

「へえ、なら俺も対アタッカーの練習に付き合っつてやるよ。ポイントはありがたくもらっつておこな。」

二人して不敵な笑みを浮かべて訓練室に入る。隣の部屋だ、私が226で雅樹が227相手の部屋番号と使用するトリガー、ポイントが表示されている。

「さて、じゃあ10本勝負あたりでいいか?」

「まあそんなところだろう、手加減はなしだぞ?」

「そつちこそ」

私の初めての個人ランク戦が始まった。

「個人ランク戦 スタート」

自動アナウンスが流れる。場所は市街地、相手との距離は50メートル前後といったところか。

相手のトリガーは弧月。この距離なら一方的に攻撃できる。

「バイパー！」

まずはバランスタイプにチューニングした弾で様子を見る

「おっと、この距離ならまだあたたらねえよ」

弾が複雑な軌道に変化する前に安全な場所へとよけられた。

思っていた以上に動きが速い。訓練の的と違って動きも単調じゃないし、これはもう少し近くにならないと当たらないか。

けど、残り40メートル・・・25メートルまでは引き付けるようにしたい、

そして、そのぶんの時間があれば、1から弾道を引ける。

「なら、これでどうだ!!」

那須先輩や出水先輩のログから学んだ軌道。

相手の行動をけん制して制限する軌道と直接充ててダメージを与える軌道。
「とつた!!」

私の放ったバイパーが27の弾道を描き雅樹へ襲う。狙いは完璧。決まった。
そう確信した。

「なつめ、るな!!」

弧月で直撃するはずのバイパーがいくらか切り払われた。

けれども6、7発は確実に当たった。体がいくらか吹き飛んでいる。左腕も欠損した。

が

まだ耐えている!

くっ!

慌ててバイパーを再起動

油断して反応が遅れた、残り15メートル。

弾道を引く時間はない。昨日考えたパターンから最適と思われるものを選択。キューブを64分割し、前方に展開。広範囲かつ波状に攻撃できるようパターンを設定。そして放つ。

この距離だ、さすがによけられまい。

「うおおおおおおお!!」

避けられないと悟った雅樹は弧月を投げてきた。

今度こそは仕留めたと思っていたためにその行動は予想外だった・・・。

「なっ!!」

雅樹の弧月は私の心臓部。 トリオン供給機関を貫いた。

「トリオン供給機関破損、バイルアウトします。」

「トリオン体活動限界、バイルアウトします。」

二つの自動音声と同時に流れた

初戦は引き分けに終わった・・・。

3つの課題　＋おまけ（バイパーナツクル）

それから不毛な戦いが続いた。

私のバイパーは30メートル以上離れたところからは当たらないし、15メートルまでは当たっても致命傷には至りにくい。

だから最後には初戦のように多分割広範囲の攻撃で雅樹をしとめることになるが、致命傷を避けられないとなると雅樹は弧月を投げてきたり、かまわず特攻を仕掛けてくる。

投げられたところで急所に当たらなければこちらの勝ちだが距離が近いこととトリオン体で身体能力が上がっているためになかなかよけにくい。

結果は3勝1敗6分け

勝ちはしたもののあまり誇れない……。

「なあお前の最後のたくさん撃つてくるやつ反則じゃね？ シールドなかったらさすがに防げねえよ」

「正直私もそう思う。結果的には私の勝ちだけど、雅樹がシールド持ってたら負けてたのは私だったろうからな。」

「だよな・・・だからポイ・・・」

「けどまあ勝負は勝負、ポイントはありがたくもらっていくな。」

「うわ、ひどっ。俺のポイント~~~~」

「悪いね、雅樹。」

「B級にあがってシールド持つようになったら覚えてろよ。」

「はいはい、その時は私のフルアタックを見せてあげるよ。でだ。雅樹、今度はポイント変動なしでやらないか？私は広範囲攻撃やめるからお前も捨て身や投げるのなしで」

「ん？ああいいいぜ。俺もバイパーにはなれとききたいからな。」

「助かる。実戦と的あてじゃあどうにも勝手がちがう」

雅樹と戦って私の課題は大きなもので3つ

1つ25メートル以内まで近づかないと当たらないということ。

2つ20メートル以下では設定しておいたパターンの弾道でたたかうしかないという
うこと

3つ目視して弾道を打たないと当たらないこと。

1つ目はシューターの有効射程としては短すぎる。50メートル先の敵には充てられるようにしないと。25メートルならシールドで距離を詰められて終わりだ。

2つ目はまあだんだん慣れていくしかないか。とにかく練習だな。

3つ目も慣れといえれば慣れなのかもしれないけど。もう少し弾道を相手に合わせて設定しないとな……。那須先輩は相手を見ずマップを見て建物や塀の影から攻撃していたが私は直接目視してないと正確な弾道が引けない……。ランク戦の時にはオペレーターがいるということもあるだろうが個人ランク戦でもやっているからな。私もできるように頑張らないと……。

——さらに10戦——

結果 浅上博雅 2勝 明野雅樹 5勝 3引き分け

「引き分けはシールドがあつたら私が負けていただろうから実際だと2勝8敗あたりか……」

「いや、途中からあつたお前のバイパーナツクルはシールド割られるかもだから実際は俺が6，7勝あたりじゃね？」

「まあそうかもだがあれ多分B級以上のアタッカーにはなかなか決まらないと思うぞ。まあ近接の攻撃手段が待たたくないよりはましか……。けど少なくともあれは近接戦に持ち込まれた時の非常手段だからな。まずは中距離で仕留められるようにならな」と。弾道をもうすこし相手に合わせて設定していくようにしないとだな。」

「だな。64分割じゃない限りはまだよけられなくもなかった。多分椿なら自分に当たる弾見極めて切ってくるだろうから致命傷はほぼほぼ避けてくるだろうよ。」

「まじか・・・椿そんなに強いのか」

「おうよ、昨日の段階で勝率8割はいつてたな。ポイントも結構稼いだ。特に相手もブレードトリガーならC級で敵はいないんじゃないか？」

「私たちも置いてかれないようにしないとな」

「ああ。」

B級に上がるためなら雅樹にやったように近距離で多分割したバイパーをぶつければかなりの勝率が得られるだろうけどそれだと中距離戦の能力が身につかない・・・B級に上がったところで負けるだけだろう。C級のうちに地盤を固めておかないとな・・・。

「まあ、とりあえず今日のところはこのあたりにしとこうか。ほかの人に対戦挑んでくる。」

「俺もそうするよ、がんばろうぜ。」

「ああ。」

——おまけ　　バイパーナツクル

「くっ、外したか。」

「もらったぜ！」

15メートルの距離で放ったバイパーで致命傷を与えられず残り5メートルまで詰められた。弾道設定もパターンを選択する時間もない・・・

どうすれば・・・

そうだ!!

「くっえ!!バイパーナツクル!!」

バイパーを拳の先に展開。分割なし威力99、弾速0，5　射程0，5

これを直接叩き込めば!!

「ちよっ!!マジか!!」

私は胴体を真つ二つにされたが、最後に上半身が吹き飛んだ親友を見た・・・。

入隊から一月を経て

雅樹と別れてからしばらく個人ランク戦をしてきたが結果10本勝負で4勝2敗。

初日から勝率6割で調子がいいといえればいいのだろうけど勝因のほとんどは15メートルほど接近してからのパターン化しておいた64分割の拡散する弾道。

シールドがあつたらほぼ確実に防がれてこちらが負ける勝ち方だ・・・。

この勝ち方は身についてしまつてはB級に上がつてから通じない。何とか変えていけないと・・・。

あと相手がガンナーのときの対処法も考えないと・・・。

今日はほとんど勝てなかつた・・・。

入隊してまだ1日だから仕方がないといえれば仕方がないのかもしれないけれど課題が山積みだ。

とりあえず、すぐに弾道を引けるようにするためにイメージトレーニングだけは換装してない時も常に行うようにしてみよう。

あとは・・・もう一度ログを見直すか・・・。

「ふむふむ・・・。分割した弾をすべて一度に放つだけでなく、時間差で撃つのもありだ

な・・・」

時間差で打てば隙を軽減できるとともに相手の回避運動の後を攻撃できてより当てやすくなる。これも要練習だな・・・。

——1か月後——

入隊してから一月が立った。だいぶリアルタイムで弾道を引くのに慣れて多分割拡散弾道（フレアと名付けた）、あれから64分割から216分割まで増えたが、それに頼らずとも勝てるようになってきた。12個までなら瞬時に弾道を引けるようになったし、精度もだんだん上がってきてる。あとはこのまま実力を身に着けるとともに、B級へ上がるだけ。

最近の勝率は7割を超えてきた。これならあと1, 2か月もあればB級に上がれる。「ヒロ、調子はどうだ？ポイントはたまってきたか？こっちは3000超えたぜ、あと1000ポイントでB級に上がれるぜ」

「さすが。こっちは2800超えたところだな。勝率は上がってきてるから来月にはB級へ上がれると思う。」

「二人とも順調みたいだね。僕のほうも3500超えたから月末か来月頭にはB級に上

がれそうだよ。先に待ってるね。」

「今期待のアタッカーはやっぱ違うな。」

「今期待のアタッカーはやめてよ。確かにブレードトリガーでの近接戦闘ならもうC級には特に敵はないけどガンナーとかシューターにはまだまだ苦戦するんだから。それにB級へ上がると弧月以外にもいろいろ組み合わせで戦闘しないといけないから大変今までのようにはいかないと思うよ。」

「それもそうだな。適切な場面で適切なトリガーを使えるようにしないといけないな。B級に上がってからのほうがつらそうだし……。」

「けどこつちもできることは増えるからね。グラスホッパーって知ってる？ 空中に足場が作れるトリガーなんだけどね、うまく活用できればすごく楽しそうなんだ。」

「ログでたまに使ってる人がいたな。私もB級に上がったら持とうか考えてる。アタッカーに間合いを詰められないようにとか、逃げるとき、あとは生駒隊の隠岐先輩みたいに最短距離で狙撃位置に移動するときとかにあると便利そうだな。」

「俺もアタッカーとして持つてると便利そうだからそれ入れるつもりだよ。」

「へえ、それなら機動力をいかした奇襲が得意な隊とかが作れそうだね」

左右で合計8つまでトリガーを持つてると何を入れるか考えるだけで楽しい。自分の戦闘スタイルを確立させて私たちの隊ならではの戦術とか考えたてみたいもの

だ・・・。

「まあそのためにはB級に上がらないとだな。椿は一足先に上がるだろうけど、私たちがもすぐに追いつくから待っていてくれよ。」

「ああ。待ってる。」

私たち三人はコツンと拳を突き合わせてからそれぞれ個人ランク戦に向かった。

番外編 フレア（多分割立体拡散弾道）

「さて、合同訓練も終わったし、個人ランク戦でポイントを稼ぐか……。」

詳しいポイントは知らないが、雅樹と特に椿はかなり私よりポイントを稼いでいるはずだ。

一緒にB級に上がるために負けないようにポイントを貯めないと……。

最近では相手の動きに合わせての弾道の設定も正確になってきて安定して勝てるようになってきた。この調子だな。

最初はトリオン体と生身の体の運動能力の違いがあまり考えられてなく躲されることも多かったからな。順調に学習と経験を積むことができている。

「さて、誰に挑もうか……っと。あら、挑まれた……。ハウンド使いで所持ポイントは1000？ハウンドに転向したてなのだろうか？」

対戦待ちになってるリストから誰と戦うかを考えていると対戦を申し込まれた。

入隊式から日がたっているのに初期ポイントなのが気になるし、私はすでに2000ポイントを超えている。正直勝手も数ポイントしか獲得できないだろうが、試したいことはあるし、受けるか……。

「個人ランク戦スタート」自動アナウンスが流れる。

「ふ、能ある鷹は爪を隠すというが才能の差を見せつけてあげるのも強者の務め。先輩に核の違いを教えて差し上げなければ……。ハウンド!!」

「相手は男性、ハウンドの27分割、動きや弾道ががやけに単調すぎる……。こちらを誘っているのか？」

片目を前髪で隠したキザっぽい相手がハウンドを撃ってくる。

ハウンドなのに弾速が速めだ。それに私のいる壁沿いに弾を撃ってくる。

ハウンドは弾速が速すぎると旋回半径の関係で追尾性能が落ちる。ただでさえそうなのに私のいる側の壁沿いに撃ってくるから塀の影に隠れるだけで簡単にしのげてしまう。それに反撃されることをあまり考えてないかのように棒立ちで弾を射出している。

どうにも今日から戦闘を始めました。と言っているようなものだ……。

自信だけはものすごく伝わってくるのだけれど……

「そういえば今日からトリオン能力に見込みのある人が仮入隊するとかってお知らせにあった気がする……。それか……。」

それにしてもやけに自信に満ちている気がするが、きつと大物なのだろう。

自分に自信があるのはいいことだ。持ちすぎるのは問題だけれど……。

釣りの可能性は限りなく低い気がする。

まあそうだったならそうだったか……。

相手が自分より劣っているなら、いろいろ試したかったことができる……。

相手を目視しないでマップを見て攻撃するというのはあまり練習できないからこの機に練習台になってもらおう。

塀の影からマップを見ながら弾道を引く。自分の視界外に弾道を引くのにももう慣れてきた……。

ババババン!! ドガ!ドウガドウオウオン!!!

「ん?」

弾着音に違和感。相手の位置をマップで確認し、再度バイパーを放つ。

ババババン! ドガガガドウオウオン!!!!!!

「ふ、俺の攻撃にビビって塀から出てこなくなったな。まあ無理もない。」

理解。私の放ったバイパーと相手のハウンドが相殺しているようだ。

ハウンドには探知誘導でトリオン体を自動追尾する効果があるからそれでバイパーに当たったのだろう。

「ん?という()とは……。」

塀から出て相手を見据える。

「覚悟を決めて出てきたか……。一思いに倒してやる。食らえ！ハウンド!!」
相手のハウンドはただ撃つただけの工夫もない弾道。それなら!!

「バイパー!!」

6×6×6の216分割という多分割拡散弾道、それをさらに弾が立体的に散らばるように設定する。私の予想が正しければ……。

ババババババン!!

左腕と右足にハウンドをかすめたがそれだけ。被害はないに等しい。

「防がれた? いや、まぐれだな……。今度こそ当ててやる! ハウンド!!」

もう一度ハウンドを撃ってくる……。

相手の弾道はもう大体わかった。分散させた弾をもう少し収束させて……。

ババババババン!!!

今度は被害なし。やつぱりだ。相手がハウンドなら多分割して弾幕を張ればそれに誘導されて相殺してバイパーでも弾を防げる……。

おそらくはメテオラでもほかのたまに誘爆させることができるだろうから多少爆風は食らうだろうけれど同じことができるだろう。

ボーダーの弾丸トリガーの構成要素は三つ。威力を決める弾体、射程にかかわる力

バー、そして弾速に関係する噴進材。

つまりはカバーを破壊できれば自分に届くまでに弾は自壊する。

撃ち漏らしもでるだろうから相手の弾道にうまく合わせて弾幕を張らないといけないのと、ハウンドとメテオラであつても相手がガンナーの場合、連射性と弾の収束率から相殺させるのは難しいだろうから相手がシューターに限られるけど、私ができる防御手段がまた一つ増えた。

C級でトリガーが一つしかない状態で限定的で防御手段が増えるのは大きなことだ。

それに、B級に上がってから自分がメテオラやバイパーを使えばより相殺もしやすくなるだろう。

シールドのほうが確実にガードできるといふ点でメリットが大きいけれど、攻撃を受け続ければいつかは割られる。

うまく相殺し続ければトリオンの続く限りダメージを防げるこの方法も覚えておいて損はないだろう。

確か戦闘機の装備に赤外線誘導のミサイルを防ぐ装備にフレアというのがあつたはずだ。それにもじつて多分割立体拡散弾道はフレアと名付けよう。

「さて、いろいろデータもとれたし、あまり長引かせるのも失礼だろうからこちらからも攻めようか……。バイパー!!」

「ハウンドをたくさん分裂させたバイパーで防いだのか……。なら、俺だって!!バイパー!!」

向こうも同じようにハウンドを多分割させて私のバイパーを防ごうとしている。
が、

「判断は悪くないけど、遅かったな……。」

ハウンド射出前の散らしが足りない。弾の拡散が不十分だし面での弾幕となっていない。もっと立体的に弾幕を張らないとある程度収束してくる弾は相殺できない。

それに、こちらはバイパーだ、ハウンドに比べ複雑な軌道で飛ぶ。

ハウンドがそれに対応しきれていない。

「くそ……。なんでだ……。。」

「トリオン体活動限界。ベイルアウトします。」

結果、相殺しきれなかった弾が相手を貫き戦闘不能にした。

「色々参考になった。悪いことをした気がするけど、あの人には感謝しておこう。」

こうして私の防衛手段にフレアが加わった。

弾道とタイムラグ

入隊してから一月とすこし。

私は悩んでいた。

私が以前自分の課題の中に相手との距離が20メートル近いとあらかじめ決めておいたパターンで攻撃するしかないと挙げていた。

それについて、弾道を引くのに時間がかかり、攻撃後、再度攻撃するまでの時間差が距離をつめられ、命とりになるから課題にしていた。

主な解決方法として日ごろのイメージトレーニングによって弾道を瞬時に引けるようにするということを考えた。実際それにより攻撃と攻撃の間の隙を最初に比べ大幅に短縮できた。また、分割した弾をすべて一度に射出するのではなく、自分が瞬時に弾道を引ける数だけ複数回に分けて相手に放つことで断続的な攻撃が可能となり、より相手の行動を制限し、接近を難しくするとともに攻撃の際の隙を減らすことができた。

しかし、攻撃と攻撃の間、展開した弾をすべて撃ち尽くしてしまい、再展開するまでの間はどうしても攻撃が止み、相手に接近する機会を作ってしまう。

弾速を調整して再展開する間に相手に届くように設定したが、あまりに弾速が遅くな

りすぎてしまい、簡単に安全圏まで逃げられ、当たらないとともに距離を詰められるのがほとんど止められず、失敗に終わった。

「さて・・・どうしようか。考えても仕方がない。もう少し、ほかの課題の命中精度向上のためにもう少し複雑な弾道を描いてみようか・・・」

普段より複雑な弾道を描いて射出する。

が、相手に当たるとは思わなかった。

躲かれた・・・。弾道が見切られた？いや、あの複雑な弾道だその可能性は少ない。

普段の弾道ならあのタイミングは当たっていたはずだが・・・。弾道を複雑にしたことで何かが変わった？

理解。弾道が複雑になればそれだけ相手に届くまでに弾が移動する距離が延びる。弾が飛ぶ距離が延びれば相手に届くまでその分時間がかかる。その時間差でかわされたのか・・・。

迂闊だった・・・。最初の試運転の時に着弾が遅れるから相手にある程度接近するまでは直線的な弾道にしようって決めていたのに・・・。相手に弾道を見切らせないことを意識しすぎてそのことを忘れてしまっていた。

複雑な弾道とシンプルな弾道による直弾のタイムラグをもっと考えて戦わない

と・・・。

ん？

タイムラグ？

閃いた。

弾道の描き方で時間差を作れば再展開の間の隙をなくすことができる。

特に注意するのは複数回に分けて打つ時における撃ちきる際とその一つ前の弾道。

撃ちきる際には再展開の隙をなくすために複雑な弾道を描いて着弾が少し遅れるようにする。

そしてその一つ前は最後の弾が複雑な弾道のために着弾が遅れても相手が回避（あるいは防御）行動をとるよう誘導できるような弾道設定をしないといけない……。
うまく調整できたら……。敵に攻撃の暇を与えず勝てる!!

4日後、浅上博雅は覚醒した。

覚醒というと大仰かもしれないけれど、勝率が大幅に上がった。

「ふ、そういえば文史が油断して負けた変わったバイパー使いがいると聞いたな。だが俺は油断しない。真の強者とは……。」

どいい　　ばばばん　　どいーん。

「トリオン体活動限界。バイルアウトします。」

「秀英と文史がやられたバイパー使いというのはあの人か……。仕方がない。隊長（予定）の俺が直々に引導を……。」

どいい　　ちゅばーん　　すばばばん。

「トリオン体活動限界。バイルアウトします。」

途切れることなく襲い掛かってくる弾丸にほとんどのC級隊員はシールドを持たないためになすすべなく、ベイラギるをえない状況に追い込まれていった・・・。

資料1

浅上 博雅 (あさがみ ひろまさ)

年齢：16歳

血液型：A型

誕生日：5月25日

星座：うさぎ座

身長：168cm

ポジション：シューター(スナイパーとの兼任を希望)

現在のメイントリガー：バイパー

トリオン量：多め。入隊時点で菊地原・冬島あたりと同じくらい(BBFでのパラメータに直すと8くらい)

性格：多少皮肉屋だがお人よし。人見知りをするとところもある。

視力：悪い(左右それぞれ0,3) 普段はメガネ着用。

長所：基本的にほぼすべてのことを平均以上にこなすことができる。

図形、立体の把握能力に長ける。

短所：想定外のこと起きるとパニックになりやすい。

周囲に知らない人が多い状況では人見知りを起こし、緊張しやすい。

パニックや緊張など、平静を失うと大半の行動が裏目に出やすいため、常日ごろから冷静でいられるように心がけている。

本作における主人公。三門市の高校に通う1年生。成績は上の中。得意科目は数学。運動神経はほぼすべての分野において平均以上。ただし、縄跳び、投擲種目（ハンドボール投げなど）はやや苦手。様々なことにロマンを求め、壁の高いもの程やる気が出る。

一人称は「私」

明野 雅樹（あけの まさき）

年齢：16歳

血液型：AB型

誕生日：11月27日

星座：くじら座

身長：168cm

ポジション：アタッカー（オールラウンダー希望）

現在のメイントリガー：弧月

トリオン量：普通く多い。三輪、風間あたりと同じくらい（BBFで6くらい）

性格：愛嬌があり、様々な人から好かれやすい。浅上以上のお人よし。

視力：良い 裸眼で左右2，0

長所：コミュニケーション能力に長け、顔が広い

運動神経が高く、すべての分野において平均以上の成績を誇る。

浅上よりも運動神経は良い。

とっさの判断力に優れる

短所：成績が残念。

主人公の幼馴染。成績は下の上。コミュニケーション能力が高く、同学年のみならず他学年にも知り合いが多い。何事にも楽しさを求める。ノリで行動することも多く、基本的にはあほの子だがとっさの判断力が高く、いざという時には頼りになる。

一人称は「俺」

椿 健太（つばき けんた）

年齢：16歳

血液型：A型

誕生日：7月18日

星座：つるぎ座

身長：152cm

ポジション：アタッカー

現在のメイントリガー：弧月

トリオン量：普通く低め。緑川、唯我あたりとおなじくらい（BBFで5くらい）

性格：まじめで温和。誰にでも優しい態度で明るく接する

視力：やや悪い 左右0, 6くらい 普段はコンタクトを使用

長所：運動神経、勉強どちらも平均以上にこなす。

特に単純な弧月どうしでの実力なら正規隊員を含めても上位に位置する。

短所：とくになし。

剣道少年。成績は上の下くらい。努力家で何事にも真面目にコツコツと基礎を積み上げていく。親の影響で幼いころから初めた剣道の腕はずば抜けて高く、最近剣道3段になった。全国大会でも上位の実力者。身長が低いことにコンプレックスを持っている。また、身長や容姿、性格からよく学校の女子から「かわいい」と言われるが内心少し嫌がっており、本人は「かっこいい」といわれる男になりたい様子。女子にすぐくもてる。

一人称は「僕」

雅樹サイド

俺たちがボーダーに入隊してから3週間が過ぎた。

今日も合同訓練の後に個人ランク戦へ向かい、少しでもB級へ上がるべくポイント稼ぐ。

この個人ランク戦について一つ言いたいことがある。

この個人ランク戦ってアタッカー不利じゃね？

ガンナー有利すぎないか？

盾にもなるレイガストは除いて、スコピオン一本、あるいは弧月一本でシールドなしにガンナーに挑めと・・・。

トリオン体だから生身の肉体より運動能力も、動体視力も反射神経も大幅に向上している。だから弾丸を弧月で切るなんてこともできなくもない。

できなくもないけど最初の数発が限界。ガードできる数に限りはあるし、シューターに比べ弾が集まるガンナーの射撃を弧月で防ぎきるのは無理があるだろ。

いや、弾が広がるシューターなら防げるとかいうわけじゃあない。

けど、自分にとって致命傷になりかねない場所に飛んできた弾を切れば戦闘不能にな

らずに間合いを詰めることがある程度はできる。

ヒ口みたいに64だ100だたくさん分割されたらむりだけど。

話がそれた。

だから結局のところ、俺たちアタッカーは射撃をかくぐつて間合いを詰めなければならず、正直きつい。

だから必然とランク戦を挑むのはアタッカーが主になる。

俺をぼこぼこにしたガンナーたちめ、B級に上がってシールドを持ったら覚えてろ……。

というわけで、俺は今日も今日とてアタッカーを相手に個人ランク戦を挑む。決して逃げてるわけではないぞ。うん。

俺のスタイルは弧月による接近戦。いまはC級だからこれしか持てない。

太刀川さんみたいな二刀流にあこがれる。

ダブル旋空弧月!!

とか旋空双月!!とか燕返し!!

とかって決め技作って活躍したい。

あ、双月って弧月の斧バージョンがあっただんだっけか……。なら旋空双月って名前
は使えないか……。まあそんな感じに俺だけの必殺技とか作りたいな。

まだ見たことはないけど、生駒隊の隊長の旋空は生駒旋空とかってほかの人とは違う
みたいだし……。

速くおれもB級に上がりたい……。

二刀流……。いいよね。

そしてそんなこと考えながら戦っていると一つ気づいた。

鞘を左手で持てばC級のトリガーでも二刀流っぽく戦えるんじゃない？

左手で受け太刀して右手の弧月で相手を切る。

うん、いける!!

……。いけなかった……。

ブレードと鞘の耐久性の違いを見誤っていた・・・。

1回2回ならいけたけど、速くて3回、多くても7回の受け太刀で鞘が壊れてそのまま切られた・・・。

けど、数回は耐えられる。それに受け太刀しきれないなら相手の動きのけん制に使えばいい。

鞘だからダメージはほとんどないが衝撃は伝わる。それなら崩しに十分活用できる。やっつけてやる！

その後、明野雅樹は弧月と鞘の二刀流での戦闘スタイルを確立し、最初は負けが続いたが徐々に勝ち星を増やし、勝率が8割を超え、椿、浅上とかなり速いペースでポイントをためるようになった。

正規隊員の会話

合同訓練、訓練ブースにて

「どうだ、嵐山。今期の新人は。めぼしいのはいたか？」

「風間さん！お疲れ様です。そうですね、今期の新人は黒江や緑川といった超大型の新人とまではいきませんがかなり早いペースでB級まで上がりそうなのもいますよ。」

それ以外の新人もだいたい伸びしろはありそうです。

例えば、あそこの三人組。トリオンの量も正規隊員に引けをとりませんし、まだ動きに固いところはありますがもつと自分と相手を知れば一気に伸びると思います。」

「敵を知り、己を知れば・・・か、楽しみだな。」

「はい!!あとは・・・そうですね。アタッカーなら3人、月末から来月の上旬あたりに昇格しそうな人がいますね。名前は・・・、椿、明野と・・・、日比野ですね。」

椿君はおそらく今期の新人の中で一番優秀なアタッカーですね。剣道の有段者で全大会上位に食い込む腕前だそうで、単純な弧月の腕なら正規隊員を含めても上位に食い込むでしょう。あとはトリオン兵との戦い方にもう少し慣れれば言うことなしですね。」

明野君は弧月と鞘の二刀流という面白い戦闘スタイルを確立して戦っています。」
「弧月と鞘だと?」

「はい。左手に持った鞘で相手の攻撃をいなすか胴体を薙いで右手の弧月で攻撃するスタイルです。鞘だとダメージはほとんど通りませんが、衝撃は伝わりますから。」

「なるほど。耐久性の劣る鞘でも直接受け太刀しなければ十分戦えるか。」

「基礎のない状態での二刀流はむずかしいですから、まねしようとしていた人もいました。だが断念して今はそのスタイルは彼だけです。」

正直なところ、元の地盤のなかった彼が今期で一番急成長していますね。」

「そうか……。B級に上がるのが楽しみだ……。」

「彼ら以外にもめぼしい人は何人かいますから、風間さんからも時間があつたら指導してあげてください。」

「ああ。了解した。悪かったな、忙しいのに時間を取らせて……。」

「いえ! 気にしないでください。それでは、俺も仕事があるので失礼します。お疲れさまでした!!」

「ああ。」

A級3位風間隊長こと風間蒼也が立ち去ったのちのこと。

「ううお!!マジか!」

「文句なしの今期の新人で最高記録ですね」

一緒に訓練指示を行っていた諏訪隊の諏訪と堤が驚嘆の声を上げた。

「諏訪さん?堤さん?どうしました?」

「おう嵐山、新記録が出たぜ。といっても今期新人の中だが・・・」

「捕獲用トリオン兵を相手に13秒だ」

「13秒?前の記録確か椿君の38秒でしたよね?」

訓練用の捕獲用トリオン兵は攻撃性能が下がっている代わりに防御性能が高くなっている。それをC級のトリガーで13秒とは・・・

「確かにそのタイムなら緑川達には及ばないもののC級隊員の中では今期及び前期までをも含めたところでもかなり上位に食い込む記録ですね。」

「誰がその記録を出したんですか?」

「浅上ってシューターだな。分割なしのバイパーぶっこんでやがった。一発目は外したが2発目はうまく調整してたぜ。」

「浅上・・・」

「それにキューブの大きさも相当なものだった。ありやあ結構な戦力になるぜ。」

「

「それはぜひとも楽しみですね・・・。」

「おうよ。」

「おっと、すみません、もう少し見ていきたいのですが。狙撃手希望隊員の移動誘導があるので行つてきます。その間、ここにいる人達への指示をお願いします。」

隊結成までの課題

樁のポイントが3800、私たちのポイントが3400を超えたあたりで一度3人で集合した。

ボーダー内部にはファミレスのようなラウンジがあり、C級隊員でも利用できる。

「さて、集まってもらったのはほかでもない。そろそろ、私たちが避けてきた問題を解決していく必要があるからだ。」

樁は今週にも、このペースなら私と雅樹も来週中にはB級へ上がれる。そうなればこの三人で新しく隊を結成できる。そうなれば、いくらか決めなければいけないことがある。

「避けてきた問題？誰を隊長にするかとかか？」

「それも決める必要があるが……。それに關してはすぐに決まる。」

「そうだね。すぐに決まるね。」

「誰がやるんだ？俺は樁でも雅樹でもどちらでもいいぜ？」

「おまえ（雅樹）だよ!!」

「俺？どうして??隊長ならいろいろ仕切らないといけないしそれなら俺より二人のほうが

が適任だろうか？」

「基本的にはそうだな。けど、雅樹も俺が想定外のこと起きた時に弱いのは知ってるだろう？ 隊長として・・・現場で臨時に指揮をとるっていうのが私には苦手なんだ・・・。そもそも隊長は性に合わないしな・・・。」

「僕も隊長つて柄じゃないからね・・・。隊長は雅樹に任せる。」

「まあ二人が言うならわかった。俺が隊長をやろう。けど厄介ごとばかりを押し付けるなよ?。」

「そこは信頼してるから大丈夫だ。基本的な作戦の立案や本部への報告などで必要な書類とかは私と椿でやるさ。いろいろ心配だからな。」

「・・・それって信頼っていうのか?。」

「ろくなことにならないって信頼しているのさ。」

絶対に面白さを優先したり、面倒くさがったりするからな。

まあそれと隊長になると定例報告やらで余計な仕事も増える。それを押し付けるわけだからな、手伝える書類仕事とかはこっちでやらないと申し訳ない。

ちなみに、私の雅樹への信頼に関して、椿はニコニコと笑顔を浮かべており、否定をするそぶりは一切ない。

「だから雅樹は僕たちが立案した作戦の中からどれがいいのかと、想定外の時が起きた

ときとかの指示を頼むよ。」

「わかった。引き受けた。で、これじゃないなら俺たちが避けてきた問題ってなんだよ」

「オペレーターだ。」

「あゝ」

そう、オペレーターこそが私たちが早急に解決する必要のある問題である。

オペレーターがいなければ隊を結成できない。全員がB級に上がろうとしている今、この問題を解決しなければいけない。

「確か隊結成の申請を送ればオペレーターがいなくても場合本部から紹介されるんじゃないかな？ それじゃあダメなの？」

「あくまで紹介。どちらかといえば求人に近い状態みたいだから確実に決まるというわけではないみたいだ。だから、私たちの方でも勧誘していく必要がある。」

それにオペレーターならだれでもいいというわけでもないからな。結成前に顔合わせをして、私たち3人との相性とかも見ていかないと・・・。」

結成したけどすぐに解散しました・・・とかになつたら目も当てられない。

「というわけだ。まあ今日明日決めようとか言うわけではないし、そう簡単に決まるものでもないから、いいオペレーターがいらないか情報を集めておいてくれないか？」

「ん、まあわかったよ。こっちでもいろいろ探してみるね。いい人がいたらその都度グループ通信で連絡しようか」

「了解」

オペレーター候補

「さて、二人にああ言った手前、私が率先して動く必要があるか……」

オペレーターは入隊後本部での勤務で機器の扱い等を学び、それから本人の希望と戦闘員の希望で隊専属になる。

つまり、今まで訓練ばかりしてきた私たちとあまり接点がない。

そもそもどこで見つけなければならない……

本部所属のオペレータールームに直接いくのはなにか違うだろうし……

ラウンジでフリーそうなオペレーターを見つけて声をかけるといいうのも現実的じゃない。

と困っていると、

「よう、どうした何を困ってるんだ？道にでも迷ったか？」

考えながら歩いていると正規隊員らしき男性が話しかけてきた。あの人は確か

……

「先輩は確か……柿崎隊長、でよろしかったでしょうか。」

「おう、そうだが、俺のことよく知ってたな。」

「入隊してから正規隊員の方のログは全部見ましたから。柿崎先輩の堅実な作戦はとても参考になります。」

「ああ、すみません。自己紹介が遅れました。私は浅上博雅と申します。まだC級隊員ですがもうすぐB級に上がる予定です。」

「おう、よろしくな。けど、そんなにかしこまらなくてもいいさ。ここは入ってくるいろんな年のやつがいるし、入隊時期も様々だ。俺より年下の先輩とかもいるからそうかしこまつてちや息がつまるし、面倒臭い。」

「わかりました。そういつていただけると助かります。」

「それから堅実はよしてくれ、単に臆病なだけさ。」

「いえ、ベイルアウトがあるとはいえ、戦闘に危険はつきものですから。臆病なことは素晴らしいと思います。」

「そうか、そういつてくれるとこつちもうれしいよ。それで、お前は何を考えてたんだ？道に迷ったか？C級隊員はこつちに用はあまりないはずだろ？」

「道に迷ってるわけではないのですが、歩きながら考え事をしていまして……。」

「考え事ねえ。戦闘のことか？それなら俺はあんまりたよりになれねえな。シューターの戦いはからつきしだ。」

私の困っている様子を見て話しかけてきたことからまかるけれど、この先輩、かな

りのお人好しのような。こうして相談にのってくれようとしてくれているし、隊長としての素質を感じる。

ん？

「いえ、戦闘のことも悩みはなくなはすけど今は別のことで……というか、私がシューターってどうしてしているんですか？話しましたっけ？」

いや、話してないはずだ……。ならどこで？

「ん、ああ。有望な新人の情報なんて勝手に入ってくるもんだ。特にお前は捕獲用の大型トリオン兵を1.3秒で倒してた。さすがだな。」

「C級隊員の訓練用のトリオン兵は攻撃能力が低いですから。攻撃に専念できるだけです。実際ではそうはいきません。」

「攻撃能力が低いにしたってそのぶん装甲が固くなってるはずだぞ。それは優秀ってこと。しかし別のことか、どの隊に入るかとかか？お前ならうちの隊で歓迎するぞ。」

「いえ、もう友人と隊を組むことを決めてますので。すみません。悩み事はその時にオペレーターをどうするかなんです。オペレーターに知り合いがいなくて……。隊を結成してから本部に掛け合って募集するより自分たちで直接あつて勧誘したいと思いまして……。」

「なるほど。オペレーターか……。それなら少しは力になれるか。ちよつと付き合え。」

「本当ですか？ありがとうございます。」

私は柿崎隊長の後を歩いていくことにした。

ザキさんのおせっかい。

柿崎隊長についていくと、柿崎隊の作戦室だった。

「ここが、俺たちの作戦室だ。おっい！真登華はいるか？」

「はっい。いますよ。どうしましたっ？あら、誰ですその人？」

「え、何々お客さん？こんにちは。」

「隊長。おかえりなさい。その人は……。」

「おう、客だ。今のC級の中でトップクラスのシューターの浅上……だ。すまん、下の名前は忘れた。」

「浅上博雅です。呼び方は好きに読んでいただいて構いません。それとトップクラスはやめてください。恥ずかしいです。」

「改めましてよろしくお願ひします。照屋さんと巴くんでしたよね。そちらがオペレーターの方ですか？」

「そうだ、俺たち柿崎隊のオペレーターの宇井真登華だ。他はログで知ってたか。」

「宇井真登華です。よろしく。」

「それで、ザキさんその人はもしかして、うちの新しい隊員ですか!!」

「浅上・・・シューター・・・。ああ大型トリオン兵を13秒で倒したっていう・・・。そんな人がうちに来てくれるなら心強いですね。隊長すごいです。よく引つ張つてきましたね!!」

無邪気な照屋さんと巴くんの視線が痛い・・・。

「残念ながらそうじゃねえよ。もうほかのやつと隊を作るって決めてるらしい。で、それにあたってオペレーター探してるみたいだからな。真登華にいい人いたら紹介してもらおうと思つてな。」

「なるほど。それで私を呼んだんですね」

「新しい隊員じゃあないんですね・・・。でもでも、いつでも来てくれていいですからね！」

新しい隊員じゃないと聞いて巴くんが露骨にがっかりしている。非常に申し訳ない・・・。

「期待させてもうしわけない・・・。それで、いいひとを知っていたら紹介していただけませんか？」

頭を下げてください。が、戸惑いというか何か考えてる様子が真登華さんから感じる。

「浅上、さつきも言ったが固いぞ。もつと力抜け。真登華も文香もお前と年同じかお前

よりしただろうか？今いくつだ？」

「私は今年で16です。」

「なら同い年だ。もつと気楽でいい。二人もちよつと戸惑ってる・・・。」

「わかりました。」

柿崎隊長が助け舟を出してくれた。

さすがに年齢までは把握していなかったし、私より先に入隊した先輩なので敬語を使っていたのだがそれがだめだったようだ。もう少し、気楽に、気楽に・・・。

「じゃあ言い直して・・・。いい人がいたら紹介おねがいます。」

「まだ固いよ。紹介してよとかでいいの。」

「紹介して・・・。初対面の人には言いにくいのだが・・・じゃない、言いにくいのですが・・・。」

「あ、ちよつといま素が出た。普段の感じでもいいからね。」

「おう、真登華もつといつてやれ。」

普段の感じ・・・。普段の感じ・・・。

「わかった。なるべく努力する。不快に感じたら言ってくれ。気を付ける。」

「そうそう。それが素なんだね。」

「それでオペレーターの仕事が・・・。」

「うんいいよ。ちよつといいひとがないか聞いてみるね。」

浅上君はまだC級だから今すぐにつてわけじゃないよね？いつまでに見つけてきてほしい？それから誰と組むのか教えてもらつてもいいかな？」

「隊を組むのは同じC級の椿健太と明野雅樹の二人。椿は今週にも、私と雅樹も来週にはB級に上がるつもりだから来週にはオペレーターを決めたい。」

「今期の新人で優秀な三人が集まるのね。それならオペレーターやりたいって子も多しとおもっただけど……。椿君がいるのね……。」

椿がいることで何かあるのだろうか？

「椿がいるとなにか問題があるのか？」

「いや、椿くんが悪いんじゃないんだけど。椿君もてるから……。希望が殺到しそう。で、ほとんどが椿君目当てになると思うの〜」

「あく。確かに椿はもてるから……。うまくいくならいいけどトラブルになりかねないか……。い。」

「だと思ふよ。まあみんながみんなつてわけじゃあないだろうし、探しとくね。隊長は浅上君？」

「いや、私じゃなくて明野雅樹だ。私と椿は隊長つて柄じゃないから。」

「そつかな。まあいいや。了解。引き受けたよ〜」

「ありがとう。真登華さん。」

柿崎隊の人と連絡先を交換し、私は柿崎隊訓練室を出た。

オペレーター加入と初ミーティング

柿崎隊とのやり取りから三日後。

椿がB級に昇格した。

この時点でのポイントは私が3900。雅樹が3850を超えたところ。すぐにB級に上がれるだろう。

そしてこのタイミングで宇井さんから連絡があった。

候補が見つかったので紹介してくれるという。

ということで、明野隊（予定）は再びラウンジに集合した。

そして、いつもの3人に加えて二人の女性、一人は宇井さん、そしてもう一人は……。どうも。明野君と椿君は初めましてだね。柿崎隊の宇井です。よろしくね。浅上くんは頼まれてた専属オペレーター希望でいい人見つかったから連れてきたよ。」

「初めまして。宇井さんの紹介できました。村中桔梗です。えっと、よろしくおねがいします。」

「「「ちらいそ、よろしく」」」

それぞれの自己紹介を済ませる。

「桔梗ちゃんはねえ。ほかの能力もさることながら、とくに並列処理と情報分析能力が高いんだ。3人みたいに今期の新人のなかで優秀な人だよ。どうかな？」

「まさかそんなにすごい人を引つ張ってくれるとは思っても思ってもみなかった。本当に助かる。」

「えとえと・・・。宇井さんが言ってたように並列処理と情報分析が得意です。なので、3人のサポートは任せてください。4人に増えても多分大丈夫なので、わたしのことは気にせずに勧誘していただいたのでかまいません。」

戦闘員は一人から最大4人まで。戦闘員が一人なのは漆間隊だけで、基本は3人。戦闘員が増えるとそれだけオペレーターの負担が増えるからただ増やせばいいということでもない。

けど、この村中さんが4人でもサポートできるといふのならすごく助かる。

逃がす手はない。

椿を雅樹を見ても考えは同じようだ。

「4人目を入れるのかはまだ考えていないのだけれどその選択ができるだけで助かります。宇井さん。こんな人を紹介してくれてありがとうございました。」

「いえいえ。お互いに問題がないようですよ。よかったよ。また何かあったら言ってね。私は隊に戻るから。あとは4人で話し合ってくださいね。」

「「はい。ありがとうございます。」」「
宇井さんは私たちを残して帰っていった。」

さて、じゃあ4人で初めてのミーティングと行こうか。

「改めてよろしくね。村中さん。それじゃあ。ぼくたちが4人になってから初めてのミーティングを始めようか。」

「はい。よろしくお願ひしますね。」

「あまり人のことを言える義理ではないのだけれど。チームメイトであることだし、かたいことはなしにしよう。」

「ヒロの話し方が一番堅苦しいと思うけどな……。昔みたいに一人称俺に戻してもっと俺らみたいに話してもいいんだぞ?」

「それは言ってるね。まあ僕らはもう慣れたけど。」

「・・・まあ、考える。」

クスッと小さく笑う声が聞こえた。

「わらっちゃってごめんささい。浅上君も最初から一人称が私だったわけじゃないんですね。」

「一人称が私になったのは中学の終わりからだな。んつとな〜」

「いいからミーティングを始めるぞ!!」

話が嫌な流れになりそうだったので切り上げようとしたが・・・

「まあまあチーム内での親睦はだいじだよ。こういう話し合いも大事さ。」

「さすが椿（くん）。話がわかる（ね）。」

椿の阻止により切り上げられなかった。

こうして記念すべき初のミーティングは雑談会になった。

確かに村中さんとは初対面であるから大事だろう・・・。

が、私だけを話のネタにさせるつもりはない。

こうなれば二人も道連れにしてやる・・・。

初ミーティング（雑談会）は大いに盛り上がりを見せ、チーム内での親睦が深まった。

B級昇格くランク戦

昇格とトリガー

初ミーティングから四日後

私と雅樹もついにB級へ昇格した。

そしてそれを機に明野隊結成の申請をし、受理されたところで結成祝いをする事になった。

「みんな、B級昇格おめでとう。これからA級目指して一緒に頑張ろうね。」

「がんばろう。」

「がんばろうぜ。」

「ああ、頑張っていくとしようか。」

「みんなB級に上がったってことはトリガーも訓練用から本格的な戦闘用になったんだよね？トリガーは何を入れるの？」

村中さんが聞いてきた。

「私と雅樹はまだ上がったばかりだからな。これから考える予定だ。椿はもう追加したスロットにトリガー入れたのか？」

「一応シールドとバックワーム、旋空、それから前に言ってたグラスホッパーをいれたよ。空きスロットはまだ2つあるから開けたままに使用かほかになにか入れようか考えてるところ。」

入れなかったら入れなかったでその分戦闘中に使用するトリオンに余裕が増えるからそれはそれでありかなって考えてる。ぼくは二人に比べてトリオン少ないからね。」

「まあ椿ならそのあたりだよな……。離れた相手を攻撃する手段は身につけなくていいのか？射撃トリガーとか。取り回ししやすいようにハンドガンタイプでもいいし、シューターみたい直接打ち出すのもいいと思う。」

「それも考えたんだけどね。一応旋空である程度の距離なら攻撃できるしグラスホッパーで間合い詰めることもできるから。銃と弧月の切り替えで隙もできるだろうし、シューターみたいなタイプにしても射撃を意識してそこを狙撃されても困るからね。」

「なるほど、確かにそうか。急に戦闘の選択肢が増えてもとっさの判断が鈍るだけだからな。慣れるまではそれがいいか。」

「B級のランク戦は団体戦だし、油断すると狙撃とかバックワームでの奇襲があるから気を付けないとだね。」

村中さんが補足する。

「じゃあそれを踏まえて雅樹はどうするつもりだ？」

「わたしそれすごい気になる。」

「俺は・・・弧月の二刀流にしようと思ってるぜ。太刀川さんみたいな。あこがれるよな。」

「その場合だと前に行つてたガンナーも兼用してのオールラウンダーはいいのか?」

B級のトリガーのスロットの数は左右4つずつの8つ。このうちバググワーム、シールドは外せないから残りは五つ。そして・・・

「弧月は基本的に旋空とセットになるから両方にいれるだけで空きスロットは一つだな。」

「そのスロットにガンナートリガー入れてもいいがどうせなら二種類入れたいだろ?片方をスコープピオンかレイガストにしたほうがいいんじゃないか?」

「う、それはそうだけど・・・」

「雅樹はすでに鞘も使つての二刀流があるから、左右に入れなくてもいいんじゃないかな?どうしても弧月にしたいなら片方は旋空を入れないとか・・・」

「鞘は耐久力に劣るからな、いろいろ扱い難しいんだぜ。C級では何とかなつたがB級以上だときつとつらい。」

たしかに雅樹の言うことももつともだ。鞘との二刀流で上がってきたのだからその戦闘スタイルを崩すのは難しいだろう。盾と鞘では使いまわしも変わるだろうか

ら……。

「雅樹。それなら左手スコープオンにしたらどうだ？スコープオンは持つ必要ないからな。左手で鞘を出しつつ別のところからスコープオンを出して戦えば実質3刀流で相手の手数上回ることができるとはならないか？」

「ああ。それいいね。」

「3刀流……。さてよ……。それって右手にスコープオン入れて弧月をオフにすれば4刀流もできるってことか？それ最強じゃね？」

「最強かどうかは雅樹君がそれを使いこなせるかに関係すると思うよ。」

「村中さんに同意見。そしてそれだとやっぱりオールラウンダーよりアタッカーって感じになるけどいいのか……。？それにグラスホッパーやカメレオンみたいなオプシオントリガーもいれなくていいのか？」

「いいとおもったけどそうなるよな……。」

「とりあえず最初から考えるところか。右手側に弧月、旋空、シールドはもう決定だろうから空きスロットは一つ。左手はシールド、バックワームが決定だから残り2つ、いや、いつそのこと右手にバッグワームを入れたらどうだ？」

左手にスコープオン、射撃トリガー二つ、シールド。さすがにオプシオントリガーは入らないが左右にブレードをもつならそうなる。射撃トリガーを減らすというのもあ

りだが……。」

「まあオプシヨントリガーは今はいいや、また入れたくなったらまた考える。とりあえずはそれで!!」

これで雅樹も決まった。あとは……

「残りはヒロだが……偉そうなこと言ってるんだ。もう決まってるよな?」

「もちろん。私はずっと前から決めてたさ。右手がバイパー、ライトニング、スパイダー、シールド。左手にアステロイド、メテオラ、バググワーム、シールドだ。」

「スパイダーってなんだっけ?」

「スパイダーはワイヤーを張るトリガーだ。足場にするもよし、相手を転ばせるのに使ってもよしだな。A級の嵐山隊の木虎さんや片桐隊の隊長が使ってる。私は接近されるのと弱いからな。これで相手を足止めしながら戦うつもりだ。」

「それだけじゃないよね。メテオラトラップも作るつもりだよね?」

「さすが椿。よくわかってる。」

「メテオラトラップ?」

「えつとね雅樹君。メテオラトラップっていうのはメテオラを弾速、射程0で作ったメテオラのことなの。衝撃を加えると爆発する爆弾みたいな感じね。それをスパイダーと組み合わせると、スパイダーに引っかけたら爆発するトラップができるの。」

「なるほど。」

「私はスナイパーも兼任するからね。居場所がばれれば狙われやすい。だからその対策だよ、メテオラトランプとただのスパイダーがあれば相手は進むことをためらうからね。逃げる時間が稼げる。ただ、村中さんにスパイダーで視覚支援をお願いすることになるけどいいかな?」

「もちろんオツケだよ。スパイダーを味方に見やすいようにすればいいんだよね。」

「そうそう。助かる。それとメテオラトランプのワイヤーは別の色で表示するようにお願い。場合によってはこの二人が足場に使うこともあるだろうからうっかりメテオラトランプに引つかからないようにしないと・・・。」

「そうだったら俺はお前を恨むからな。」

「ははは・・・僕も。そうそう、スパイダーの理由は分かったけど、なんでライトニングにしたの?狙撃用トリガーで一本しか持たないなら普通は万能型のイーグレットじゃない?」

「イーグレットが一番いいんだろうが、あいにくと私は狙撃の訓練はこれから積むからな。まずは当てやすいライトニングを優先した。ライトニングなら弾速が早いから当てやすいし、速射性も高いからこれから狙撃を始める私にも使いやすいと思ってるな。」

また訓練積んでほかのも使えるようになったらイーグレットがアイビスに切り替え

る予定だ。」

「なるほど。それがいいね。」

「それじゃあ使用するトリガーもきまつたところだし、今週から防衛任務と来週からのランク戦。改めて頑張っていこうか。」

「「お〜!!」」

その後は再び雑談会となり、結成祝いも大いに盛り上がった。

各トリガーの試運転

トリガーをセットしてもらい、私は個別訓練室へ向かった。新しく入れたトリガーの性能を試すためだ。

まずはバイパー。

正規の戦闘用だけあって、出力が少し上がっているように感じる。

では次、アステロイド。

まっすぐしか飛ばない代わりに威力が確かにバイパーよりも高い。相手の防御が固いときや決め球によさそうだ。

最後にメテオラ。

威力はアステロイドとバイパーの中間といったところだろうか……。

だが何よりも爆発するから思っていた以上に広範囲の攻撃ができる。調子に乗っていると自爆のリスクもあるから注意が必要か。

トラップとしての使い道はスパイダーとの併用と、キューブとして出しておいてライトニングやバイパーで起爆させるといったところか……。私が起爆する必要もないし、かくして設置して、視覚支援でチームメンバーにだけわかりやすいようにすれば、味方

もうまく活用できるな。とどこどこに仕掛けるのもありか……。

次はライトニング。

弾速が早いがほかの狙撃トリガーに比べると威力の劣る狙撃銃。

それだけシールドで防がれやすいだろうから、狙う場所には注意が必要か。

両手のトリガーを同時使用してのフルアタックの最中ではない限りは足や手の部位

から狙っていくのが正解か……。

頭とかの急所はさすがに防がれそうだ。

ひとまずは現時点での私の射程はライトニングで最大200メートルというところ

か……。

止まっている状態でそれだから実際は100〜150メートルといったところか。

走っている相手に充てるのは今のところはまず無理そうだ。

ひとまずは練習あるのみだが……。

シールドの使い道は簡単か。

もともとの耐久性と大きさを変えることでどれくらい変わるのか確かめないとな。

シールドは確か座標を固定した状態で出すと耐久力が上がるんだったな。その変

化も今度調べておこう。

ひとまずは一通りトリガーを使っただけ。まあ可もなく不可もなくといったところか。自分の選択肢が増えるのはうれしいが、向こうの選択肢も増える。今まで見たいにバイパーだけで倒すのは難しいだろう。

B級なりの戦い方を身に着けないとな。

「じゃあ最後にアレを試すか・・・。」

合成弾

左右の複数の弾を合成させて放つ弾丸。

私が作れるのはバイパー+アステロイドのコブラとバイパー+メテオラのトマホーク。

さて、どんなものか・・・。

コブラは強化版バイパーといった感じか。威力や弾速、射程が大幅に上がってる。

トマホークもメテオラがバイパーのように軌道設定できるようになり、威力もコブラほどではないけど向上し、強力になっている。

どちらも実戦で使えれば果てしなく協力だな。

あくまで実践で使えれば・・・だが。

さすがに合成するのに30秒以上かかっては使うに使えない。

合成弾を作っているときにはほかのトリガーは使えないからバグワームで隠れることもシールドでガードすることもできない。つまりは30秒以上無防備でいないといけない。

せめて10秒以下で合成できるようになるまで実践での使用は難しいな。

狙撃も今はあまり精度も低いだろうから最初に相手の場所と誰かを確認するだけか。

それ以外はスパイダーやメテオトラップを設置しつつも通りパイパーでの戦闘が有効かな。

ランク戦が楽しみだ。相手は誰になるだろうか。

スナイパー初訓練とかわいい指導者

二日後。最初のランク戦の相手が間宮隊と早川隊に決まったと雅樹から連絡があった。

さつそく情報収集に移りたいが、今日は狙撃手の合同訓練とそのあとに初の防衛任務がある。情報収集は明日になりそうだな。

「まあ、なにあれ、初めての狙撃手合同訓練だ。昨日練習はしたが、ほかの人とどれくらい差があるのかも確かめないとな……。」

今日の訓練内容は通常狙撃訓練。

100メートル先にある直径50cmの的へ狙撃する。五発ごとに的が遠くへ移動し、命中場所が中央に近いほど得点が高い。

「あまり人が多いところは苦手だし、二階へ行くか。」

狙撃手訓練は一階と二階があり、A、B級の狙撃手が来る一階がC級隊員にも人気だ。

私は人の多いところはあまり好きではないし、集中もできるから2階へ向かう。

最も奥のスペースから少し手前の箇所場所をとる。

一番奥などの端はなんだか言って注目されることが多い。

いい場所が取れた。

と、思っていると、後ろから視線を感じた。

振り返るとマスクをした女の子に見られていたが、私が振り返ると視線をそらして移動しようとしていた。

「ん？ああ申し訳ない。君の普段の場所だったかい？」

「・・・そうだけど。別に私の場所ってわけでもないから・・・。」
人見知りが強いのだろう。

声が小さくて、聞き取りにくかったが、いつもの場所ということであっていたようだ。
あっていたからには移動しないとぼつが悪い。

「それなら私は移動するよ。いつもの場所のほうが落ち着けるだろうからね。」

「・・・いいの？」

「気にする必要はないよ。私は今日が初めての訓練だからどの場所でも変わらないしね。」

「・・・そう。」

荷物を持って二つ隣にずれる。移動するときすれ違いざまに・・・

「・・・ありがと。」

かわいらしい感謝の声が聞こえた。

さて、気を取り直して訓練開始と行こうか。昨日の練習した通り、静止した的だから200メートルまでは何とか当てられる。訓練だからライトニングではなくイーグレットのため最初少し違いに戸惑ったけどまあ問題はない。

が、200メートルを超えてから当たる確率が下がってきている。

どうしても弾が少し右下にそれる。うまく調整しないと。

「・・・ガク引き。遠くの的を当てようとして引き金引くときに力が少し入りすぎてる。親指側にも同じだけ力を込めて銃を固定しないと・・・。」

隣から小さなアドバイスが聞こえた。

ガク引き・・・引き金を引く時にかかる力で銃の向きが変わり狙いがそれる現象だったか。前にアニメで見た。

「・・・アドバイス助かる。」

いままでシューターだったからそのあたりのことに気を付けていなかった。

さすがに言われてすぐに治るものではないが、そこそこに中央に弾が集まるようになった。あとは、反復練習か・・・。

「・・・気にしないでいい。気になっただけ。」

なかなかかわいいところのある人だ。

つと。訓練はこれで終わりか……。

142人中131位……握って初日ならこんなものだろう。最下位じゃなかっただけ良かった。いや、あのアドバイスがなければ最下位だったかもな……。

「アドバイス助かった。おかげで最下位をまぬ……」

いない……。

私が順位と振り返りをしている間に帰ったようだ……。

悪いとは思ったが順位を見ると20位となっていた……。かなり腕のいいスナイパーのようだ。

スナイパーのB級昇格条件は3週連続上位15%に入ること。任務などで全員がいつも参加するわけではないため、実際には上位20〜25%あたりでいいようだが、それでもほかのポジションの人に比べるとかなり厳しい。

その上位に入っていることは腕のいいスナイパーのようだ。

いつから上位15%に入っているのかはわからないが、そのうちに昇格するだろう。

その時は誘ってみるのもありか……。

いつもあの場所って言っていたから次の訓練でもまた会えるだろう。

その時に誘ってみるのもいいか。

初の防衛任務

狙撃手訓練の後、初の防衛任務へと向かった。場所は鈴鳴支部だ。

ボーダーの防衛任務は2、3日に一回入っており、全部で6つある支部のうち、玉狛支部を除いた5か所にそれぞれの隊が派遣されて行う形になる。

基本はその5チームだが、私たちのようにB級に上がりたてのチームが防衛任務にあたる場合は、最初の数回はほかの隊の人と一緒にを行うようになる。

なお、ほかの隊といっても、防衛任務にもっと出て稼ぎたい、暇、などの理由から混成部隊が作られることもよくあるとのことらしい。

そして、私たちと一緒に防衛任務にあたることになった隊は……

鈴鳴第一隊、あるいは来馬隊だ。

「僕が隊長の来馬です。今日はよろしくね。防衛任務の内容は知っている通り、出現したトリオン兵を撃退することなんだけど、初めてでいろいろ不安は多いと思うだろうと一緒に頑張ろう。」

「(こちら)こそ、よろしくお願いします。」

雅樹が代表して挨拶する。

「さて、お互いに3人の部隊みたいだし、僕たちが一人ずつついて、必要と思ったときにサポートをしたのでいいかな？僕たちは基本的には見守ってるから。最初は自分たちだけと思って行動してみて。って形でいいかな？」

基本的に戦うのは私たちだけで、危なくなったらサポートをしてくれるという方法と一緒に防衛任務にあたってくれるようだ。

今の私たちがどれくらい統率のとれた行動ができるか、それを実戦で試すいい機会だ。

失敗しても先輩がフォローしてくれる。頼もしい。

「はい。よろしく願います。みんなもいいよな？」

「もちろん、とてもありがたいです。」

「わかった。さて、それじゃあ誰が誰につこうか……。明野君たちは誰がどのポジションなのかな？」

「明野と椿がアタッカーで私がシューターです。明野はオールラウンダーを目指していて、アサルトライフルタイプのガンナトリガーを持っているので、来馬先輩は明野についていただいてもよろしいでしょうか。」

村上先輩は同じアタッカー専門の椿と、私はスナイパーも兼任しているので別役さんについてもらいたいのですがいいでしょうか？」

「似たようなポジションの人のほうがいいから、それが一番よさそうだね。わかった、それでいいこうか。二人ともそれでいいよね。」

「問題ないっす。」

「こちら大丈夫です。」

別役さんと村上先輩も賛同してくれた。

互いの自己紹介もかねて、会話をしていると警報が鳴った。

「みんな、ゲート発生、警戒区域内に誘導成功。数は8。パターンは飛行型2、戦闘用5、捕獲用大型が1だよ。マップにタグ付けて表示しとくね。」

「了解、ありがとう村中さん。」

位置情報が送られてくる。ふむ・・・

「飛行型のトリオン兵に関しては私が引き受けるよ。雅樹と椿で残りの戦闘用任せられる？ 私も終わらせたらすぐに合流するから。」

「了解。一応初めてだし、現実性を重視して僕と雅樹は二人で一体ずつ倒していくようにするよ。」

基本的な作戦の立案は私が行い、村中さん、椿が修正、最終的な決定、変更は雅樹が

する。みんなで決めた行動指針だ。
「了解。それじゃあ、行動開始!!」

初防衛任務 with 来馬隊

狙撃位置についた。同時に、飛行型トリオン兵を視認した。

距離にして200以上だろうか。さすがにバイパーやアステロイドでたたかう距離じゃない。ライトニングを出し、狙いを定める。

「こちら浅上。目標の飛行型を視認。攻撃開始する。」

飛行型トリオン兵の動きはそれほど早いわけじゃないし、複雑な動きをするわけでもない。静止していなくても当てるだけなら問題ない……。

「全弾命中。ナイス！」

隣で見ている別役隊員が賛辞をくれる。

「ありがとう。けどまだ落とせてないから。」

ひとまずは3発、全弾命中したが急所は外しているし、まだ稼働している。反撃はないようだし。攻撃続行でいいだろう。

続けて5発撃ち1発外したが最後の1発が急所にあたり墜落する。墜落と同時にマップ上での反応も消えた。

「飛行型。一機撃墜確認。もう一体のほうを攻撃する。」

「了解。こちらも戦闘型トリオン兵を視認したよ。迎撃するね。」

雅樹と椿も敵の位置まで移動し、迎撃を開始するようだ。早く終わらせて合流しなければ……。

速く終わらせる!!

2 発外したが10発あてて倒した。よし。じゃあこのまま合流を……。

「飛行型を撃破。これから合流する。」

「戦闘型5体撃破。ゆっくりでいいぞヒコ。残りは捕獲用のだけだ……。

時間をかけすぎた……。おそらく合流するころにはもう終わってそうだ。

だがだからと言って、このまま帰るわけにはいかない……。

二人までのこり100メートルを切ったところで……。

「警告!!追加ゲート発生 数は8。反応は砲撃型2、戦闘用5、捕獲用1!!」

敵の増援?しかもこのタイミングか……。

「二人とも、いまの状況は?」

最初に出現していた捕獲用のトリオン兵の反応はまだ消えていない。苦戦しているのか、もう終わるのか……。それによって対応がことなる。

と、考えていると、反応が消えた。倒したようだ。

「悪い、少してこずったけど終わったぜ。どうする?」

「ひとまずは砲撃型を優先して倒す。耐久が高いだろうから私のライトニングだと時間がかかる。3人で一気に終わらせる。近い方からいくぞ。」

「了解。」

近くの砲撃用のトリオン兵まで70メートルを切ったところで二人・・・と来馬隊の2人と合流し、そのまま・・・。

「バイパー！アステロイド!!」

「食らえ!!」

私の左右のトリガーによるフルアタック（バイパー分割無し、アステロイド27分割）と雅樹のアサルトライフルによってアステロイドが砲撃型を襲う。

本当はコブラをぶつきたいところだが、走りながらの合成は普段より時間がかかるため今の私にはできない。

ドゴオオオオウオオオオン!!!!

「砲撃型トリオン兵一体はんの・・・警告!!もう一体から砲撃来るよ！よけて!!」

一体目は倒したが2体目から砲撃がくると警告。

もう一体のほうを見ると発射寸前。さすがに止めるのは無理。走って建物裏へ隠れる。

ゴオオオウン!!!

近くの建物が損壊したが被害なし、念のためにシールドを展開していたが必要はなかったようだ。

このまま・・・反撃を・・・

「旋空弧月!!!」

もう一体に攻撃を仕掛けようとしたが、砲撃が私のほうに来るとみて自分のほうに来ないと察知した椿がグラスホッパーで砲撃後の敵を強襲、旋空弧月で急所を両断していた。

「さすが!!」「ナイス椿!!」

私と雅樹で椿に称賛を送る。

「さっきのは二人にとられたからね……。でもまだ戦闘用が残ってる。このまま3人で行くよ。」

「ああ。ひとまずは近いやつから時計回りに倒していこうか……。私は二人が狙っている奴以外で接近してくるやつのをけん制をする……。苦戦するようなら私が倒すから苦戦しても気にしなくていい。」

「お前の分なんか残さねえよ。行くぞ椿!!」

「了解。」

「大変になったら僕たちもいるから遠慮なくいつてね。」

まあ僕たちの出番はなさそうだけど……。でも、最後まで油断しないでね。」
先輩方が頼もしい。

ひとまずは……。二人が目の中の戦闘用トリオン兵に集中できるよう、近寄ってくる敵に攻撃する。

戦闘用トリオン兵は乗用車一台ほどのサイズがある。そのため、マップを見ずに弾道を設定しても簡単に命中する……。移動の仕方から向きもわかるのでそれで急所の目を狙うこともできなくはない。

むしろそのサイズから家の屋根の上って移動するか元住宅地路地の狭い道を通るかしかなく、屋根の上なら視認できるためより正確な弾道が急所を襲うし、路地でも向きを変えられないから道の中央を通るように弾道を狙えば急所を狙える。

が

それはわたしが一体に集中できる時だ。

基本的に2〜3体を意識しながら弾道を設定する必要があり、個人ランク戦でやってきたような相手の行動を読んだ精密な弾道設定ができず、当てることはできてもなかなか

か急所には弾が行かない。

一応分割を減らした威力重視のバイパーと、屋根に上ってきたのをアステロイドで仕留め、2体倒すことはできた。が、自分をほめることはできない。

これがランク戦ならスナイパーによる攻撃も意識しないといけないし、対象も小さく、素早く、そして動きが不規則だ……。つくづく那須先輩と出水先輩には尊敬する。

「旋空・・・弧月!!」

最後に残った捕獲用トリオン兵は雅樹と椿が同時に放った旋空弧月で仕留めた。

練習してたのか？合体旋空・・・。

「みんな、お疲れ様。今のところ増援なし。支部に帰還命令も出てるから、戻ったので大丈夫だよ。ただ、また増援くるかもしれないからそれだけ注意してね。」

第三波はなし、ひとまず追加がないようならこれで初の防衛任務は終了か・・・。

あとは・・・。

「みんな、初任務お疲れ様。すごかったよ。それじゃあ帰還命令も出てることだし、支部に帰って振り返りで行こうか。」

来馬先輩の言う通り、振り返り（反省会）が残っている。

さて、どんな指導があるのか楽しみだ。

反省会

鈴鳴支部へ帰還後。すぐに来馬隊長が集合をかけた。

「さて、帰還してすぐで悪いんだけど、さっきの振り返りと行こうか。こういうことは早いうちにしたいほうがいいからね。」

確かに、振り返りは早いうちにしたほうがいい。それについては私もほかの人も賛成の様子だ。

「まずは、お疲れ様。初めてだったけど僕たちが出る必要はなかったね。君たちだけでも問題ない感じだった。自分たちではどう感じた？」

「そうですね……。これは私と雅樹……。明野に言うことですけど、B級に上がってから持つようになった武器……。アサルトライフルとライトニングですね。その扱いがまだまだでした。飛行型に命中させるのが精いっぱい時間で時間をかけすぎる結果になつてしまいました。もつと急所に充てられるように訓練が必要ですね。」

「たしかにそつすね。隣で見てたつすけど、まだ当たるだけでした。けど、つい最近スナイパーの練習を始めたつていう割には動いてる遠くの的に当てられるだけすごいと思います。」

あの子のおかげというのも大きいだろう。また今度お礼を言おう。

「明野君と椿君はどうか？」

「俺もヒロと同じくまだアサルトライフルの取り扱いに慣れていないのと、銃と弧月の切り替えのタイミングもうまくつかむ必要があります。」

「自分は明野との連携にまだ改善すべきところがありました。明野がブレードトリガーを使っているときは比較的連携をとれますが、銃の時はうまく連携が取れず、倒すのに時間をかけてしまいました。」

雅樹と椿も反省点を述べる。

時間がかかったといっていたがなるほど。そういう理由か。

確かに今までC級だった時は個人訓練ばかりで集団戦はしなかった。

私と雅樹の射撃トリガーなら何も難しいことはないが接近戦の連携となるとそうはいかないだろう。

「確かに、遠、中距離のトリガーと違って近距離のトリガーの連携はシビアだ。味方に攻撃してしまう可能性もあるからな。二人を見ていたが、連携しての戦いはまだまだ訓練が必要だった。」

「銃とブレードの使い分けもだね。オールラウンダーはその場その場でうまく持ち替えないと攻撃がもたついてうまく戦えないからね。」

そつちについてはあまり指導はできないんだけど、アタツカーとガンナー、それとスナイパーの連携ならうちがよくやってるからね。一緒に練習しよう。」

村上先輩、来馬隊長が続ける。

鈴鳴第一隊はアタツカー、ガンナー、スナイパーの編成だからうちとよく似た編成だ。連携の仕方を教えてもらえるとこののなら願ってもない。

「お願いしますー。」

3人そろってお願いする。

「うん。よろしくね。さて、自分たちでもよく振り替えてると思うけど、それ以外で僕たちが気になったところを言わせてもらうね。」

まず一つ目。浅上君の狙撃位置なんだけど、少し悪かったかな。飛行型の狙撃はできるけど、二人のサポートができるい位置じゃなかったからね。だから飛行型を撃墜してから長距離移動しないといけなかった。」

確かに狙撃位置によっては飛行型を撃墜してそのまま二人のサポートもできたはずだ。

私の腕だと連携は無理でも近寄ってくる敵のけん制くらいはできた。

味方との連携がまだ不十分ということか・・・。

「二つ目、敵の増援に対してうまく行動していたとは思うけど、最初の行動の際に敵の増

援が来るかもって思つて行動していないとだめだよ。最悪二人が囲まれて……つてこともあるからね。」

確かに……。目の前の敵にばかり注目が行き、増援について意識していなかった。気を付けないと……。それに、さっきの狙撃位置について、場所がよければたとえ二人が囲まれたとしても狙撃で退路を作ることができる。

狙撃位置を選ぶときはこのことを念頭に置かないと。

「3つ目。これは鋼からだけど、最後の二人で撃った旋空弧月。かなり強力だけど、タイミングを合わせようとして発動が遅れていたね。あの遅れが命とりになる可能性もあるからするにしてももつと早く合わせられるようにしよう。」

「わかりました。」

言われてみれば、確かに少し発動は遅かった気がする。発動が遅れば反撃やガードを許してしまうし、素早く発動できるようにするのた大事だろう。

「ひとまずはそれくらいかな。けど最初に言つたようにすこかつたよ。砲撃用トリオン兵の2体を倒したのはスムーズだったし、そこでの連携は良かった。砲撃が浅上君のところに行くとき素早く見切つてもう一体のほうを仕留めに行つた椿君はさすがだね。」

さすが来馬先輩。最後には持ち上げてモチベーションを上げてくれる。これが隊長としての素質というものだろうか……。

「さて、それじゃあ、長つたらしい振り返りはこれくらいにして、ちよつと新たに敵が来ない限りはアタッカーとガンナー、シューターの連携のとり方を教えるよ。」

結局、それ以上のトリオン兵は来ず、私たちはそのまま馬隊に連携の仕方について、多々教えてもらうことができた。

作戦室にて・・・

防衛任務の翌日。私は明野隊の作戦室（隊として正式に認定されると本部に作戦室がもらえる。）にて、最初の対戦相手のログを見ていた。

といつても、どちらの隊も私たちより2，3週間ばかり早く隊を結成したばかりであり、戦闘のログはほとんどない。

せいぜいが主な戦法と持っているトリガーがわかるくらいだ。

次の対戦相手は間宮隊と早川隊

間宮隊は全員がシューターの3人編成。全員がハウンドをメイントリガーとし、三人同時でのフルアタックハウンド通称ハウンドストームが決め技。

けどこれは相手との距離が適切でなければ使えない。戦法次第で封じることが難しくないだろう。

問題は早川隊のほうか。

早川隊はオールラウンダーの早川隊長にガンナー二人という3人編成。

早川隊長は銃を用いないオールラウンダーシューターとアタッカーという感じ。船橋隊員がアサルトライフルのガンナー。そして丸井隊員がアサルトライフルのハウ

ドとグレネードタイプのメテオラを使ってくる。

影浦隊の北添さんがよく使ってる手だ。

遮蔽物を無視して攻撃できるのと、地形破壊効果が大きい。

命中率は低いから直接的な脅威は低いけれどもうつつとうしいのは確かだろう。できれば早いうちに倒しておきたい。

アタッカーが二人いる私達は中距離戦に持ち込まれるとやや不利だ。雅樹がアサルトライフルを持っているとはいえ、まだまだ不十分だし。接近戦を持ち込んだほうが有利だろう。

マップの選択権は私達にある。うまく使って戦いやすい舞台を整えないといけないか。

選択肢としては例えば市街地C。高台にある市街地で、スナイパーに有利な地形だ。

狙撃用のトリガーを持っているのは私だけだから、高台さえ取れば一方的に攻撃でききる。

また、そうなれば屋根の上を通れば狙撃されるので、路地を通って移動することになるだろう。そうなれば遮蔽物が多くなり、二人が優位に戦える。

やってみる価値は十分にあるだろう。

ただし、丸井隊員のグレネードメテオラによる爆撃で私の狙撃は邪魔されるだろうか

ら、確実にうまくいくわけではないだろう。

それにあまりに私たちが有利な状況を作ると2チームがこちらに襲い掛かってくることになる。最良は漁夫の利。少なくとも1チームずつ戦っていくようにしていきたい。

もつと他に作戦を考えてみるか……。

ランク戦は三日後。開始の1時間前には決めないといけないからまだ余裕はある。……。椿達にも意見を聞いてみよう。

二人はいま連携の練習をしていたか……。

相手の行動を予測して作戦を考えるのも大切だけれども、自分たちの実力、できることを考えて作戦を立てないとな。

狙撃できるのは私だけだからうまく場を作れば優位に状況を作れるかもしれないが、私の狙撃技術ではあまり効果がないかもしれないからな。

とりあえずは狙撃の練習をもつとして、最低限の技術は身につけなければ……。

かわいい指導者 その2

作戦を考えていたが いいものが思い浮かばなかったのでスナイパーの訓練場に向かった。

ランク戦で使い物になるように狙撃の腕を上げておく必要があるからだ。

それに、一度気分を切り替えることで新しい作戦が出るかもしれない。

今はちょうど昼時で普段訓練場にいるような人はラウンジに行っているし。人が少なく、時間帯もちょうどいい。一階ですら少ないのだから2階はかなり少ないだろう。

案の定、人が少ない。よかった。

そして……

「やあ。この前は助かったよ。おかげで最下位を免れた。また何かダメなところがあったら教えてくれ。」

前の場所と同じところにあのかわいい指導者がいた。

「……別に。前も言ったけど気になっただけだから。気にしないでいい。」

「そうか……。隣いいか？」

「・・・好きにするといい。」

「助かる。」

狙撃訓練のメニューを人型の動局的に設定する。

距離は100〜300メートル。屋根の上、路地などを不規則に動いている。まずはこれを当てないと・・・。

ライトニングを起動する。

そして、照準を付け・・・打つ。

ガク引きにならないように、きちんと親指のほうにも力を入れる。

・・・命中。100メートルあたりなら動いていても当てられる。

ライトニングで弾速が速いというのもあるだろう。

150メートルあたりから少しずつ外れるようになってきた。

250メートルを超えると2，3回に一回しか当たらない。

「・・・狙いをつけるのは大事。でも単発ずつでいいの？」

「ん？」

「・・・あなたのはライトニングでしょう？」

「ああ。なるほど。当てることばかりに意識が行って失念していた。ありがとう。」

「・・・」

またアドバイスをくれて自分の狙撃訓練に戻った……。

私のトリガーはライトニング。弾速と速射性に優れた狙撃銃。

ならば連続して撃つことも想定して撃たなければ……。

同じ的に向けて数回連続して撃つ。

一発目が外れても2, 3発目が当たれば狙撃として効果がある。

シールドで防がれやすくなるから初弾を命中させることが大切だが、いま言ってもそれは仕方がない。

2, 3発目は初弾に比べると命中率は下がるがそれなりにあたるようになってきた。が、まだ実戦で使えるレベルにはない……。

「……あなたは的の先を読むことは上手。けど、それだけ。まだ狙いが安定してないし、2発目からの照準には焦りを感じる。」

「なるほど。焦りか……。確かに早く打たないと思つて焦つているところがあるか……。ちなみに君は何を考えて撃つてる?」

「……何も。ただ相手の動きを読み、狙撃するだけ。ほかに考えることはいらぬ。」

「確かに、余計なことは考えるだけ邪魔か……。参考になつた。」

「……別にいい……。大したことは言っていない。それから、2発目以降は可能なら手足を狙うといい。シールドで防がれにくい。」

「シールドで防がれにくい……。急所をシールドで防ごうとする分手足のガードが甘くなるってことか。」

「……そう。」

シールドは防御範囲を広くするほど耐久性が下がる。

ライトニングも狙撃銃の中では一番威力が低いとは言えそこその威力を誇る。

トリオンに自信のない限り広範囲のシールドで防ぐのはあまりしたくはないだろう。

弾速も早いから狙いを瞬時に見極めてそこに集中ガードをするなんてことは難しいだろうし、連射で割られる可能性もあるからな。

だからセオリーは急所をシールドで固めることなのか……。つまりはそれをさけて手足を狙えばダメージが与えやすいし、その後の展開を有利に運べる。

よし……。それでももう少し練習を続けるか……。

「……距離に応じた着弾までの時間がまだ理解できてない。考えなくてもできるくらいにしないと……。」

「……トリオンの弾に風と重力の影響は少ない。放物線より直線に近い弾道。それを意

識して。」

「・・・銃を持つのに力が入りすぎ。もっと力を抜いて。」

その後しばらく指導をしてくれた。

昨日までに比べ、かなり上達した気がする。

この感覚を忘れさせないようにしないと・・・。

ひと段落ついて・・・

「アドバイスありがとう。おかげですごく上達した気がする。

良かったら何かお礼をさせてくれないか？」

「・・・いらない。」

そういつてそそくさと帰っていった。

「・・・あ、勧誘と名前を聞くのを忘れていた・・・。」

こんどは忘れないうちに聞いておくのでしょうか。

作戦会議 対間宮隊・早川隊

翌日。私たち四人は作戦室に集合した。

二日後に迫るランク戦に向けての作戦会議を行うためだ。

「さて、ランク戦の初戦の相手だけれど、相手に関しては話した通りだ。

最優先での撃破対象は早川隊の丸井隊員。彼のグレネードさえなくなれば狙撃やトランプでの援護がしやすくなって状況を有利にできる。」

「あいよ。だがそのための作戦はどうする。むこうもそう簡単にやらせてくれるわけじゃないだろ。」

「それはそうだが、これに関してはもう片方のチームが間宮隊で助かったというべきだろう。あのチームは三人で戦うことを基本としているから何よりも合流を優先して開始時は全員がバググワームを使用する。だからレーダーに反応する敵は早川隊の三人だけだ。」

まず私が戦闘開始時にライトニングのスコープでマップ上の敵を確認する。初期の転送位置はバラバラだが全員が均等な距離になるようバランスよく転送される。隣に転送されるのは基本的に別の隊の人だから私のライトニングで一人か二人は早川隊を

捕捉できる。

そうしたら村中さんに頼んでタグ付けをしてもらうとともに、私たちの中で近くににいる人で丸井隊員へ優先して奇襲を仕掛けてもらう。」

「確認できたのが一人で丸井隊員じゃなかったら？ マップ上の敵の二人のうちのどちらかが丸井隊員っていうのはわかるけど……そのあとは？」

椿が聞いてくる。確かに、転送位置によつては丸井隊員の初期位置がわからない。二人のうちのどちらかに絞れはするが……。

「俺か椿のどちらかが近くにいるはずだから残った二人に突っ込むっていうのは？」

ヒロが近くの一人を足止めしてくれたら少なくとも間宮隊が合流するまでの間はサシでできるってことだろ？」

「それも考えた。が、サシでやって確実に勝てるか？ 接近戦に持ち込めなかったらこっちのほうが不利だし、仮にお前が勝つても私や椿が負けて戦力が削られるという可能性もあるぞ。」

「スタート時にそのグレネードで攻撃はしてこないの？ それならわたしが弾道解析してすぐに位置がわかると思うけど……。」

「村中さんの言う通りスタート時に撃つてくるときもあるからそれならすぐに狙えるん。私がライトニングで狙撃できるし、椿はグラスホッパーで機動力もあるから

な・・・。

しかし、開始時に撃つてこない時もそれなりにある。もともと開幕時のメテオラは命中率ほとんどないから撃つだけトリオンの無駄だからな。」

「そっか・・・。でもまあ撃つてくるときもあるんだよね。その時は任せてね。」

「ん？じゃあ開幕撃つてこないならいつグレネード撃つてくるんだ？それなりに離れてないいつかわねえだろ？」

雅樹にしてはもつともな疑問だ。

「基本は相手のいる建物を破壊して敵をあぶりだしたりするときに使うみたいだな。あと狙撃手のいるところへ撃つて狙撃手へのけん制と妨害。」

「ならそれで撃たせとけばいいんじゃないやね？ヒロが最初に近くの早川隊を狙撃してればうっとうしく感じてグレネード撃つてくるだろ。それで位置がわかるから俺と樁で攻めればいい。違うか？」

「つまり私が囷になると・・・。なるほど。確かにそれなら簡単に場所を特定できるか。しかし、私の居場所もばれるから最悪私がすぐに落ちるぞ？それでもいいか？」

「まあ、命中率が低いし、ダメージは受けるかもしれないけど、落ちることはないでしょ。バグワームもあるし、入り組んだマップなら十分に振り切れるでしょ。スパイダーやメテオラトラップで足止めもできるしね。」

「入り組んだ地形ならわたしが地形情報送って支援すれば浅上君のバイパーが有利なんだから狙われてもかてるんじゃないの？」

「確かに入り組んだ地形なら私が有利だから向かってくる一人だけに集中すれば多分かてる。が、間宮隊による攻撃がないとも限らないし、不意打ちにも意識を咲かないといけない。二人以上来た時は倒されないように逃げ回るのが精いっぱいだな。」

「あ、じゃあ、それでいいな。逃げ回って時間をかせいでくれたらその分僕たちが楽になるもの。それで浮いた人を倒していくよ。」

「ふむ、仮に私が落ちても問題はないか。一応何かあつてもメテオトラップを逃げながら各所に仕掛けておけば村中さんとの支援も含めて有利な状況が作れるし。よし、じゃあそれでいこう。」

作戦の方針が決定した。被害を出すことを恐れていたからあまり考えていなかったが、仮に落ちてもそれ以上のリターンが得られるなら犠牲になる価値はある。

思っていたより簡単に解決できたな。

「じゃああとは、早川隊に合流を許してしまったときはどうするの？ そうなればこっちも合流はできるとおもうから複数対複数で戦うことになると思うよ？ それにそのころには間宮隊も合流するだろうから、みつどもえになるね。」

村中さんの指摘はもつともだ。

「間宮隊に関しては雅樹がアサルトライフルでけん制してくれたらハウンドストームは撃てないから、飛んでくる弾の数が減る。それならシールドとフレアで十分に防ぎきれから次の攻撃までの間に樁がグラスホッパーで間合いを詰めれるはずだ。それで終わるはず。」

シューターは固まっているときに間合いを詰められると味方への誤射の危険があるからそう簡単に攻撃できなくなる。つまり、間宮隊に関しては間合いを詰めるだけで勝てる。

あとは早川隊だが……。

「ひとまずは間合いを詰めることを優先しないとな。案としては私が多めに分割したパイパーやメテオラでなるべく広範囲に持続的な攻撃を仕掛けるからその間に間合いを詰めるか……。」

「早川隊の隊長はオールラウンダーだから間合いを詰めても勝てるとは限らないよね。それにそれだと間合いを詰め切れるかも怪しいし……。ほかにもう少し考えないと……。」

だいぶ作戦が立ってきたが、うまくいかなかったときのこととも考えないと……。

初のランク戦を前に会議の時間は2時間を超えた。

試合前日。

作戦会議の後、仮眠をとったのち、夜勤にはなるが防衛任務を再び来馬隊と行い、課題の残る連携について指導をしてもらうなどしていると、ランク戦の前日になった。

雅樹と椿は連携に二人での連携についてまだ来馬隊の人から指導を受ける予定のようだ。

ナンバー5アタッカーの鋼さんから直接指導してもらえるから訓練の質が高いとのことだ。

そして私は……。

午後から始まる狙撃主合同訓練だ。本来ならば夜勤の後には参加したくないが、トリオン体でいる間は眠くならない。便利なものだ。

今度テスト前あたりに使ってみるのもいいかもしれない……。

まあそれでも集中力には影響は出るだろうし、早めに訓練ブースへ行つて脳を休ませておくか……。

訓練開始まで30分以上あるが、防衛任務の疲れを少しでもとるために早めに移動を

していると、珍しい後ろ姿を見た……。

「あの子は……」

私の狙撃の師匠（私がそう呼んでいるだけだが……）が少し離れたところで歩いている。

狙撃手用の訓練場以外で会うのは初めてだな。何をしているんだろう……。とみていると。

ふりかえって後ろにいた人の中から私を見つけてくる。

気づいた（振り向く前に気づいたような動作だったが）みたいなので手を振って挨拶する。

「やあ。二日ぶり。」

「……何か用？」

「この前はいろいろ教えてくれてありがとう。おかげで狙撃の腕が上がったってほめられたよ。」

実際この二日間で私の狙撃の腕は大きく伸びた。

別役さんからも上達をほめられた。

「……どういたしまして。」

素直に礼を受け取ってもらえた。少しずつこの人との会話にも慣れてきた気がする。

いや、慣れたのは向こうのほうか……

「もう訓練ブースに行くのか？まだ時間があるぞ？」

「……人の多いところは嫌いな。人が集まる前に行きたいから。」

「そうか……。」

「……あなたは？あなたも訓練ブースへ行こうとしていたでしょう？」

「今朝は防衛任務だったから。少し早めにブースへ行つて脳を休ませたくてな……。今日の訓練は補足&掩蔽訓練だから個人ランク戦のブースだし、横になって訓練まで休める。……まあ私も人が集まる前に行きたいというのもあるな……。」

「……そう。」

「まあ互いにそういう理由があるなら早めに訓練ブースへ行こうか……。」

「……ええ。」

二人で訓練ブースへ向かう。

会話は特にないが特に気まずさは感じない。

そしてブースにつくと分かれて個人スペースに入る。

さて、休憩をはさんで頑張るか……。

そして・・・

「訓練開始！」

狙撃手合同訓練が始まった。

捕捉&掩蔽訓練はリーダーの情報なしで90分間隠れながらほかの隊員を狙撃する。

狙撃の際に音などは出ず、自分の実力のみで敵を探す必要がある。

相手に命中すると+5点、撃たれると-2点。同じ相手を2度撃つことはできない。

狙撃手合同訓練用のステージというだけあって狙撃に向いている場所は多い。

が、

訓練に参加している人も多いのでそれなりに見つけることができる。

相手（敵）の目が多すぎる。狙撃に向いている場所から次々に撃つていくのもあるだが、被弾が多そうだから、狙撃場所にそこそこの程度向いている場所を探して敵を探す。

ビルの屋上で少し見たときは頻度が下がるがそれなりに相手を見つけられる。

どんどん見つけてポイントを稼ごうとしていると・・・

ピピッと音が鳴った。被弾をした様子だ。500メートル以上離れた場所か

ら・・・。誰だ・・・。

さすがにその距離だと当て返すのは無理か・・・

その後も場所を変えつつ狙撃していったが、何度か狙撃されたが、こつちもそこそこに当てていった。

この訓練に参加してわかったが、C級と正規隊員では狙いを見つける目、狙撃の正確さもあるけれど、狙撃のタイミング、補足から狙撃までの間隔の短さ。射程距離・制度が大きく違うと実感できる。

走っていても建物から飛び降りるときでもお構いなしに当ててくる。

今は動く相手にあてるのが精いっぱいなのであの子から教えてもらったことを思い浮かべながら索敵・狙撃を行っていく。

時間はまだある。可能な限り得点を取ってやる。!!

訓練開始から45分が経過した。

訓練終了　そして

—— 捕捉&掩蔽訓練後半 ——

「あれは・・・？」

あの子を発見。運よく背後をとることができたようだ。

少し気が引けるけれど撃たせてもらおう。

つと照準を合わせようとしたが、

「・・・！」

急に振り返ってこちらに照準を付けできた。

いい感をしている・・・。

ピピッ！

私の狙撃は外れ、あの子から狙撃された・・・。

さすが師匠。不意を突いてもそう簡単にポイントを取らせてはくれないか・・・。

そして、そのまま再度狙いをつける間もなく建物の影に逃げられた。

その後も外したり当てたりを繰り返し、訓練が終了した。

ランク戦の前に実際の人を標的として狙撃の訓練ができて良かった。いつもの人型の的と違ってかなり当てにくい。

本番ではライトニングだからそれなりに当てやすいだろうが、威力に劣る分余分に当たるか急所に当てなければいけない・・・。

ここぞという時を見極めて撃つようにしないと。

そして今日の学びはもう一つ。

照準を定める時に一呼吸を置くとより正確な狙撃ができる。

どうにも早く狙いをつけようとして焦るようだ。

その一呼吸の間に移動されて狙撃できなくなるということもあるが、その隙はおいおい改善していくとして、今は精度を優先させるとしよう。

「さて、結果が出たな。142人中、118位2回目でこの順位なら上出来か。師匠のおかげが大きいだろうな。」

一位は・・・やはり奈良坂さんか・・・さすがだな。

さて、訓練直後は人も多いだろうし、もう少し休んでからブースを出るとしようか。と、20分ほど休憩をしつつ、個人スペースを出て訓練室のロビーに出る。

と、ちょうど似たようなタイミングであの子が出てきた。

今回の訓練に行くときといい、最初の訓練の時といい、私とあの子はよほど気が合うようだ。

「お疲れ様。この前より順位は上がってたよ。ありがとう。」

「・・・そう。でもそれはあなたが頑張ったから。」

「それもあるだろうが、お前さんの指導もかなり大きいな。そつちはどうだった？上位15%に入れたか？」

「・・・9位」

今回も順位が高いだろうとは思っていたがまさかこれほどとは・・・。

「上位15%どころか一桁代の順位だったか。さすがだな。」

「・・・この訓練では私はズルしてるようなものだから。そんなに誇れない。」

「ん？ズル？」

「・・・何でもない。忘れて。」

気になったが、あまり追及しないほうがよさそうだ。まあこの様子から察するに、本当に訓練のルールの裏を突いて不正をしているとかではなさそうだ。

何かあるのだろう。

「ん、ああわかった。」

「・・・それじゃあ、私は行くから。」

何か話題を変えようとしたがあの子は立ち去ってしまった。

まあまた今度会えるだろう。

あ、また名前を聞くのを忘れていた・・・。

初ランク戦 当日

明野隊 初のランク戦当日 試合前

「みなさん、こんばんは。B級ランク戦ラウンド1。夜の部の時間です。実況を務めます、嵐山隊の綾辻です。そして開設席には風間隊長風間さんと、諏訪隊の堤さんにお越しいただきました。」

「どうぞよろしく。」

「本日はB級下位の早川隊、間宮隊、そして昇格後初参戦となる明野隊のみつどもえです。さあマップが選択されます。マップ選択は明野隊。選択されたマップは・・・市街地C!!」

市街地Cは高低差のある市街地で一般的にスナイパーが有利なステージですが・・・。今回の3チームにはスナイパーがいません。これはどういうことでしょうか。」

「市街地ということで、建物が多いですからね。まずはそこを狙ったのではないでしょうか。明野隊はアタッカー二人にシューターが一人の3人編成。」

ほかの隊はシューターやガンナーなど、中距離よりの編成です。早川隊長はオールラウンダーですが、それでも近接戦闘ができるのは彼だけですからね。近接戦に持ち込む

「ことができれば有利に働くはずです。」

「建物が多ければそれを遮蔽物にして距離を詰めやすい。また、明野隊のシューターの浅上隊員のメイントリガーはバイパーと聞く。障害物は気にする必要はないから市街地という建物が多いという状況だけで明野隊の有利に働くな。」

「問題はA、B、Cとある市街地の中でどうしてCを選んだかですね。市街地Cは建物の高低差はほとんどないので、屋根に上がると家々を遮蔽物にしても攻撃しやすくなりません。建物の高低差のある、市街地Bとかなら屋根を伝つての移動は困難ですからより斜線が通りにくくなって接近が容易になるはずです。」

「二つは早川隊の丸井隊員の持つているグレネードタイプメテオラを警戒してのこともあるだろう。建物の高さがほぼ同じなら、グレネードの軌道がまるわかりで被弾のリスクが下がる。」

「斜線は放物線を描くから低いところに集まればそれだけ着弾が遅くなりますからね。そういった理由もあると思います。今回の敵にスナイパーはいませんからそれも十分有効でしょう。」

「なるほど。ありがとうございます。さあ、転送準備が整った模様です。それでは、B級下位ランク戦スタートです!!」

—— 開始直前 間宮隊 ——

「市街地Cか。建物が多いからそれで斜線を切つて接近戦にもちこむつもりだろう。どうする。」

「いつも通りに合流を優先するのは変わらない。それからだが、上を取りに行く。」

「上のほうが、見通しがいいからな、弾速と軌道を設定すれば建物のかげにいてもハウンドで攻撃しやすくなる。そのあとは相手の出方次第だな。」

「了解。」

—— 同じく 開始直前 早川隊 ——

「市街地Cか。建物がおおいから接近戦には注意が必要だね。接近戦に持ち込まれるとこつちが不利になるから必ず距離をとつて戦うことにしよう。」

「相手が狙撃してくる可能性とか考えなくていいのか？ここはスナイパー有利のステーションだろ？相手のトリガーに何が入ってるかわからないんだ、一応警戒はしておくべきだと思ふぞ。」

「可能性はないとは言わない。だが、仮にそうだったとしても命中率はそこまで高くないだろう。初弾さえしのげばあとは十分に対処できるはずだ。」

「じゃあそれよりは、アタツカーの接近と、浅上君のバイパーに注意だね。特に浅上君のバイパーは建物関係ないからね。C級の時に戦う様子見たけど、逃げ道を誘導するように弾道を設定してくるから、相手の思惑にはまらないよう注意してね。」

「バッグワームで奇襲仕掛けてくる可能性も大きいから、気を付けてね。」

「了解。」

「いくらかの建物は俺のメテオラで壊すつてのはどうだ？斜線が通りやすくなるから接近する前に倒せるようになるんじゃないか？」

「さすがにどこもかしこも壊してたんじゃあだめだが転送時とあとはどこが戦場になつてもいいよう間隔を置いて更地にしたのでいいはずだ。星司の言う通り、更地になつている場所がいくらあればこちらに有利に働くはずだ。頼んだ。」

麻美は初期位置から戦闘が起きやすそうなところをリストアップして開始時に敵と遭遇しそうなところをピックアップして隊に伝えてやってくれ。」

「了解！」

初ランク戦①

B級ランク戦 ラウンド1 スタート!

自動音声が流れるとともに、初期位置へ転送される。

初期位置はマップ内でランダムに転送される。ただ、それぞれ等間隔になるように転送されるうえ、転送直後はマップに移っているから全員の初期位置はわかる。

私の初期位置は・・・市街地の中腹より少し上といったところか。最良ではないものの、それなりにスタート位置に恵まれた。

これなら、予定通りに作戦を行える。

「さあ全員が転送されました。そして同時に、明野隊の浅上隊員がバググワームを起動!そして、早川隊、明野隊は上のほうでの合流を目指す動き。間宮隊は上ではなく中腹へ移動している。最短距離での合流を目指す動きか。最初の動きについてはどう思われますか?風間さん。」

「今回のように高低差のあるマップでは上に陣取るのがセオリーだ。見通しがいいため、銃撃が行いやすいとともに、相手の動きがよく見える。早川隊はそれを狙ってのこ

とだろう。明野隊はそれがわかっているだろうから、上での接近戦を持ち込むつもりだろう。

そして、間宮隊は全員で合流してから戦うことを基本としている。ほかの2隊が上での合流を狙っているだろうから、地形による多少の不利は無視してでも安全に合流をしたかったのだろう。」

「行動が読みにくいのは明野隊の浅上くんですね。なぜ浅上隊員だけバツグワームを起動したのか……。それが今回の明野隊の作戦の要になっていそうですね。」

「なるほど。有利な地形で戦いたい早川隊、地形で相手の行動を誘導し、接近戦に持ち込みたい明野隊、普段の戦い方を優先した間宮隊というわけですね。ありがとうございます。おっと、早速ですが動きが出てきました。」

私は屋根の上ってライトニングを起動する。そしてマップでおおよその敵の位置を確認してスコープを除き探す。

「村中さん、間宮隊の隊長と鯉沼隊員、それから、早川隊の船橋隊員を発見。」

予想通りに中腹で合流しようとしているのが間宮隊、上での合流を目指しているのが早川隊だ。タグ付けよろしく。引き続き、丸井隊員を探す。」

そう連絡して、再度探していると……。

ヒューーウーうーうー

ドゴゴゴオオウン!!!ゴオオウン!!!ゴゴゴオウウウオン!!

来た、グレネードランチャーによるメテオラ。居場所を教えてくれて探す手間が省ける。

「ヒロ!!メテオラ爆撃来たぞ!相手の場所はわかるな!!」

「問題はない。大体の居場所はつかんだ。」

「こつちでも弾道の解析したよ。丸井君はマップ西南にいるみたい。タグ付けしとくね。」

村中さんの仕事が早くて助かる。

見つけた。

「丸井隊員を見つけた。走りながらメテオラを時折撃っているようだ。転送位置がよかった。この場所なら私が狙撃できる。」

「了解。ヒロのタイミングで任せる。あとの早川隊への攻撃は任せる。」

「あまり時間をかけると間宮隊も来るから、二人とも気を付けてね。まあ僕もだけど。」

樁の警告ももつともだ……。時間は限られている……。

ぎりぎりだが丸井隊員の位置は私の有効射程内だ。

相手は時折メテオラで爆撃をしている。その際には少し速さが落ちる。

.....いまだ。

私は引き金を引いた。

「おおつと!!なんと浅上隊員、ライトニングを持つていた。市街地Cを選んだのは狙撃を行うためというのもあるようです。」

「浅上がライトニングを持つているというのを後の2隊は知らない。相手の不意を付けるから最初の狙撃は有利だ。問題は誰を狙うかと、浅上自身の狙撃の実力だな。」

「練習をしていたとはいえ、スナイパー用のトリガーを持ったのは最近のはずですからね。それを踏まえての当てやすいライトニングだと思いますが.....」

「狙撃の腕前ができなくてもだれがどの位置にいるのか捕捉できますから。そのあたりでも明野隊がやや有利といったところでしょうか。そしてここで早川隊の丸井隊員によるメテオラの爆撃!!隊員たちの間で適当メテオラと言われるマップを見ての砲撃です。」

「グレネードランチャータイプ銃によるメテオラは放物線を描いて飛んでいくからな。初期位置からでも近くの敵にお構いなしに攻撃できる。命中精度は決して高くはないが、これは、早川隊のけん制が目的か。」

「グレネードによる砲撃があると、明野隊、間宮隊は動きにくくなりますからね。この好きに上をとるつもりでしょう。」

「この状況が続けば、早川隊が上を取れる。そうなれば早川隊の優位で戦闘が続くだろう。」

「……だが、今の状況は危険だぞ……。」

「危険……ですか？」

「浅上からすれば、自分を撃つてくださいとアピールしている形になりますからね。実際、そのつもりの様子で狙っています。おそらく、砲撃のために足を緩めたところを狙ってくるでしょう。」

「なるほど。ありがとうございます。丸井隊員、相手の妨害が効果的に行えているものの、浅上隊員の銃口が彼を狙っている。そして……浅上隊員撃った!!」

初ランク戦②

私の放った弾丸は、丸井隊員の腹部を貫いた。

が、ライトニングの火力では戦闘不能までに至っていない。続けて撃つ!!

『2発目以降は可能なら手足を狙うといい。シールドで防がれにくい。』

師匠の教えを活かさないとな・・・。

「狙撃!!誰から!!いや、どこから?まずい、シールド!!」

丸井隊員は頭部と胴体を守ろうと集中シールドを張る。不意を突いての狙撃というのになかなかに対応が早い。

が、私の狙いは足だ。

胴体よりは当てにくく、直撃させることはできなかったが、右足に命中した。右足を失うまでにはいかなかったが、神経系には届いたはず。右足はもう使えないだろう。

足を削られたとみるや、丸井隊員は建物の影に隠れた。アイビスがあれば建物ごと攻撃できたがライトニングではさすがに無理か・・・。

だが足は削った。

それなら・・・射程重視のバイパーで追い打ちかけられるか・・・。

——早川隊サイド——

「星治? どうした? 砲撃が止んだぞ?」

「悪い。狙撃された。右足と腹部抜かれて、合流できそうにないな。」

「狙撃? どこから? 誰が?」

「方向は私の位置からマップ上2時の方角。最初にバググワームでレーダーに映らなくなった人が狙撃してきたようだ。」

「了解。悪いが助けに行っても間に合いそうにない。バイルアウトしろ。」

「すまん。あとは任せた。バイルアウト!!」

ビビビビ!!

緊急脱出不可

「ちっ!! 遅かったか……。すまん。バイルアウトできそうにない。」

「……。狙撃に気を取られてマップを見ていなかった。もう、60メートル圏内に敵がいる。」

もうシューターの射程圏内だ。それでも攻撃が来ないってことは……。

来てるのはアタッカーの二人のどちらかか。

片足を失って、トリオンも大量に漏れてる。とても戦える状況じゃないか……。そ

れなら・・・。

残りのトリオンをすべて使って少しでも仲間に貢献しないと・・・。

さっきの狙撃があった方向。初期配置。バッグワームで反応が消えた位置に可能な限り叩き込む。

そして、空をみた瞬間。目の前を光の線が通る。そして、俺の体を貫いた・・・。

「バイパー？ くそつつつつ！！」

狙撃のあった方向からバイパーで撃たれた。

「トリオン体活動限界。バイルアウトします。」

ただでさえ、重症だった俺のトリオン体はもう持たないようだ。だがまだだ・・・。

ドシユドシユドシユ!!!

俺はできる限り引き金を絞って、メテオラを射出する。そして、放たれた3発のメテオラと、私にとどめをさしに来たアツカカーの椿健太を見て作戦室のベッドの上へ転送された。

そして、そのまま、オペレーターの麻美のところへ行き、みんなに報告する。

「みんな。狙撃してきているのは、浅上だ。狙撃のあった方向からバイパーが飛んできた。それから、麻美、俺のところに来てたのは椿だ。タグ付け頼む。」

「椿くんね。わかったわ。」

「浅上くん？そっか、それなら……。向こうの作戦は……」

——観戦ルームサイド——

「浅上隊員のライトニングが丸井隊員の腹部を貫いた。そのまま、追撃!! 足に命中!!」

早川隊丸井隊員、即死は免れたもののこれは時間の問題か……」

「きちんと決めるところで浅上くんは決めてきましたね。まだ、ライトニングを握って短いでしょうに、よくあてましたね。」

「そうだな。仕留めるまでにはいかなかったが、悪くない腕だ。そして、明野隊に狙撃があることがほかの2隊に知られてしまったが、行動がこれで、大幅に制限されるな。ただ、当てる以上に十分に価値のある狙撃だ。」

「具体的にはどういうことでしょうか。風間さん。」

「今までは間宮隊、早川隊は最短距離で……。建物の屋根伝いに移動することができた。が、スナイパーの存在を認識。油断していたとはいえ、初弾を命中させるスナイパーがいる。どの程度の技量かわからない以上、今までのようにリスクをおかすわけにはいかない。」

路地に沿っての移動を強いられることになる。それだけ合流が遅れることになる。加えて、射線がとおりにくくなるから、明野隊に有利な展開だ。」

「射線を通りにくくすることで、ガンナーを不利に、アタッカーを有利にしたということですね。ありがとうございます。」

「おそらくは、まだ狙撃を始めたばかりなので、当たる可能性は高くはないとは思いますが、いると思わせるだけで、だいぶ変わりますからね。どうしてもスナイパーに注意をさかなくてはいけなくなります。」

「おつと!!」ここで丸井隊員自主ベイルアウトを発動!!しかし、遅かった!明野隊の樫隊員が丸井隊員の60メートル圏内に入っている!!これでは自主ベイルアウトできない!!」

「明野隊も狙撃では仕留めきれない可能性を考えていたでしょうからね。すぐにとどめがさせるように二人で丸井隊員のほうに向かっていましたね。」

「あの場面でベイルアウトはありだが、判断が遅かったな。樫が接近しているのに気づかないほど狙撃をされて動揺していると見える。そして・・・」

「そして・・・?」

首を傾げ、綾辻は続きを聞く。

「今度は、樫に気を取られたな。」

画面にバイパーで貫かれる丸井隊員が移る。

「これは・・・。浅上隊員のバイパー?たしかにバイパーなら遮蔽物は関係ありません

「が……。この距離でよくあてましたね。」

「足は削りましたからね。ダメ押しの一撃が命中した形でしょう。射程重視にチューニングしていたので、弾速と威力はほとんどありませんでした。椿君に気を取られてさえいなければシールドで防ぐこともできていたでしょう。最も、そのあと、すぐにバイルアウトする結果は変わらないとは思いますが。」

「だが、3発だけじゃなく、もつとメテオラで明野隊の作戦の邪魔はできていただろうな。当たらないくてもけん制には十分だ。建物が減れば射線が通って戦いやすくなるし、浅上も移動の必要が出てくるから、その間の狙撃はやむ。少し、足りなかつたな……。さて、ここからどうなるかが見ものだな。それぞれの隊の真価が問われることになる。」

初ランク戦③

——早川隊サイド——

「浅上くん？そっか、それなら……。向こうの作戦は……。」

「隊長？向こうの作戦がわかったのか？」

早川隊長の早川悟のつぶやきに、ガンナーの船橋了午隊員が聞き返す。

「了午、バッグワームを起動して、それで、壁伝いに移動するよ。」

移動先は星司が最後に爆撃したところだ。」

「星司が最後に……。？けどあそこには浅上がいるんじゃない？」

「いるだろうけど、このままいても、アタッカーの二人から奇襲を受けるだけだよ。」

きつとそろそろ向こうはバッグワームを起動してくるはずだ。」

早川隊長の言う通り、明野隊の二人のアタッカーはバッグワームを起動し、リーダーから反応が消える。それをみて、早川隊の残った二人もバッグワームを起動する。

それにより、マップで位置がつかめるのは、各々の味方と間宮隊のみになった。

「隊長。どういうことだ？」

「向こうの狙いは狙撃を警戒させて、こっちの動きを制限して、アタッカーに奇襲を仕掛

けさせることだ。だから、それが来る前に移動しないと……。」

「星司が最後に爆撃したところに移動する理由は？」

「向こうの狙いがアタッカーの奇襲なら、少しでもひらけたところに出たほうが、対処しやすい。」

「けどそれじゃあ、浅上からの狙撃は？」逆に狙われやすくなるだろ。

「浅上くんの狙撃の腕はわからないけど、さすがにアタッカーが戦つてる時には来ないとおもう。来るとしても、少し距離が空いた時かな。まだうまくアタッカーと連携できるほどじゃないはずだよ。」

それに、多分今は移動してるだろうけど、移動するなら、もつと上へ行つてははずだから、狙撃してくる方向はわかるよ。それなら、アタッカーとの距離が空いた時と、奇襲してくる前にさえ気を付けたら狙撃もしのげるはずだよ。」

「なるほど。了解。」

二人は丸井星司が最後に爆撃した地点へ移動を開始した。

——観戦ルームサイド——

「さあ、丸井隊員がベイルアウトした後にもどんどん状況が動いていきます。」

明野隊のアタッカー二人がバグワームを起動。そして、それをみてか早川隊の二人

もバググワームを起動しました。早川隊の二人は、明野隊による狙撃と奇襲を警戒して……といったところでしょうか。」

「だろうな。さつきまでなら見通しのいい上をとっている浅上からすれば、バググワームを使われても狙撃と奇襲ができただろうが、先の狙撃と丸井のメテオラで移動を余儀なくされるだろうかならな。今なら、比較的安全に移動できる。」

「あとは、明野隊と早川隊の2隊ともに間宮隊の横槍を防ぐため、というのもありそうですね。混戦になると、なにが起きるかわかりませんから。」

「なるほど。ありがとうございます。夫早川隊の二人は、先ほど丸井隊員が最後にメテオラで爆撃したところに向かっているようです。これは、スナイパーである浅上隊員へ仕掛けるつもりでしょうか?」

「狙撃をしてくる浅上を真っ先に落としたいところだろうが、距離が離れている。振り切られる可能性が高いから。おそらくそれはないだろう。仮に狙っていたとしても、アタッカーのどちらか、あるいは両方がサポートに入れる。」

「浅上隊員の本職はシューターなので、接近されてもサポートがあるならそれはそれで問題のだと思います。目的としては、爆撃で開けたところに出て、奇襲を防ぐ……。ということですかね。風間さん。」

「おそろしくはなぬ。」

「ですが、その場合だと狙撃されやすくなるのではないですか？」

堤の予想に綾辻が疑問を呈する。

「今回のマップなら、スナイパーは普通、上へ移動するのがセオリーだ。

撃つてくる方向がわかっているなら、あとはタイミングにさえ気を付ければ対処できると考えたのだろう。加えて、まだ、浅上にはアタッカーと連携して同時に攻撃してくるということとはできないだろうからな。」

「アタッカーの連携はシビアですからね。今の彼だと、ある程度距離が離れてないと、味方への誤射の危険がありますからね。」

「なるほど。ありがとうございます。」

「しかし、浅上が普通のスナイパーならそれでよかったんだがな。そうはいかないらしい。」

——明野隊サイド——

「すまない。さっきの爆撃で巣を作っていたところが破壊された。それと移動も強いられることになったから、これ以上の狙撃は無理そうだ。プランBに以降してくれ。」

爆撃でスパイダーを張り巡らさせていたところが破壊された……。巣におびき寄せ

ての強襲は無理そうだ。

「了解。早川隊の二人もバグワーム使ったみたいだけどどうみる？僕は、浅上のほうへ行つたと考えるけど。」

「私も同意見だ。巣が使えないから、二人へのサポートが特にできないが、あとは任せた。」

「了解！」

さて……。二人が早川隊をたおすまで私は攻撃に参加できないし、間宮隊を倒す仕込みに行こうか……。

初ランク戦④

「さて、任されたし、行こうか椿。」

「ああ。」

プランBはヒロの援護がほほない状況で戦闘をする。だったな……。

「さて、どうする？まずは見つけるところからだよ。」

「そうだな……。よし、こうするか。」

そういつて俺はバッグワームを解除し、アサルトライフルを装備する。

「どうして解除したんだい？」

「互いにバッグワームしてたら奇襲できるかは運しだい……。いや、射程のある分向こうのほうが有利だしな。こうしておびき寄せたほうが早い。」

一度全員がバッグワームを起動してるから誰がどこにいるのかわかってないだろうが、誰だったにせよ、こっちに来るだろ。ヒロと間違えたなら、うつとうしいスナイパーはすぐに消したいだろうし、俺たちのどちらかだと考えたにしても、奇襲の可能性が減るから釣られに来る。

間宮隊のほうへいくっていうのもありだが、2対3だし、そうなったら俺らが漁夫の

利を狙える。」

「なるほど。アレを試してみようか。僕が隠れるからうまく誘導してね。」

そういつて、樁はバッグワームを起動したまま移動する。移動先は……あそこか。よし、覚えた……。あとは、早川隊を見つけるだけだな……。

屋根に上るか……。

さあどこにいる……。

「村中ちゃん、早川隊の二人が隠れてそんな場所のピックアップ頼める?」

「そういうだろうと思って。もうやってるよ。送るね。」

「さすが村中ちゃん。仕事ができる女。」

「ほめるのはあとあと。いつ攻撃してくるかわからないから警戒してね。」

「了解。」

さて、いそうな場所が分かったはいいものの、まだ見えない。まだ隠れているのか。はたまた、うまく建物を使ってきているのか……。

「間宮隊の3人が明野君のほうに移動を始めたわ。」

「了解。マップで確認したよ。明野、それに合わせて早川隊も仕掛けてくるだろうから、うまくこつちに誘導してね。」

「まかせろー」

村中さんと椿の報告を聞いて神経を周りに張り巡らせる。村中さんのおかげでおよその場所の検討はついているし……。間宮隊のほうには、ヒロがいるから横やりの心配はない……。

隊長らしく、見せ場を作らないとな……。

そして……

ババババツツツ!!!!

早川隊の二人が姿をみせ、バググワームを解除すると同時に連射してきた。

「来たな。ドンピシャ。村中さん、さすが!!!」

場所は村中さんの予想通り。それなら……。

ガガガガツツ!!!

シールドで最初の弾は防げるし、屋根から降りれば射線は切れ、それ以上の弾は当たらない。

「ハウンド!!!」

っと思っていたが、早川隊の二人のハウンドが上空から襲ってきた。

シールドで防げるが、カウンターを入れ損ねた……。シールドで防ぎきれているし、ほとんどの弾は躲せるが……。反撃の隙がない。椿の位置は……。よし。

俺は椿の元へ移動を開始した。

——早川隊サイド——

「二人とも、明野隊のうちの一人がバググワームを解除したわ。」

「一人だけ？」

「ええ。誰が解除したのかはわからないけど……。」

「わかった。この状況で一人だけ解除したってことは……。」

「まず間違いなく釣りだな。」

「そうだね。釣りだね。近づいたところで残りのふたりからの奇襲とかかな。」

「それならこのまま、見つからないように移動するか？」

「少し待つてから、行こうか。間宮隊の3人が合流してるし。それに合わせて移動しよう。そのほうが奇襲や狙撃の脅威が少ない。おっと、間宮隊も移動を始めたみたいだ……。」

「バググワームはどうする?」

「もうすこし、つけてて、視認される直前のタイミングで外して攻撃仕掛けるよ。」

「了解。」

「あれは、明野君? 明野君がバググワームを解除してたのか。」

「ということは……。狙撃の可能性はまだあるから注意がいるな。」

バググワームを解除し、釣り餌になっていたのは向こうの隊長のようだ。

幸い、まだ気づかれてはいないようだ。けどこの距離ならもう気づかれてもおかしくない。

「隊長、仕掛けるか?」

「そうだね。バググワーム解除と同時に一気に行くよ。屋根を降りて建物の影に隠れるだろうからそのままハウンドで追撃するよ。狙撃と奇襲への警戒は忘れないように。」

「了解。」

「それじゃあ、行くよ。いち、にの、さん!!」

二人のアステロイドが明野君を襲う、がシールドで防がれている。そのあとにもすぐに建物の影に隠れてられた。行動が早い。

けど、まだ僕たちの攻撃は終わらない!!

弾速を遅めに設定したハウンドなら、旋回半径は短いからある程度の障害物なら関係

ない。相手のいる空に向けてうっただけで山なりの弾道を描きつつ、建物を超えて明野君に襲い掛かる。

ここでせめて、多少なりダメージを与えておきたい。

「近づいてくるかとおもったけど、逃げてるな。追うか？待ち伏せの可能性高いぞ。」

「もうこっちの場所がばれてるし、追わなかったとしてもバググワームで強襲されるだけだ。間宮隊の移動が遅れてるし、向こうにも誰か言ってるはず。それなら、間宮隊のほうに人が言っているうちにこっちが攻めないと!!」

僕たちは明野君を追った。逃すものか……。

—— 明野隊サイド ——

「来たな、ついてきてくれて助かるぜ。鬼さんこちらっ!!」

上から降ってくるハウンドの雨をしのぎながら、椿のいる場所へむかう。移動ルートは村中さんが支持してるから間違いないし、楽だ。オペレーターがいるだけ行動がすごく楽になるな。

ついた!!

あとは、タイミングだな。

「ハウンド!!!」

向こうがやってきたように、俺もハウンドで相手へ攻撃する。

「逃げるのをやめて反撃してきた……。了午！奇襲か狙撃か来るよ！気を付けて!!」

「了解!!」

反撃のタイミングで狙いがばれてしまったようだ……。いや、狙いはもともとわかっていただろうから、この場合は奇襲の場所がばれたか……

場所は絶好だが、警戒されてしまった……。椿はまだタイミングを計っている。

攻撃で場所をいつまでもくぎ付けできるわけではないだろうし、不意打ちを警戒して足が緩んでいる今がチャンスか。

そして、このチャンスを作るのが隊長としての俺の務め。

「ばれたら、しょうがないか……。いまだ!!!浅上!!!」

俺は精一杯親友の名を呼んだ。

初ランク戦⑤

——早川隊サイド——

「ばれたら、しょうがないか……。いまだ!!浅上!!」

明野君がそう叫んだ……。

「浅上……狙撃か!!」

「浅上君……狙撃……じゃない!!!」

僕と了午は同時に叫んだ。が、それぞれで導いた答えは違った。

ログで見たとき、明野君は浅上君のことをヒロと呼んでいた。この状況で浅上と呼ぶのは僕たちに対して浅上くんの狙撃を警戒させるためだ。

それを伝えないと……

「旋空弧月!!」

しかし、それはかなわなかった……。

僕たちのいた近くの建物からオプシヨントリガーの旋空によって延長された斬撃が来る。旋空弧月……。やはり椿君か。

「シールド!!!」

「なに・・・?」

トリオン体活動限界。ベイルアウトします。

自動音声が流れる。

僕はとっさに抜いた弧月とシールドで防いだ。軽く傷を負ってトリオンも漏れ出ているがまだまだ戦える。

が、了午はそうはいかなかったようだ。

狙撃を警戒したために椿君の奇襲に対しての反応が遅れていた。

胴体を切られて真つ二つだ。

「おいしい、二人とも仕留められなかった。ごめん、明野。」

「気にすんなって。一人落としただけで十分だ。結果は変わらねえよ。」

明野君と椿君が僕の前後で待ち構えている。

2対1なうえに挟まれた。そしてアタッカーの間合い・・・。

「これは・・・まずいな・・・。やってくれたね。」

近くに隠れているとは思っていたけど・・・。まさか建物の中でしかもそのまま攻撃を仕掛けてくるとは・・・。トリオンで構成されたブレードなら家でも塀でも関係なく豆腐のように切れる。やられたな・・・。

僕は弧月を構える。せめて1点はとらないと……。

ハウンドで椿君を牽制。そしてそのまま明野君に切りかかる。

明野君で気を付けないといけないのは鞘を用いた受けからのカウンター。シールドでガードしてくるかもしれないからそれも気を付けないと……。

なのでハウンド後、すぐにアステロイドを起動すれば……。

隙はできるが大振りすれば両手で受け太刀せざるを得ないだろう。なら、あとはアステロイドでシールドを突破するだけだ……。

全力で袈裟切りを仕掛ける……。案の定、明野君は両手でガード。

よし……このまま!!

「アステロイド!!」

「遅いですよ!!」

「え……」

トリオン供給機関破損。バイルアウトします。

自動音声が届こえ、僕はバイルアウトしていた。

——観戦ルームサイド——

椿健太の奇襲により、一人落ち、ルームでは盛り上がりを見せていた。

「ここで、樁隊員の奇襲を決めてきました。早川隊の船橋隊員、ベイルアウトです。これで、明野隊に1ポイントが追加されます。」

「早川隊長には防がれましたが、船橋君にはきれいに決めましたね。さすがに建物の中から攻撃してくるとは思ってたでしょう。」

「狙撃を警戒してそちらに注意を割いていたのも大きかったな。それがなければ、無傷とは言わなくても戦闘不能までは追い込まれなかったかもだ。」

「しかし、建物の中からよく当てましたね。」

「明野による観測と、オペレーターの情報支援の成果といったところでしようか?」

「そうだな。戦闘員ばかりに目が行きやすいが、オペレーターによる情報支援の大きさは戦況に大きく貢献する。明野隊もいいオペレーターを見つけたようだ・・・。」

「そういえばごくごくたまに東さんが壁をぶち抜いて狙撃することもありますね。」

「あれも情報支援あつてだが、線でとらえればいい旋空弧月と点でとらえなければいけない狙撃では難易度が大きく異なる。今回のような壁越しの斬撃に比べてそうそうできることではないな。」

「確かに、それもそうですね、」

「なるほど。それもそうですね。おっと、ここでさらに動きが出ます。明野隊の二人に挟まれた早川隊長、ハウンドで牽制しつつ明野隊長に切りかかったと思ったら、ここで

ベイルアウト!!最後にアステロイドで攻撃しようとしたのは見えたのですが、一体何があつたのでしょうか。」

「スコープオンで供給機関をやられたな。」

「じつとしていても二人がかりで落とされるだけですからね。片方に集中するのはいい判断でしたけどね。アタッカーの片手のトリガーが空いている場合はそちらで何が来るかも警戒していないといけません。」

「おそらくはシールドでガードしてくると読んでいただろうが、外れたな。明野がスコープオンを使うという事前情報もない、初見ならば防ぐのは難しいだろう。」

「確かにスコープオンなら体のどこからでも出すことができますから、受け太刀をしている途中でも攻撃できますね。なるほど。解説ありがとうございます。」

「しかし、弧月にスコープオンということは明野くんは前衛よりのオールラウンダーを目指しているといった感じですね。C級の時の戦い方を見ていると鞘を使って二刀流のようなことをしていたので弧月2本のアタッカーだと思っていました。」

「それも悪くはないだろうが、鞘と弧月で戦えるからな。それにスコープオンを合わせたの3刀流が明野の近接戦闘スタイルだろう。」

「3刀流……。これは初めての戦い方ですね。王子隊の隊長も弧月にスコープオンというスタイルですが、鞘は使いませんしね。」

「鞘でブレードを防ぐのは難しいからな、すぐに鞘ごと切られて終わりだ、だから、先ほどのようにブレードと一緒に受け太刀するか、相手の腕などに当ててそもそもブレードを振らせない技術が必要になる。粗削りだがいいセンスだ。」

「アタッカー界に新しい波が来そうですね。さて、これで明野隊にさらに1ポイントが加算され、明野隊の独走状態が続いています。このまま、明野隊の快進撃が続くのか、はたまた間宮隊がB級の洗礼を浴びせるのか、戦局は終盤に入ります!!!」

初ランク戦⑥

「さて、あいづらもうまくやってくれるだろうし、引き受けたからにはこっちの仕事を引きつちりとこなさないとな。」

相手の位置もマップで確認。仕掛けも十分に仕掛けてある。

「浅上くん。そろそろ射程内に入るわよ。準備はいい?」

「了解だよ、村中さん。攻撃開始する。」

「頑張つてね。サポートは任せて。」

村中さんからの視覚支援でマップだけでなく、建物越しでも相手のおおよその位置がわかる。これなら私のバイパーならなんの問題もない。

「バイパー!!」

建物のうえを通るように弾道を引く。

これなら建物が多くても関係ない。私が一方的に攻撃できる。

建物越しに私のバイパーが間宮隊をおそう。

が、さすがに不意打ちの警戒はされていたか……。おそらく防がれたな。3人がまっすぐにこっちへ向かってくる。

「浅上くん、移動ルート視覚に表示するね。」

断続的にバイパーを打ちながら移動する。遮蔽物が多いお陰でこちらが一方的に攻撃できる。

っと思っていると……。

間宮隊のいるところから上空に向けて弧を描くようにハウンドが飛んできた。弾速を遅くすればハウンドの旋回半径は狭まり、上空に向けて打てば建物越しでも攻撃できる。

が、その程度の攻撃なら想定済みだ。

「バイパーフレア。」

バイパーでフレアを展開。自分に当たるハズの弾を迎撃。

ハウンド相手ならこの程度の攻撃、バイパーだけでしのぎ切れる。

引き続き、建物のうえから襲うように弾道を設定し、反撃する。

「さて、そろそろか……。」

ドゴゴゴオオウウンンンン!!!

仕掛けていたメテオトラップが起動した。それと同時に間宮隊の誰かがベイルア
ウトしたようだ。

数が二人に減った。これならもう逃げ回る必要はないな。

残った間宮隊の二人が見える位置まで移動する。

落ちたのは鯉沼隊員だったか。

まあ関係ないか。

間宮隊長も片足を無くしてるな。今が攻め時か……。

「バイパー、アステロイド!!」

左右のトリガーを同時に展開するフルアタック……どうだ

「シールド!!!」

フルガードで防がれた。流石に私のほうがトリオン量が上回っているとはいえ二人
相手だと流石に防がれるか……。

けど……いつまで防ぎきれるかな。

相手は弾道が読みにくいバイパーも防ぐためにシールドを広げている。シールドは
広げれば広げるほど強度が下がる。つまり……

弾道を設定、直前でアステロイドとが着弾するところに収束するように設定。
一点突破でシールドを破壊する!!

が、設定のあいだに二人のハウンドがこちらへくる。

「バイパー!!メテオラフレア!!」

メテオラとバイパーでフレアを展開。2発かすったが被害は0に等しい……。
そして、続けて

「バイパー、アステロイド……喰らえ!!!」

先ほど設定した通りに放つ。

「シールド!!」

「シールド!!……なに……。」

二人のシールドを貫通。秦隊員を貫く。

トリオン隊活動限界 ベイルアウトします。

秦隊員を貫いた。残りは片足を失った間宮隊員のみ。

「くっ!!ハウンド!!アステロイド!!」

「バイパー、メテオラ。フレア。」

フルアタックで攻めきるしか勝機がないと見てきた間宮隊長が攻撃を仕掛けてくる。
けど……。もう無駄だ……。

メテオラの全てとバイパーの半数を持ちいたフレアで相手のフルアタックを相殺。残った半分のバイパーが間宮隊長を貫く。

私のフレアは条件さえ整えば攻撃と防御が同時に行なえる。

先輩には申し訳ないが……。この試合、私たちの勝ちだ……。

戦闘隊活動限界。バイルアウトします。

そして、そのことを示すように、自動音声がながれ、自分たちの勝利が放送される。生存点含め、8対0対0。私たちの完全勝利だ……。

初ランク戦 ⑦

——観戦ルームサイド——

「さあ。場面変わって間宮隊対明野隊浅上隊員。一人で三人を相手にどう戦うのか!!」

「浅上隊員は優秀なバイパーの使い手ですからね。相手を直接視認しなくてもレーザーをみて遮蔽物越しに攻撃できます。そうやって時間稼ぎ狙いでしょうか。」

「そうだな。堤の言う通り、数の不利があるから、時間を稼ぐのも有効な手段だ。．．．実際、仕掛け始めた．．．が狙いは別のところにあるにありそうだなぞ。」

「風間さん?それはどういうことでしょうか?」

モニターではバイパーで攻撃し始めた浅上隊員が表示されている。

そして、相手も反撃にうつり．．．そして、それが迎撃された。

「なんと、浅上隊員。シールドではなくバイパーで間宮隊3人のハウンドを迎撃。被弾を避けました。」

「でましたね。浅上隊員がC級の時によく使っていた技ですね。たしか．．．フレアと名付けてましたね。」

「．．．フレアですか?」

「フレアか。なるほど。ハウンドの自動追尾を利用して迎撃したのか……。いや、それだけではなさそうだな。何か他にも種がありそうだ。」

「堤さんは知ってたんですね。」

「C級の訓練を担当していた時に見ましたね。今期の新人は目を引くほど優秀な人がそれなりにいますからね。あのフレアはシールドと違って確実に防げない代わりに、うまく迎撃すればシールドでは防げない攻撃も防ぐことができるそうです。」

「弾道を遅くして建物ごしに撃っているから精度は悪いが何しろ3人分だ。みたところ浅上隊員のトリオン量は上位に位置するがそれでも防ぎきれないリスクがあるからのフレアだろう。」

「なるほど。風間さん。ありがとうございます。」

「ああ。それから……。これからもっと場面が動くぞ。浅上がなにやら動きだした。」

「動き……。?」

モニターでは浅上隊員と間宮隊が建物越しに射撃戦を行っている。1対3とはいえ、バイパーとハウンドでの性能の差や隊員の力量からどちらにも有効打には至っていない。「今のところ射撃戦は互角といったところででしょうか……。そのうち距離が詰められるでしょうから、そうなると遮蔽物の有利がなくなり、数で劣る浅上隊員が不利になりそうな展開ですね」

「普通ならそうだが・・・どうやら違うようだ。」

突如爆発が起き、間宮隊の一人がベイルアウトする。

「あくつと!!爆発!?これはいったい・・・。そして鯉沼隊員がベイルアウト!!」

「爆発・・・。メテオラを使った様子ではありませんでしたね・・・。ということは・・・。」
「あらかじめ設置していたメテオラトラップだな。しかもスパイダーで起爆するタイプだな。」

「なるほど。ありがとうございます。風間さん。間宮隊の3人はバイパーに注意をひかれすぎてメテオラトラップのほうに引つかかってしまったんですね。浅上隊員、いえ、明野隊は今回が初のランク戦なので知らなかったというのも大きかったのでしょうか、ここで一人ベイルアウトは間宮隊にとって痛手ですね。」

「この先もメテオラトラップが仕掛けられてるでしょうから迂闊に近寄れなくなつて距離を詰められにくくなり、遮蔽物を有効に活用できる浅上隊員有利へ状況が変わりますね。」

「堤の言っていることはその通りだが、バイパーに注意をひかれすぎて引つかかったというのでは少し、説明が足りないな。浅上隊員は足元のワイヤーに気づかれないようわざとバイパーの弾道を上空から襲うように設定して注意の上に引き付けていた。」

「確かに上から攻撃が気続しているとどうしても足元がわの注意がおろそかになってし

まいますね……。なるほど。

そして、浅上隊員たみかける!! バイパーとアステロイドによるフルアタック!!

間宮隊の二人はシールドでしのいでいますが……」

「あれは、長くはもたないな……。」

「ですね。バイパーが相手だとしてもシールドは広げざるを得ませんからね、集中シールドならバイパーの弾道を拡散させて、シールドを広げたら弾道を収束させて一転突破。間宮隊の二人のトリオン量は平均レベルですから……押し切られますね。」

その言葉の通り、シールドを破られさらに間宮隊の一人がバイルアウトする。

そして……

そのまま次の攻撃で勝敗が決した。

「なんと浅上隊員、フレアでの迎撃と同時に間宮隊長へ攻撃。間宮を貫いた!! フレアは攻撃と防衛が同時に行えるというメリットもあるんですね。間宮を貫いた!! フレアは

つとと。そして間宮隊長もバイルアウト!! 試合終了です!! なんと、完全試合!! 今回ラック戦初参戦の明野隊による完全勝利。スコアは生存点の2点を加えて8対0対0!! これはボーダーにも新たな風が入ってきたということでしょうね。」

初ランク戦 解説

「では今回の戦闘の振り返りを、風間さん、堤さん、お願いします。」

「そうですね。今回の戦闘での決めてとなったのは情報の有無でしょう。明野隊にはほかの2隊のデータがあり、それに合わせた作戦を立案、行動できた。間宮隊、早川隊には明野隊のデータがなくて終始後手に回らざるを得なかった。そんな様子が見られていましたからね。明野隊がうまく自分たちのアドバンテージを活かしたというところでしょうね。」

まあ仮にデータがあつたとしても、明野隊の隊員の戦い方は割と独特な戦い方なのでうまく対応できるかはわかりませんが……。」

「確かに明野隊の方の戦い方はかなり独特でしたね。今後が楽しみです。」

「そういった意味では浅上隊員が最初に狙撃を当てたのは大きかったな。あれで他の2隊に狙撃があるかもと思わせて意識を狙撃に割かれた。その結果隊との合流が遅れ、椿

隊員の奇襲への反応も遅れた。」

「目の前の相手だけに集中できないというのはそれだけで不利になりますからね。」

「目の前の相手だけに集中できないという点では浅上隊員が単独でもその状況を作っていましたね。スパイダーを併用してのメテオトラップで相手の行動を妨害してしました。スパイダーはよく見ればどこにあるのかわかりますが、逆に言えばよく見なければわかりません。全力で走っている相手を追いかけていながらでは見つけるのはまず無理でしょうね」

「そして、相手の速度が落ちたところへバイパーでの攻撃、バイパーなら自分で張ったスパイダーを避けて攻撃もできますし、有利な状態で戦えますね。」

「今回の戦いを見ている限り、浅上隊員の幅広い戦い方が勝因としては大きな。だが、先ほど堤が言った通り、今回の戦いでは情報の有無が結果を大きく左右した。地力では明野隊が勝っているように思えるが、完封するまでの実力差はない。」

幸運と情報の有無、それから明野隊の戦術の特殊性が重なった結果だ。明野隊の真価が問われるのは戦術がばれた次回や次々回のランク戦だろう。特に浅上隊員はほかの隊から狙われやすくなるだろうからそれにどう対応するかが課題だな。」

「お二人とも、解説ありがとうございます。間宮隊、早川隊の動きはどうでしょうか？」

「両隊ともに言えるのは自分たちの得意な戦術にこだわりすぎているところだ

な。得意な戦術は自分の隊が最も強い状態で戦わせられるが、それにこだわりすぎると対策される。

また、戦術の偏りは状況の変化への対応力が下がる。それが今回の結果だ。浅上隊員がバツグワームでマップから消えたのはなぜか、あとの二人がどこで合流をしようとしているのか、はたまた合流せずにたたかおうとしているのか、今ある情報を整理して相手が何をしようとしているのかそれを考える力を身に付けていくべきだな。

だが、失敗したからと言ってそれを気にすることはない。失敗し、それをどうして行けばいいのかを考えるのがランク戦の意義だ。今後に期待する。」

「風間さんにはほとんど言われてしまいました。……まあ同意見ですね。間宮隊も早川隊もまだB級に昇格して短いですし、まだまだ伸びしろはあるように思います。今後に期待ですね。」

「お二方、解説ありがとうございました。それではただいまを持ちまして、ランク戦ラウンド1 二日目 夜の部を終わります。ここまでお付き合いいただきありがとうございます。それでは。」

「ありがとうございます。」

祝勝会

「それじゃあ、初勝利を記念して・・・」

「「「かんぱ〜い!!!」」」

カツンつとコップをぶつける音が鳴る。

私たち明野隊はランク戦での初勝利を祝ってささやかながらラウンジで祝勝会を開くことにした。

もちろん飲み物はソフトドリンクである。

「いや〜、完全勝利は幸先がいいね。みんな、お疲れ様。」

「村中さんのサポートも助かったよ。私の射撃の精度いつもより上がったし。」

「僕も、明野の観測もあつてだけど正確な相手の位置情報と地形情報のおかげで壁越しに旋空当てられたしね。助かったよ。」

「えへへ〜。ありがと。」

「出だしは文句なしって感じだな。まあ運が味方してくれたってところも多いけどな。そうだろヒロ?」

「雅樹の言う通りだね、最初の転送位置と私の狙撃が命中したのは運がよかったな。け

ど、次の戦闘からはあまり期待はしないようにしてくれ。さすがに警戒されたらその分当てにくくなる。」

「それもそうだな。」

「風間さんからも次の戦いでうちの隊の真価が問われるって言ってたからね。頑張らないと。」

「そういえば次の相手つてもうわかったの？僕は知らないんだけど・・・」

ふと疑問を感じた椿が聞いてくる。

確かに気になるところだ・・・

「一応決まり次第隊長である俺のところに連絡が入るようになってるみたいだけど、来てないからまだ決まってないっぼいな。」

「そっか、わかったら教えてね。」

まだ決まっていないのか・・・。だがまあランク戦の日程からかんがえるに今日明日でわかるだろう。作戦を考えておかないと・・・。

「おそらくだが・・・次の相手はB級中位のところの2つあるいは3つのチームと戦うことになる。全員がそれなりに強いが、A級クラスのエースポジションが一人いたりという強い相手になると思われる。油断はするなよ。」

「わかってるわかってる。一回かっただけで次もかてるとなっておもってねえよ。」

「油断大敵って意味だと浅上のほうこそ次以降の戦いは気をつけなよ。」

椿が私に注意を促してくる。確かにそうだ。

「そうだね。スナイパーでほつとくとスパイダーで罠だらけの巣を作る人なんて先に狙われるにきまつてるからね。」

「まあ、そのあたりはいろいろ考えてみるよ。」

と話していると・・・

「よお。初勝利おめでとう。見てたぜ。」

「おめでとうございます。」「おめでとく。」

柿崎隊の人たちが通りかかり、声をかけてきてくれた。

「柿崎さん。それにほかの方も・・・ありがとうございます。」

「桔梗ちゃんも久しぶりくく元気してた？」

「はい。宇井さんもお元気そうで何よりです。」

「しっかし、浅上。お前のところの戦闘員はみんな奇抜というか大胆だな。」

「ははは・・・確かに認めます・・・。」

シューター、トラッパー、スナイパーを初回のランク戦から兼業する私。

4刀流の雅樹。確かに大胆な戦闘員ばかりだ・・・。否定できない。

「一応僕は堅実なスタイルだとおもうんですけど……」

椿が反論するが……

「堅実な奴は初回から壁越しに旋空弧月なんて撃たねえよ。まあトリガーの構成が一番まともそうなのは確かだけどな。」

「桔梗ちゃんもこの人たちのサポートじゃ苦勞するでしょ」

「いえいえ、楽しんでやってますから。」

「……村中さん。できたら苦勞するということを否定してもらいたいかな」

「……あは♪」

笑顔でスルーされてしまった。

まあ他の人とは違う支援が必要になるし、私のように戦術の幅が広ければそれだけオペレーターの負担が増える。他より苦勞を掛けてるのは事実か……

「あんまりオペレーターの仕事を増やしすぎるなよ。オペレーターも大変だし、結果的に自分たちも危なくなるぞ……」

柿崎隊長からのありがたい助言。気を付けないと……

「わかりました、忠言ありがとうございます。」

「なに、きにすんな。お前らが強くなってくればその分だけ街を守る。これからも頑張ってくれよ。さて、それじゃ俺たちはもういくよ。次の試合も楽しみにしてる

ぜ。戦うことになった時は容赦はしないけどな。」

「はい。その時はお手柔らかにお願いします。」

そうして、柿崎隊の人たちと別れ、その後しばらくして祝勝会はお開きとなり、本日は解散となった。

雪下 月花

祝勝会の翌日、私は狙撃手用の訓練スペースにて、自主訓練を行っていた。

今日はあの子はいないようだ。

また狙撃について教えてもらいたかったけれど仕方がない。

動く人型的のに向けて撃ち続ける。

実戦で使ってみて実感したのだけれど、このライトニング、割と私と相性がいい。

トリオン量に比例して弾速が上がるライトニングは人よりもトリオン量の多い私が使うとかなりの弾速になる。不意を突けばシールドを張られるより前にあてることができるだろうし、そうでなくとも防ぎきるのはよほどのトリオンがなければ厳しいと思われる。

まあ今は私の技術の都合で、ほかのスナイパーの人と同様の戦い方は厳しいだろうけれど……

そのためには練習していかないと……

と、狙撃練習を行っていると……

「・・・お疲れ様。」

となりにあの子が来た。今から自主訓練のようだ・・・。

「どうも、今から訓練？」

「・・・。」

コクリとうなづく。

そしてそのままお互い無言で練習を行う。

「ふう」

集中が切れてきたので中断して隣の様子を見る。

そういえば、あの子の狙撃の様子を実際に見るのはこれが初めてだ。

いつもは自分の練習に集中してあまり見ていなかったからな・・・

いい機会だ。いろいろな勉強させてもらおう。

ふむ・・・単純な狙撃の制度だけでなく、照準を標的に当てる速さ、動きの先を読んでの照準など、狙撃の腕前は私と比べて2周りは上をいつているだろう。

観察していると・・・

「・・・ごめんなさい。あまり見ないでほしい」

注意されてしまった。じろじろ見すぎたようだ。

「申し訳ない。邪魔をするつもりはなかったのだけれど、つい見入ってしまった。」

「……」

彼女は無言でこちらをみてそのまま自分の訓練に戻った。

私も自分の練習にもどるが……

直前の会話のせいにかすこし気まずい。

集中力も落ちてきたし戻ろうかと考えていると……

「……そういえば、ランク戦みた。初勝利おめでとう。」

珍しいことに狙撃のこと以外で向こうから話を振ってくれた。

「ありがとう。でいいのかな。正直なところ運要素や情報の有無で勝ったというのが大きいからあまり誇れることじゃないのさ。」

「……たしかに。最初の狙撃は完全に仕留めておきたかった。」

「まったくその通りで。けどまあ、当てられたのは師匠のおかげさ。」

「……師匠？」

「ああ。私に狙撃のアドバイスをしてくれる君のおかげさ。君の指導がなければ当てられていなかった可能性のほうが高い。」

「……別に師匠とよばれるほどのことはしていない。努力してたのはあなた。」

「いやなに、いつも聞きそびれていたのだけれど名前を聞いていなかったからね。勝手にそう呼ばせてもらっていたのさ。申し訳ない。」

「・・・雪下。雪下月花。それが私の名前。」

「やつと聞けたよ。雪下さん・・・でいいのかな？私のことはランク戦の様子見てたなら知ってると思うけど明野隊の浅上博雅。本職はシューターだけど、スナイパーとトラップパーも兼任してる。改めてよろしく。」

コクリ・・・師匠こと雪下さんはうなずいて返事をする。

やつと名前を聞くことができた。この機会に勧誘もしてみようか・・・

「じゃあ名前を聞くことができたついでにもう一つ言い忘れた要件があるのだけだ。ど・・・いいかな？」

「・・・なに？」

「雪下さんって・・・」

ピリリリリリリ！ピリリリリリリ！

言いかけたところで、私の携帯がなった。これは・・・電話の呼び出し音だ。

「すまない。電話だ。失礼。」

かけてきたのは・・・うちの隊長である雅樹。ということは・・・。

『もしもし、ヒロか？今どこにいる？本部？それならちようどよかった。次のランク戦の相手が決まったぞ。今から作戦会議開くから作戦室に来てくれ。』

伝えるだけ伝えて切られてしまった。

ずいぶんと急な話だ。だが次のランク戦までに時間はあまりない。

少しでも作戦を練る時間が欲しいのだろう。

「申し訳ない。隊長からの緊急招集だ。次の対戦相手が決まったみたいでこれから作戦会議に行かなくてはならなくなった。話の続きはまた今度させてもらったのでもいいかな?」

「・・・きにしないで行ってくるといい。」

「すまない。いつてくる。」

そうして私は訓練室を後にした。

さて、次のあいてはどこだろうか。

初ランク戦　ラウンド2　作戦会議①

呼び出しを受けた私は隊の作戦室へ向かった。

どうやら私が一番最後だった。

「ヒロ、遅いぞ」

「浅上君遅刻だよ」

「悪いな」

雅樹と村中さんに茶々を入れられたが急な呼び出しにこたえてすぐに来たのだから決して遅刻などではないと思う……。まあ二人とも本気で言ってるわけではないので構わないのだけれど。

まあ本題に入ろうか。

「それで、次の相手が決まったって？どこになったんだ？」

「それが・・・運がよかったというべきか悪かったというべきかはわからないけど、この前みたいにはいかない相手だな。」

どこか歯切れの悪い発言だ。

「まあ次の戦いはB級中位との闘いだからね。いろいろ苦戦も出てくるとは思うよ？そ

のあたりは気にする必要ないんじゃないかな？」

椿が雅樹の歯切れの悪い発言に対して返答する。確かにそうだ。すんなりとA級に上がれるとは誰も思っていない。

「まず、今回も3チームによるみつどもえの戦いだ。相手の片方の部隊は諏訪隊。この前のランク戦の解説席にいた堤さんがいる部隊だな。」

「諏訪隊が相手か……。」

諏訪隊はショットガンタイプの射撃トリガー使い二人とアタッカー一人という近距離戦闘に特化した部隊だ。私たちの明野隊も隊長の雅樹は射撃トリガーも持ったオーラワンダーもどきではあるがまだ射撃技術は不十分だから実質アタッカー二人という感じになる。

つまりは接近戦はほぼ避けられない。うまくこちらが有利な状況を作らないとまずいな……。

「雅樹と椿にきくが……。諏訪隊のショットガンタイプの銃に対応はできそうか？ちなみに私のフレアは無理だな。一回は致命傷を防げても2回目以降は耐える自身がない。」

「フレアは割と高等技術だからね。仕方がないさ。僕としてはグラスホッパーとか遮蔽物を利用してうまく接近できたらつてところかな。迂闊に距離を詰めたらハチの巣に

されるね。」

「俺も似たようなもんだな。ブレードの間合いまで詰められたらいいけど、距離をうまく詰める方法考えないと近づく前にやられるな。」

ふむ。つまり諏訪隊にはいかに間合いを詰めるかがカギになるということだな。

「となると、まあ近づきやすいように遮蔽物の多いマップを選ぶとか、中距離から攻撃できる私や雅樹が牽制して樁が距離を詰めるとかそのあたりが主な攻略法と行ったところになるか。」

「それでいいと思うよ。あ、浅上君が間宮隊にしたときみたいに一人で3人倒してくれてもいいんだよ？そのほうが二人が安全だと思うよ。」

村中さんが無茶な要求をしてくる。

「そうだな、それができたらな……。そういえば諏訪隊のアタッカーのほうはどうだ？」

「ああ笹森君だね。一応僕は普通に戦えば8割以上で勝てるくらいかな。笹森君は弧月1本で戦うアタッカーだから僕とは相性がいいんだ。」

「俺がまあ五分五分つてところか。勝てるには勝てるけど安定しては勝ててないな。」

つまりは樁をうまく当てることを考えないといけないな。

「あ、でも普通に戦えばだよ。笹森君カメレオンもってるからうまく対処しないと僕でもあつさり負けちゃうかもだからね。」

そういえば、ログでみたな。笹森隊員はカメレオンを持っていてるんだった。それに対する対策も考えないと……。

あとは……

「まあ諏訪隊を相手にするうえで考えないといけないことはわかった。それで、諏訪隊とあとはどこが次の相手なんだ？」

「驚くなよ？ 次の相手は——だ。」

と、前置きされたが私は驚きを隠せずにはいられなかった。ある意味望んだ展開だった。だが、一番戦いたくない相手でもあった。

——驚くなよ？ 次の相手は那須隊だ。——

雅樹は確かにそういった。

初ランク戦 ラウンド2 作戦会議②

「驚くなよ？ 次の相手は那須隊だ。」

雅樹はそういった。

ラウンド1での完全試合のおかげでB級中位（その中でも一番下だが）が現在の明野隊のランキングだ。

那須隊もB級中位の隊であるから当たる可能性はもともと十分にあった。

確かにいずれかは戦うことになる相手だが公式戦2試合目から当たるとは考えていなかった。

今の私が那須先輩に対してどこまでやれるのか不安はあるが楽しみもある。

今の私たちと那須隊戦うとなると・・・有利な状況は・・・

「ヒロ？」

思考にふけっていると雅樹が声をかけてきた。一人で黙り込んで考えていたから当たり前のことか・・・

「すまない。考え込んでいた。」

「だから驚くなつていったのに・・・。それで、今のお前からみて次の戦いはどうなる？
言い忘れてたけど、マップの選択権は次もうちができる。それを込みでお前の意見が聞きたい。」

作戦の立案は主に私と椿だが、こと那須隊に限って言えば私が一番情報を持つてる。

私が意見を足して言うべきか。

「結論からいうと・・・相性は悪くない。

第一に那須隊のアタッカーの熊谷先輩は片手弧月＋シールドという椿が得意な相手だ。雅樹の4刀流のスタイルも初見なら大きく有利に働くだろうし何よりうちはアタッカーが二人だ。近接戦ならこちらが有利だ。

那須先輩についてもだが、那須先輩のバイパーはいわば私のバイパーのオリジナルだ。私なりにアレンジしているところがあるとはいえ弾道に類似しているところが多
いはずだからある程度の弾道は読めるはずだ。

だから初見というのは二人にとってはアドバンテージになる。と思う。

スナイパーの日浦さんについては、特に有利も不利もないからそのあたりはうまく地形とかを利用して戦っていくのがセオリーだな。」

「俺と椿の二人としてはアドバンテージっていったな・・・」

「浅上のほうはどう？よくログ見てたし、動きの癖とか作戦とかよく理解してるはずだ

から君のほうでも有利なんじゃないのかい？」

雅樹と椿が私の考えに対して引つかかったところがあるともいうように見てくる。

確かに一番ログを見てきたから那須隊の行動については理解している。けれど……。

「私に関しては残念ながら有利なところは少ない。どちらかといえば私が不利だな。」

第一に単純にシューターとしてもバイパー使いとしても那須先輩に比べると私のほうが二回りは下だ。1対1ならあらかじめトラップを仕掛けた状態でようやく勝ち目が見えてくるといったところだな。

これが熊谷先輩になるともつとまずい。那須先輩に対しての二人みたいに、おそらく私の弾道は熊谷先輩には見切られやすい。その分だけ距離を詰められやすくなって不利だな。

日浦さんについては潜伏場所、狙撃のタイミングが状況次第だがある程度予想がつく

からそこそこに有利といったところだな。幸いにしてスナイパーは私と日浦さんの二人だから、戦闘開始時にバググワームを使ったのが一人だけならその人が日浦さんだ。

その方向を覚えておけばライトニングによる狙撃とはいえ防御や回避も十分可能はずだな。」

「勝機はあるけどそう簡単にはいかないってことだね。」

「一言にまとめるとそうだな。それに、那須隊だけでなく諏訪隊もいるからうまく戦場を使わないと有利な展開を作るのは厳しそうだ。」

「さすがにこの前みたいに別々に相手できるほど甘くないから仕方がないな。」

「特に那須さん相手だと1対2でも負ける可能性十分に考えられるからな。一人で倒そうとするのはなるべく避けるようにしないとな・・・。」

個人の實力もだが、ランク戦で大事なのは部隊の地力だ。

相手の2隊には地力で劣ってる分はこちらの持つているカードで補っていく必要がある。

私たちにとって有利な状況とはいったい何があるか。。。

そのあたりをまとめていくのが先だな・・・。

さて、どうしたものか・・・。

初ランク戦 ラウンド2 作戦会議③

「とりあえず話をまとめるとしようか。私たちが有利に戦うために必要な条件は4つだ。

1つ。那須先輩に対しては二人以上で戦うこと。どうしても一人で戦うことになっても無理に戦わずに撤退か、時間稼ぎに徹する。

2つ。熊谷先輩には雅樹か椿が相手をする。

3つ。狙撃戦にならないように遮蔽物の多いマップ、あるいは、狭いマップで戦う。

4つ。諏訪隊の笹森隊員には私か椿。あるいは二人以上で戦う。

今のところはこのあたりか。」

状況の整理を行い、ほかのメンバーに確認をとる。

「浅上は笹森君相手になにか策があるの？カメレオンもってるからいろいろ厄介じゃない？」

椿が質問をしてくる。カメレオンのトリガーは確かに厄介だが、おそらくは大丈夫だと思っっている。

「私はもともとマップに移ってれば直接見てなくても当てられるように練習してるから

な。距離や遮蔽物があれば問題ない。スパイダーもあるし、ほかに対策も思いついてる。」

「そつか。それならいいや。そうそう、言いそびれてただけど、僕の空きスロット二つあったけどそこに一つスコープピオン入れることにしたよ。まだお試しだけどね。この間王子隊の隊長の王子さんに進められたんだ。弧月だけだと腕やられたときに何もできなくなるからって。」

椿が追加トリガーの報告をしてくる。そうか、スコープピオンをいれたか、確かに体のどこからでもブレードを出せるスコープピオンなら腕をやられてもまだ戦える。

納得の選択だ。

「そうか。わかった。それも踏まえてまた作戦を考えておくさ。今のところ次の戦いは椿と雅樹に頑張ってもらうことになりそうだからな。」

「ほう、つてことはなにかいい策おもいついたのか？ヒロ？」

「なんとなく・・・だけどな、細かいところを詰めたらまた話す。」

「わかった。」「わかったよ。」

今回の作戦会議はこれで終了となった。

—— 諏訪隊サイド ——

作戦室にて諏訪隊のオペレーターを除いた3人が集まっていた。

「次の相手は那須隊と明野隊か。かー、曲者ばつかじゃねえか。めんどくせえ。」

諏訪隊長諏訪洸太郎はトレードマークにもなっているタバコを吸いながらつぶやいた。

言葉遣いに荒いところはあがあるが、基本的に世話好きであり、新入隊員の指導にあたることも多い諏訪隊はほかの隊に比べ明野隊についての情報を持っている。

明野隊の特異さに関してはよく理解しているといえる。

「明野隊はデータも少ないですし、変わった戦闘スタイルですからね。次も何を仕掛けてくるか……。気を付けないとですね。」

「おい、日佐人、お前明野隊のアタッカーの二人と戦ったことあるか?」

「両方あります。といっても、その時は弧月だけでの戦いでしたけど……。明野君相手は大体五五分、椿君にはほとんど負けました。カメレオンありでも負ける可能性は十分にありますね。」

負けた時のことを思い出し、少し顔をしかめながら答える。

「となると、いつも通り3人で合流して戦ったほうがよさそうですね。」

「だな、那須はどうする? 明野隊のあの3人も厄介だが那須はもつと厄介だぞ?」

「どこかで接近戦を持ち込むしかありませんね。射程で言えばこちらが負けてますからね。これは明野隊の選ぶマップ次第になりますけどね。何とかして近づきましょう。」

「日佐人お。カメレオンでさきさつて倒せねえか？」

「無茶いわないでくださいよ。普通なら近づこうとした時点でハチの巢ですよ。」

「さて、どうすつか……。」

しばし考え込む諏訪隊であった。

—— 那須隊サイド ——

那須邸にて那須隊の戦闘員三人が、さらにオペレーターの志岐小夜子がビデオ通話上で作戦会議を行っていた。

「次の相手は諏訪隊と明野隊……。玲、この浅上つて子……。」

「そうね。私の弾道を研究して反映してきているわね。レンジなのか、違うところも多いけどね。まだ弾道が素直で甘いところがあるわね。そのあたりを突けば負けることはないと思うけど、弾道見切られてやすいと思うから時間がかかりそうなの。くまちゃんか茜ちゃんに浅上君の相手はお願いしていいかな？」

明野隊はきつと私への対応を特に意識して作戦を立ててくれるはず。

そう読んで作戦の要になるであろう浅上を早いうちに落とすべく、那須隊長は作戦方

針を決定した。

「任せてください!!狙撃の腕なら多分私のほうが上ですから狙撃戦になれば打ち抜いてみせます!!」

ライトニングの扱いなら私のほうが上とばかりに胸を張る茜だが、それに対して熊谷が釘をさす。

「だからって油断は禁物よ、茜。いいわ、玲。浅上君は任せて、代わりに椿君は任せてもいい?私じゃ相性悪くて勝てそうにないの。」

「いいわ。それで行きましょう。」

「隊長の明野君も隊長か茜ちゃんが倒したほうがいいと思います。戦闘スタイルが特殊ですからなるべく接近戦は避けたほうがいいかと。」

「志岐ちゃんの言うとおりね。アタッカーの二人は私が仕留めるからサポートをお願いするわ。」

「わかった。それで作戦考えていくわよ。」

雪下 月花 ②

作戦の次の日、私はもう日課にもなっている狙撃の訓練を行っていた。いつもの場所、いつもの時間帯だ。

最初は一人だったが、後から雪下さんがやってきて二人で並んで狙撃の練習を行っている。

ひと段落ついたので、私は昨日の続きを話すことにした。

「雪下さん、少し話いいかい？」昨日言えなかった話をしたいのだけれど……。」

「……。」

雪下さんは返事はないもののコクリとうなずいた。

「雪下さんさえよければだが、うちの隊にはいらぬか？

優秀なスナイパーがいてくれると戦術の幅が広がって助かる。」

「……。」

ペコリと頭を下げられた。
人見知りをする性格だろうし、急に隊に入ってくれと言われても無理か
……。

もしかしたらほかにも先約があるのかもしれない。

「すまない。急な話だったな。残念だが仕方ない。また気が変わったら教えてくれ。雪下さんならいつでも歓迎する。」

と話を切り上げようとしたが……

「……まって。あなたのいる隊に誘ってもらえたのはうれしい。

……入ってみたいと思う。けど、まだ私はC級だから……」

なるほど……入れないとはそういうことか……

失念していた。

「驚いた。てつきりもうB級にあがっているものかと思っていた。

もちろん、B級にあがるまでまつさ。それから入ってもらえるとありがたい……」

スナイパーの昇格条件は狙撃訓練の結果が上位15%、実質だと30%くらいだったか……それに3週間連続ではいること……

正直ほかの戦闘員に比べて条件が厳しいと思う。

「……少し前に体調崩して、訓練に出れなかったときがあったから……

何もなければ……あと一週間とすこししたら昇格できると思う。」

「そうなのか。それは良かった。私でよければ昇格した際には何かささやかだけれどお祝いでもしよう。アドバイスをくれたお礼もしないといけないしな。」

「・・・アドバイスのことは私が気になったただだから別に気にしなくていい。」

「そうか、でもなにかお祝いはさせてもらうさ。そうそう、うちのメンバーも紹介する。オペレーターの中中さんは同姓の仲間ができたつてすぐに喜ぶと思う。」

「・・・ありがとう・・・。」

「紹介のことに關しては雪下さんの都合に合わせるから・・・。教えてくれ・・・。」

「・・・うん。」

いい方向に話がまとまりそうではよかったが・・・雪下さんの表情に曇りが見える。なぜだろうか・・・。

「私からの一方的な押し付けになってしまったな。先に聞いておくべきだったが、うちの隊への要望や知っておいてもらいたいこととかあれば教えてくれ。」

「・・・確認。あなたたちはランク戦で上位をめぎすの?」

「そうだな、やるからにはA級に上がりたいと思ってる。私だけじゃなく、ほかのメンバーも同じ気持ちだ。」

「・・・そう、それなら、私はあまり力になれないかもしれない・・・。」

私、ランク戦では力になれないから・・・。」

なれそうではない・・・じゃなくて「なれない」と来たか・・・

表情の曇りはそれが原因か・・・。

「……理由を聞かせてもらってもいいか？」

「えつと……それは……」

理由をいうのをためらっている。とても言いにくいことのようにだ。

ここは深入りを避けたほうがいいのだろうか……

「言いたくないなら……」

無理に言わなくていい。そういおうとしたとき……

「お、やっと見つけたぜ。お嬢ちゃんちよつといいかい？」

後ろから声がかかった。

雪下 月花 ③

「お、やっと見つけたぜ。お嬢ちゃんちよつといいかい？」

後ろから男の人の声が聞こえた。

気づいていなかったのだから驚いた。

雪下さんのほうは見えていたからか驚く様子はなかったが……

誰の声か……

振り向くと、リーゼントが特徴的な人が立っていた。

この髪型……この服装……。

「A級の当真先輩？」

「お、なんだ、俺のことしってるのか。うれしいねえ。当真勇だ、よろしく、お二人さん。」

「最近昇格しました、明野隊所属の浅上です。よろしくお願いします。当真先輩。」

「……ペコリ」

隣で雪下さんが会釈をしていた。

「それで、わざわざどうされました？当真先輩？雪下さんに何か用事でしょうか？席を外したほうがいいですか？」

「浅上、お前かてえな……。もつと肩の力ぬけよ、スナイパーならいつでもリラックスしとけよ……」

前に柿崎隊から言われたようなことを言われてしまった。

気を付けなければ……。

「まあ、いいか。別に席を外す必要はねえよ。ちよつとお嬢ちゃん……。雪下ちゃんだったか？に話を聞きたくてな……」

「……なんのことですか？」

雪下さんが少し首をかしげている。

ここまでの様子を見る限り、雪下さんも当真さんとは初対面のようだ。

同じスナイパー同士で交流があったとかはなさそうだ。なら何なのだろう。

「この前の狙撃掩蔽訓練覚えてるか？先週やったやつだ」

「……」コクリ。雪下さんがうなづく

狙撃掩蔽訓練……

確か雪下さんが9位って言っていたな。正規隊員もいる中での9位だ。まぐれで出せるようなものじゃない。

それなら、その腕を見越しての勧誘だろうか？

「雪下ちゃん、俺が見つけたと同時に俺に気づいたよな。距離は600mは離れてたと

おもうぜ……」

「見つけたと同時に気づいた？ スコープの反射で気づかれたとかではなくてですか？」

スコープのガラス（トリオンで構成しているから実際には違うと思われるが）

は太陽との位置関係次第で太陽光を反射して撃つ前に気づかれる場合がある。

もちろん、反射を防ぐためのオブションもつけられているが完全ではないからその可

能性がないとは言えないだろう。

「おいおい……俺がそんなへましたりしねえよ。あれは明らかにそれ以外の要因で気づいてたぜ。それに、撃つタイミングもわかってたな？」

頭に当たらなかったのは奈良坂以外じゃお前が初だぜ。どうして気づいたのか教えてもらっていいかい？」

奈良坂先輩以外の人にヘッドショットばかりしているのも驚きだけれど、600m先の人をレーダーなしに見つけて、なおかつそれが誰か、こちらに気づいたかを判別できる当真先輩って本当に同じ高校生なのだろうか？

「……すみません。言えません……。」

雪下さんは小さく返事をした。

言えない？ なぜだろうか？

言えない理由を聞いてもいいものだろうか考えていると……

「……すみません。失礼します。」

ペコリと頭を下げて、走って出て行ってしまった。

「あらら、怖がらせちゃったか。そんなつもりはなかったんだけどな……」

当真先輩がつぶやく。

「すみません。彼女は人見知りをするようですから……」

急に立ち去ったことに対して私からフォローを入れておく。

「ん？ああ起こってねえよ、女の子に問い詰めるような聞き方した俺も悪いからな。」

ところで、浅上、雪下ちゃんは明野隊に入るの？」

「いえ、今は勧誘しているところで返事はまだです。誘ってくれてうれしいとは言って

いたのですが、ランク戦であまり力になれないからってためらっているみたいでした。」

「力になれない？」

「はい。理由はわかりませんが、自分からは言いにくい理由みたいですね。単純に実力

不足とかではなさそうです。」

「つつーことは触れられたくない何かがあるってことだな。大体予想がついたぜ。さん

きゅーな。」

そういつて当真さんは帰っていった。

触れられたくない何かがある……。

ランク戦と、この前の訓練のことで・・・。

共通する理由かはたまた別の原因か

今の段階ではわからないな。

かといってあまり深入りするのもよくない。

さて・・・どうしたものだろうか・・・

初ランク戦 ラウンド2 当日

雪下さんのことは気になるけれども、次のランク戦が迫ってきている。

それも那須隊が相手だ……。

生半可な作戦では勝てないだろう……

もう少し対策を考えなければ……。

——試合当日 観戦ルームサイド——

「ボーダーの皆さんこんにちは!!海老名隊オペレーターの武富桜子です。

ランク戦ラウンド2 昼の部を実況していきたいと思います。さて、本日の解説は『……とおもうじやん?』でおなじみの三輪隊の米屋先輩。そして、もう一人は座右の銘は千発百中。太刀川隊のシューター出水先輩。」

「ども〜」

先輩方二人が手を振り、ギャラリーに対して挨拶をする。

「という槍バカ、弾バカコンビに来ていただきました。本日もよろしく願います。」

「おいおい。」

突っ込みを入れられますが私は気にしません。実況を続けていきます。

「さて、今回の対戦のカードは明野隊、那須隊、諏訪隊のみつどもえの戦いですが・・・お二方はどうみえますか？」

「ん、そうだな。実力的に那須ちゃんが頭一つ抜けてるし、後の2隊がどう戦うかって感じか？あとは明野隊が何してくるか興味あるな。」

「俺も明野隊には気になるな。この前おもしれーことしてたし、今回もきつと那須隊を意識して行動してくるんじゃないかね？」

米屋先輩と出水先輩がそれぞれ返してくれる。ふむふむ。

「では今回の戦いの要是那須先輩と明野隊の行動ってことでしょうか？マップの選択権も明野隊にありますし、前回同様明野隊が試合の流れを握る・・・といったところですか？」

「・・・とおもうじゃない？」

さっそく米屋先輩の口癖ができました。どこか間違っていたのでしょうか。

「といますと？」

「たぶん・・・だけだな。そろそろマップが決まるから見てみな。」

私はモニタをみます。そして、マップが選択されました。

「マップが選択されました。明野隊が選んだのは……市街地D!!」

市街地Dというと……大通りとそれに面した大型のショッピングモール施設のあるステージですよ?」

「そうだな。建物が大きいから屋内での戦闘が起きやすいステージだ。ざっくり言って、建物のなかからアタッカー有利、大通りでの戦いなら弾トリガーが有利ってところだな。」

「気を付けねーといけないのは……建物がでかいから縦が広い。だからリーダーで近くても見つからないってことがあることと、バッグワームで隠れあいになるとメテオラであぶりださねーと見つけにくいってとこだな。」

米谷先輩が続けてマップの解説を、出水先輩が補足をしてくれた。

「マップの解説ありがとうございます。ということは……どのような展開が予想されるのでしょうか?」

「諏訪隊はガンナーの二人の銃が散弾銃だから近いほうが戦いやすい、だから建物の中での戦いをしたい。反対に那須隊はスナイパーが戦いやすい外で戦いたってところか。」

「明野隊はまあ中が有利ってところか。アタッカーが二人だからな。那須ちゃんと浅上はシューターだけど二人のメイントリガーはバイパーだし、中でも外でも大丈夫ってと

「ころじゃねーの?」

明野隊、諏訪隊は中で戦いたい、那須隊は外で戦いたいと・・・。
なるほど・・・。

「それなら今回は激しい屋内戦が期待できそうですね。」

「ま、普通ならな。」

出水先輩が意味深につぶやいた。少し踏み込んで言葉の続きを聞きたいけれどもう転送時間だからその時間がないのです。ランク戦が始まってしまいます。

「なにやら、先輩方が意味深な顔をしています。まもなく転送開始です。それでは・・・ランク戦ラウンド2。・・・スターーーート!!」

——明野隊サイド——

「さて、作戦を確認するぞ、初期位置しだいにはなるけど、熊谷先輩とあと可能なら日浦さんを雅樹と椿が仕留めてくれ、私はその間那須先輩を相手に時間を稼ぐ。多分諏訪隊がこつちに来るだろうからうまく使って一緒に足止めできるように頑張るぞ。」

「了解だよ。なるべく早くいくから頑張ってるね。」

「だな、早々にバイルアウトとかはやめてくれよ？ヒロ。」

二人はそう返事をした。

「村中さん、私のサポートと、スナイパーの警戒をよろしくね。」

「おっけー、まかせて。浅上君も頑張ってるね。」

作戦上、私のサポートを優先してやってくれることになっている。

この作戦を立案したのは私だ。そう簡単に落ちるわけにはいかない。

私がどれだけ時間を稼げるかが要だし、うまくやらないとな。

—— 諏訪隊サイド ——

「市街地Dかよ。めんどくせえ。」

「まあまあ諏訪さん、うちの隊に有利なステージなんですから。」

「小佐野先輩。メテオラのセットお願いします。」

「はいはい。すわさんとつつみんにもセットしとくね。」

—— 那須隊サイド ——

「先輩どうしましょう。私も中に入ったほうがいいですか？」

「落ち着きなさい茜。まずは相手の出方を見てからよ。」

「そうよ、茜ちゃん。それに作戦の方針は変わらないわ。私が明野くんと椿君を、くまちゃんを浅上君を、茜ちゃんがサポート。いい？」

「二人にメテオラ入れておきました。頑張ってください。」

ランク戦ラウンド2

ステージ 市街地D

時間帯 夜

天候 大雨

初ランク戦 ラウンド2 ①

——那須隊サイド 日浦茜視点——

転送された位置はマップの北西、シヨッピングモールの外だ。

「よかった。この位置ならすぐに狙撃できる。といつてもこの天気じゃ……」

天候は雨、時間帯は夜だ……。視覚支援があるとは言つても視界が悪い、いつもより近づかないと……。

えっと、リーダーは……。

バッグワームで私と同じように消えてるのは一人だけ。スナイパーも兼任してる浅上先輩だ。場所は、マップの南西。そこそこに近い。といつてもこの天候じゃまだここからじゃ無理だけど。

「先輩、運よく最初からモールの外です。ただ、この天候じゃ視界が悪いので浅上先輩にはもう少し近づかないと無理です。」

「わかった。あたしも浅上くんに近いから予定通り、サポートお願いね。」

「二人とも、気を付けて。」

熊谷先輩が近くにいる。作戦通り、二人ですぐに落として那須先輩と合流しよう。

向こうがバググワームでリーダーに映ってないから細かい位置はわからないけど……モールに向かうなら大通りを通るはず、そこを狙えば……。

「2人そっちに向かつてます。多分明野くんと椿君です。諏訪隊はモール内で合流を目指している様子です。」

志岐先輩から警告だ。明野隊のアタッカーの2人がこっちに向かつてる。浅上先輩のところまで合流する予定だと思う。

「二人とも、少しの間そっちは任せてもいい？ 一人は近く通るから仕掛けてくるわ。」

合流を優先してか、明野隊の一人は那須先輩が近くにいることも関係なくこっちに向かつているみたい。

諏訪隊の3人の合流はもう止められないし、早くこっちをおわらせないと……。

屋内戦の起りやすい大型ショッピングモールのあるこの市街地D。マップも狭いし、スナイパーには不利な地形だけど……。

今回はそれがよかつたみたい。

バググワームをした人影を発見。

「浅上先輩発見しました。座標送ります!!」

志岐先輩経由で発見した座標を共有。熊谷先輩がそこに向かつてくれる。それから勝負だ。

「ワイヤーあったわ。あたりみたい。」

浅上先輩のすぐ近くにまで先輩が来てる。よし、この調子。

さつき見つけたのはあそこだったから、多分今いるのは……あの家の近くだと思う

!

「見つけた!!! って、え? どうして?」

—— 諏訪隊サイド 諏訪視点 ——

「ん? 中に向かっているのは俺らだけか?」

「みたいよ。あとの隊はマップの南西のほうに向かっている」

屋内戦に持ち込むためにこの天候設定にしたのかと思っただがほかの隊は両方外で合流を目指してやがる。

「諏訪さん、どうします? 外での戦いってなるとこつちが不利ですよ?」

「んなことわかってる。けど向こうがこつちをほっぽって合流させてくれるんだ。ありがたく乗っておこうぜ。」

「ですね。安全に合流できるならそれに越したことはない。それから予定通り浅上君と那須さんを優先して落とすにいきますか。」

今回の戦闘で一番厄介なのが那須、そして、ほつとくとワイヤーやメテオトラップをいたるところに仕掛ける浅上。

どちらも置いとくとめんどくせえ。

「あ、マップの南南東付近で戦闘おきそう。多分明野隊のどちらかと那須さん。南西のほうでももうすぐ戦闘おきそうよ。人が集まってきたよ。

バッグワームで消えた2人のうち、多分そつちが浅上君だとおもう。」

「那須隊も浅上を最初に仕留めておきたいだろうから、合流せずにそのまま行ったか。何とかして漁夫の利ねらいてえところだが・・・」

「なんか引つかかるんだよな。」

「どうしました諏訪さん？」

「なあ堤、明野隊の作戦ってなんだと思うよ？」

「マップ選択権があつたくせにこのままじゃ浅上隊に有利な展開はこねえ。」

「アイツらの性格からしてなにか仕込んできそうだが・・・」

「明野隊の作戦ですか・・・。確かに何が狙いかわかりませんね。何か仕掛けてきそうです。すね。」

「何かってなんですか？」

「んなもんしらねえよ。けど、何が起きてもいいように油断するんじゃないぞ？」

「了解!!」

初ランク戦 ラウンド2 ②

「見つけた!!! って、え? どうして?」

日浦茜は今度こそ目標をスコープで正確にとらえることができた。
そして驚きを隠せなかった。

「茜?」

「茜ちゃんどうしたの?」

2人の先輩が何事かと声をかける。

「せ、先輩。バググワームで隠れてたのは浅上先輩じゃないです! 椿先輩です!!!」
スコープの先にいたのは椿健太がいた。

「そろそろいいかな?」

椿はワイヤーを張るのをやめ、反転して熊谷のもとへ向かう。
すぐ近くまで追ってきていたため、近距離戦は免れ得ない。

「こんばんは、熊谷先輩、一点いただきますよ。」

椿は言い放ち、切りかかる。

「まんまと引つかかったってわけね。けど、そう簡単に負けるわけにはいかないの。」

弧月の扱いでは負けるけれど、こっちには茜がいるから実質は2対1。

しのいでいればそのうち勝機は見えてくる——

「茜。予定は変わったけれどいつも通りよ。タイミングは任せるわ。」

「了解です！」

相手が弧月のみならばA級のアタッカーにも匹敵する実力を持つ椿。

ゆえに、一振り一振りは鋭く、そして正確。

普段の個人ランク戦であれば、6合の撃ち合う前には致命傷あるいは決定打となる一撃を食らっていただろう。

しかし、今回の戦闘に限って言えば、そうはならない。

椿の攻撃は鋭く正確だが浅い。

日浦茜からの狙撃に対応できるよう大きく攻めることができず、また、そちらに意識を割かねばならないからだ。

また、受けに回っている熊谷友子も相手の攻撃を裁くことに関しては達人の域に達しつつある。攻めることを意識せず、守りのみに徹すれば、そうやすやすとは崩されない。

1合、2合、3合、4合・・・
剣劇は続くが決定打には至らない・・・

マップ南東

「椿君が南西?ということは?」

南西に向かっていた敵が一人、急に進路を変えて那須玲のもとへ向かっていた。

2人は互いに射程距離内であったがあえて攻撃せずに距離を詰めていく。

そして同時に視認する。

「こんばんは。初めまして、那須先輩。一手ご指導いただけますか?」

单身那須に向かっていたのは、浅上博雅であった。

—— 観戦ルームサイド ——

ランク戦スタート時——

「さあ、時間です。全チーム一斉に転送されました。

マップは市街地D、天候は大雨、時間は夜!!」

実況の武富桜子の声がルーム内に響く。

「完全にスナイパー対策だな。」

「ああ。浅上の腕はわかんねえけど、B級に昇格したばかりだからな、まだそこまでの腕じゃねえだろ。今回は狙撃なしで勝負するつもりだろうな。」

出水公平、米屋陽介の両名がマップの条件設定について解説を加える。

そして、開始してすぐに2人の隊員がバッグワームを起動した。

「そして、スナイパーの2人がバッグワームを起動。マップから消える!!」

明野隊の浅上隊員は今回は狙撃の難しいステージ、条件を設定しましたけど、するとこのバッグワームの起動は今回はスナイパーよりトラッパーとしての役割を意識して……というところですか?」

「……と、思うじゃん?」

「桜子ちゃん……モニタよく見てみて。」

「え？どういうことですか？．．．あー！失礼しました！」

バッグワームを起動したのは浅上隊員ではなく、なんと樁隊員。これはいったいどういうことなのか？」

「トラップパー、スナイパーはほつとくと厄介だからな。大体の居場所の予想がつくスタート時は狙われやすくなる。特に今回はスナイパーは茜ちゃん一人だからな。那須隊はどこに浅上がいるかすぐにわかる。」

けどま、浅上はシューターが本職だからな。狙撃をするつもりがないなら位置を隠す必要がない。うまくそれを使ったな。」

なるほど．．．と一度は納得するが、武富の頭にふと疑問が思い浮かぶ。

「米谷先輩、弧月使いに強いと評判の樁隊員を熊谷先輩と戦わせようとしてそうしたのはわかりましたけど、明野隊からすれば那須隊長と熊谷先輩の区別はどうつけたんですか？」

「それでもないぜ、熊谷ちゃんは樁と当たるの避けたかっただろうしな、よっぽど転送場所が悪くねー限り最初からどこにいるかわかる浅上のところは茜ちゃんと二人で向かう予定だったんだらうよ。」

「ついでに言えば、浅上のパイパーは那須ちゃんのをモデルにしてるっぽいからな。研究されつくしてる自分より熊谷ちゃんに行かせたほうが点を取りやすいって考えたの

もあるだろうな。」

「なるほど……。ありがとうございます。あと、やっぱり浅上隊員のバイパーは那須隊長がモデルになっているんですね。」

「あくまでモデルってただけだな。わりとアレンジはされてるし、相手に合わせて弾道を引くのは那須ちゃんのほうがまだまだうえっほいな。」

すべての攻撃をリアルタイムで弾道を引いて戦う那須に対し、まだそこまでの領域に至れていない浅上は要所要所ではあらかじめ設定してある弾道を使用して戦っている。

まだ、それがはつきりとわかる程データは知られていないはずだが、天才ゆえか出水はすでに見抜いていた。

「那須隊長に一日の長ありということですね。」

「そうだな。けど、さっきも言った通りほかの誰より研究されてるだろうから、この戦いは見ものだな。」

出水の口調や態度は笑っていたが、目は二人の実力を推し量っているかののように笑っていないかった。

初ランク戦 ラウンド2 ③

「こんばんは。初めまして、那須先輩。一手ご指導いただけますか？」

さて、自分が立案した作戦だ。仕事はきちんとこなさなければ・・・

「浅上君・・・そう、釣られたってわけね・・・」

今急いでるの。スパルタでいいわね？」

那須先輩はそう言うのと、バイパーを展開。自身の周りにキューブを展開する。

それを確認して、私もバイパーを展開。また、建物の影に隠れる。

分割数は125。そのうちの25発分を拡散、そして建物越しに那須先輩に向けて放つ。

射出後、シールドを正面に発動。

フレアで相殺し損ねた弾丸がシールドで防がれて消える。

けど、これで終わりじゃない。さらに25発分を今度は真上に放つ。

シールドも上に展開しなおす。

防御成功。

那須先輩のバイパーの怖いところは鳥籠とも称される全方位からの攻撃。

それをさせないためには遮蔽物で弾が来る方向を制限させなければいい。

けれど、隠れてるだけじゃ、樁たちのほうへ行かれる。

それだけは防ぐ必要がある。

「村中さん、樁たちの位置と那須先輩の位置を線で結んで視界情報として送ってほしい。移動を妨害する。」

「任せて。視覚支援。」

これで樁たちの方向と那須先輩の移動経路がレーダーを見なくてもわかる。

さて、必要な支援はしてもらった。あとは・・・

今度は移動しながらフレアとシールドを展開。

フレアの設定は相手の弾がアステロイドじゃない分いつもより威力は低めでいい、その分を射程重視にチューニングして残った弾丸を那須先輩の移動先を制限する弾道で放つ。

むりに当てる必要はない、時間を稼げればそれでいい。

正面から、上から、後ろから、前と後ろ、右斜め上

様々な角度から弾丸が飛んでくる。

けれど、

入隊してから毎日那須先輩のログを見て勉強してきた。
弾道の癖は目に焼き付いている。

しのぎ切る。耐えた分だけ二人が楽になる。

—— 観戦ルームサイド ——

モニターでは樫、熊谷及び浅上、那須の二つの戦闘が移っていた。

2か所で行われている激しい戦闘にギャラリーはくぎ付けになっている。

「那須隊長と浅上隊員によるバイパーによる激しい射撃戦が繰り広げられている!! 押し
ているのは那須隊長。浅上隊員はフレアでしのいでいるが大きく反撃ができない様子
! やはり経験の差が出ているのか!!」

「それはちよつとちがうな。あれは攻める気がないだけだ。時間を稼いで、その間に樫
たちが熊谷ちゃんを倒してこつちに来るのをまつてるとこだな。」

実況に対し、米谷が訂正を入れる。そのまま出水に質問する。

「しかし、よく防いでるじゃん? フレアってあそこまで防げるもんかね?

そこんところどうなの? お前できるの?」

「ん〜似たようなことならできると思うぜ?」

出水の返事にヒュ〜と米谷が口笛を吹く。

「言い切りましたね。さすがA級1位の天才シューター。」

「別にあのフレア自体はそんなに、高等技術ってわけじゃねえよ。」

「お、そうなの?」「そうなんですか?」

「そこそこのトリオン量とある程度のテクニクがあればたいのやつができると思っただけ。」

「トリオン量はわかりますけどテクニクってどういうものですか?」

「フェアじゃねーからあんまり細かくはいわねーけど、例えばそうだな。」

相手の弾道の設定を予測する。シールド張られてもぶっ壊せるように弾を集める。よけられないように相手の周囲にも弾を撃つ。

こんな感じだな。そして、それに合わせてこっちも弾幕を張る。弾が集まってるなら、そこに集まるように、周囲に撃たれたら自分の体をカバーするように。ほかにもいろいろあるがわかりやすいのだとこんなところだろ。」

「聞いている限りだとそれだけでも難しい技術に思いますが……。」

武富の発言に観客の大半（特にC級）がうなづいていた。

「難しそうに聞こえるかもしれないけど、ハウンド使えば探知誘導で相手の弾に向かって飛んでいくからな。弾道の見極めがおおざっぱでもそこそこ相殺できると思うぜ?」

ここで米谷が口を挟む。

「なあ、それできたとして、それで那須ちゃんのバイパーが防げるもんなのか？ 確かりアルタイムで弾道を設定してるんじゃないの？ いちいちそれを予測できるのか？」

「そうだな。そこはアイツが変態だつてことだな。いくらテクニクがあつてもバイパーの軌道は自在だからな。普通は防げねえよ。」

「けど、実際防いでるぜ、まぐれじゃなく、何回も続けて。」

「ですね、時折、被弾がありますけど大きなあたりはないですね。」

「こっちは単に相手が那須ちゃんだからつてところだな。最初に行ったけど、浅上の弾道のモデルは那須ちゃんみてーだし、研究して弾道は目に焼き付けてるつてところだな。」

とはいえ、前回と違って今回はシールドをフレアと併用して使ってるし、防ぐのは精一杯みてーだな。フルアタックが来られたらシールドが破られるからフレアで残った弾が那須ちゃんのほうに行くようにしてる。

おっと、話が長くなつたけど、桜子ちゃん、状況が動くぜ？」

二つの戦いはまだどちらも決定打、有効打ともに見られないが、

明野隊の三人目、隊長の明野が樁にもうすぐ合流できそうなところまで来ていた。

そして、

合流していた諏訪隊の3人がバツグワームを起動した。

初ランク戦 ラウンド2 ④

「警戒！ 諏訪隊の3人がバッグワーム起動したよ。奇襲に注意してね。」

熊谷先輩と戦っていると、村中さんからの警告が入ってきた。

「村中さん、ごめん、リーダーよく見てなかった。諏訪隊の3人はどこで消えたの？」

「ちようど、浅上君と椿君の中間くらいね。モールの南側。どっちに行くかはわからないから気を付けてね。」

こつちには明野が向かってきている。多分明野のほうが諏訪隊の3人より早く着くだろうけど、横やりが入るのは避けたい。

それに二人で固まっていると諏訪隊の的だ。

早くこつちの戦いをおわらせないと。

「椿、そつちまかせていいか？ 諏訪隊の3人が気になる。」

今こつちに來られたら状況がどう動くのかはわからない。

少しでも足止めしてくれるならありがたいや。

「わかった。なら、こつちは僕が何とかするよ。」

「ああ。悪いが頼んだ。じゃあ、ちよつと隠れるわ。」

そういつて明野がバググワームを起動した。

こっちの援護には入れないみたいだけれど、このタイミングでのバググワームは助かる。

さて、それじゃあ……

狙撃を警戒しつつ、熊谷先輩と少し距離をとる。

「……」

呼吸を整える。よし！

「アアアアアアイアアアアアア!!」

掛け声とともにさつきまでより深く切りかかる。

「つつ!!」

奇襲の警戒に注意を割いていたために、熊谷先輩の反応が少し遅れている。

ここで決めに行く！

袈裟切り、そして切り上げ、薙ぎ、そして突き。

そのままつばぜり合いに持ち込む。

さつきまでは浅くしか攻められなかったから無理だったけれど、

この間合いならつつ!!いける!!

「アアアアアアアア!!ドゥウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

相手の弧月を上弾く。そのまま上段への切りかかりと見せての引き胴。

シールドは頭を守るように張られたためそれをかいくぐっての一閃。

一発バイルアウトとまではいかないけれど、深いのが入った。

追撃をしかける。そう踏み込んだ時に、

「まだよ!!」

熊谷先輩が体を深く沈ませ、下から上に切り込んできた。

体勢がかなり低い、切った後にそのまま倒れそうだけれど、そんなことは気にしてな

いみたいだ。

これを防げば・・・

いや、違う、 躲さないと!!!

急いで体を捻りながら横に飛ぶ。

案の定、ライトニングによる弾丸が僕の頭をかすめた。

けれど熊谷先輩の攻撃をよけきれずに左腕が切られた。

そしてそのまま倒れる熊谷先輩。このまま距離を詰めて切りかかってもシールドで

初撃を防がれて狙撃によるけん制でしとめ損ねるかもしれない。

それなら……

僕は弧月を鞘におさめ……

「旋空弧月!!」

足は動かしながら必殺の一撃を放つ。

と同時に

ズバドゥン!!!

「え?」

散弾が僕と熊谷先輩を襲う。

初ランク戦 ラウンド2 ⑤

旋空弧月を放つと同時に

ズバドゥン!!!

「えっ？」

散弾が僕と熊谷先輩を襲う。

諏訪隊の奇襲？

明野は？いや、とにかくシールドを張らないと!!

「シールド!!」

僕と熊谷先輩に加えて、離れたところから明野がシールドを僕たち二人に展開。

ガキツ！バリイン!!!

防ぎきれずに僕は足に被弾。左足が伝達系をやられたみたいだ・・・。

けど、

ザシュツツ!!!

僕の斬撃は熊谷先輩のシールドを超えて通る。

「ごめん、玲」

『トリオン体活動限界。ベイルアウト。』

熊谷先輩がベイルアウトした。

「椿！そのまま予定通り日浦さんを！！」

明野からの指示。確かに場所が割れてる今の撃ちに落としておかないと……。

片足がやられたけれど僕にはグラスホッパーがあるから追いつける……。

「……は任せたよ！！」

諏訪隊の3人を相手に明野一人にするのは心配だけでも、日浦さんを放っておいても狙撃で落とされる可能性が高い。

そう判断してグラスホッパーを起動。日浦さんのところへ急ぐ。

—— 少し前 明野視点 ——

椿なら任せても大丈夫だろう。問題は諏訪隊だ……。

さて、警戒して、2人のところへ行くのがおくれてくれたらいいが……。

「おいおいマジか。」

一直線に二人のところへ向かう諏訪隊の3人を発見した。

隠れてる俺を無視してそのままいくのかよ。

まずい、少しはためらうかと思つたが当てが外れた。

2人への攻撃を防げそうにないな・・・。

けど、椿が片腕を犠牲にしながらも熊谷先輩を追い詰めている。

そこに

諏訪隊のガンナー二人がバググワームを解除してのフルアタック。

奇襲を意識してか距離は射程内ではあるもののショットガンで戦うには離れている。
弾が拡散して威力はそんなに高くない。

それなら・・・

「シールド!!」

俺もバググワームを解除しつつ、二人にシールドを展開。

防ぎきれずに椿が被弾したが、重症は避けた。熊谷先輩も仕留めた。

ならあとはいづかさんのほうに行つてもらうだけだ。

「椿! そのまま予定通り日浦さんを!!」

「ここは任せたよ!!」

椿はすぐにグラスホッパーでここから離れていった。

こういう時の判断が早いのが助かる。

そして、

シールドのためにバググワームを解除したから奇襲としての効果は薄れたけどいい間合いだ。

銃を起動、アステロイドで3人をけん制しつつ近づく。

そして

「旋空弧月!!」

狙うのは一番厄介な諏訪さん。

しかし、

「諏訪さん!!」

狙いを読まれたか笹森がカバーに入る。

二人分のシールドが俺の斬撃を防ぎに入る。

ガキイ! バシユツ!

シールドが壊せたが狙いがそれ、諏訪さんではなく笹森の右腕に斬撃が通った。

あの深さなら伝達系は破壊されてるはずだ。

一人仕留めたかったけれど仕方がない。

状況は悪いが逃げられそうにない。距離をうまく詰めて戦わないとな。

3人は厄介だ・・・と思っていると、

「諏訪さん、ここは任せて椿君を!!」

「おう、まかせたぜ!!」

諏訪さんが椿を追っていったようだ。

確かにグラスホッパーを持っているとはいえ椿はそれなりに負傷している。

落として行かない手はない。

本来なら生かせないほうがいいのかもしれないが、さすがに3人を相手に立ち回るのはきつい、

素直にいかせて笹森に切り込む。

スコープオンなしでの戦いなら五分五分

だけど、今回は笹森の右腕がなく、スコープオンも使用しての3刀流だ。

立ち回りを気にしてもそれなりに有利に戦えるはずだ。

さあ、正念場だ。

初ランク戦 ラウンド2 ⑥

——観戦ルームサイド——

「おっと、話が長くなつたけど、桜子ちゃん、状況が動くぜ？」

出水が武富に話しかける。

そして諏訪隊の3人がマントをまとつた。

「諏訪隊の3人がバッグワームを起動!!奇襲をしかけるつもりだ!!」

武富の実況が響く。

「ま、明野隊と那須隊がやりあつて、諏訪さんたちは手が空いてるからな、横やり入れに行くのは当然だな。」

「明野隊と那須隊にしてみればどっちに来るのかわかんねーし、奇襲が入る前に終わらせようとして、動きが出てくるはずだぜ。明野隊の隊長も味方に合流しそうだしな。」

米屋、出水が続ける。

そして、

「おっと、ここで明野隊長もバッグワームを起動した!!熊谷隊員に奇襲を仕掛ける準備に入った!!いや!!動かない!!そのまま椿・熊谷両隊員の近くで潜伏。これはいつたい

!!

「へえ」「ほう」

解説の二人が感心したようになづく。

「あの、お二方？明野隊長のこの行動にはどういった意味があるんです？」

「わりいわりい。端的に言えば、諏訪隊への妨害と熊谷ちゃんの意識を散らすためだな。あのまま合流すれば熊谷ちゃんは落とせたかもだが諏訪隊から奇襲をそのまま食らう。」

「けどあそこで隠れてたら諏訪隊も熊谷ちゃんも奇襲を警戒しないといけないから諏訪隊は足が鈍り、熊谷ちゃんも気が散る。いいかんじのいやらしい動きだな。」

「まだランク戦2回目だつてのにいい立ち回りじゃん？けどま、今回は相手が悪かったな。」

モニタを見ると諏訪隊は足を緩めることなく椿、熊谷のもとへ向かっている。

「出水先輩？諏訪隊の3人は気にせずに向かっているように見えますけど・・・？」

「諏訪さんだからな、奇襲つても明野一人だし、椿をそのまま狙えば出てこざるをえない。そこを迎撃すればいいって考えだろうぜ。リスクよりメリットをとったってことだな。」

「なんと・・・さすが諏訪隊長。すごい度胸だ!!!」

そして、

モニタでは椿が熊谷を押し切り、旋空を発動しようとしていた。

「椿隊員、渾身の引き胴!! 剣道有段者はダメじゃない!!」

「あれはいいのが入ったな。つと」

「しかし、熊谷隊員、ただでは終わらせない!! 捨て身で日浦隊員とのコンビネーション攻撃だ。いい連携が取れている!!」

「十分に連携が取れてないと味方にあたる可能性もあつたからな。」

「残心とつてたとはいえ、椿も驚いて反応が遅れたな。」

「熊谷隊員の攻撃が入って椿隊員左腕を持つていかれたく!! しかし、倒れこんでしまった熊谷隊員を椿隊員が反撃にかかる。」

「これは、距離を詰めるのではなく、旋空だ!! 確実に仕留めに入る!!」

そして、椿が旋空を放つ瞬間、諏訪隊が攻撃に入る。

「ここで諏訪隊の奇襲くく!! 漁夫の利を狙ってきた!!」

「あわよくば2点とろうつてこつたな。防がれたみてーだけど。」

「2人とも諏訪隊の奇襲を防ぎ切つた!! 諏訪隊の奇襲決まらず!!」

「近くで隠れてた明野がうまく二人を守つたな。」

「え、二人ですか?」

米屋の発言に武富が聞き返す。

「あのままでと熊谷ちゃん落ちて諏訪隊に点を取られてた可能性があったからな。同じ隊の樁だけでなく、熊谷ちゃんにもシールド張ってガードしてたぜ。」

「なんと、そんなことが!! 明野隊長、素晴らしい判断力だ!!」

そしてそのまま、熊谷隊員がベイルアウト!! 樁隊員はグラスホッパーを起動。日浦隊員のもとへ向かう!!

残った明野隊長は諏訪隊の3人へ攻撃。旋空を仕掛け笹森隊員の片腕を奪った!!

諏訪隊は3人で明野隊長に戦いを挑むかと思われたものの諏訪隊長が二人を残して樁隊員を負って離脱!! 1対2の戦いが起きようとしている!!!」

立て続けに起こった出来事に対して武富が実況を入れていく。熱が入って声が大きくなっていたこともあり、やや息切れも見られた。

しかし、すぐさま息を整えて2人に聞く。

「しかし、諏訪隊は3人で戦ったほうがよかつたんじゃないですか?」

「樁のあの負傷じゃ日浦ちゃんを仕留めきれるとは限らねーし、やれたとしても残った樁は浮いた駒だ。取りに行くのは全然ありだぜ」

「それにだいたい距離もつめられてたし。散弾じゃ味方にあたるかもだ。だからま、分か

れて当然だな。」

「なるほど。ありがとうございます。」

さあ那須隊の一人が落ちて明野隊、諏訪隊にも負傷者1名ずつ。戦闘は現在も過激に行われております!!目が離せない展開が続く!!」

初ランク戦 ラウンド2 ⑦

「椿！そのまま予定通り日浦さんを!!」

明野が叫ぶ。

「(っ)は任せたよ!!」

諏訪隊は明野に任せてグラスホッパーを起動。

日浦さんへの距離を詰める。

さっきの狙撃でもう位置がわかってる。

2階建ての建物の屋根だ。

それなら・・・

バシユっ！バシユッ!!

日浦さんから狙撃されるが回避できる。

当たりそうでも集中ガードで防ぐことができる。

狭いステージ、夜、大雨というマップ設定のおかげで

相手の位置は近かった。

もう自主ベイルアウト圏である60m以内に入った。

そのまま距離を詰める。

「っ！」

距離が近くなったことで回避が少しずつ難しくなってきた。

相手の弾が腕を、足をかすめていく。

あと40メートル。

右に、左に、下に、上に、グラスホッパーだからこそできる立体起動でフェイントをかけながら距離を詰めていく。

それをみてか、射撃が一度止まった。

「私だって!! やって見せる!!」

日浦さんがライトニングからアイビスに持ち替えて、こちらを狙っている。

連続して撃つよりアイビスによる一撃で確実に仕留めるつもりだろう。

僕のトリオン量じゃ集中フルガードでもアイビスは防げない。

絶対によけないといけない……。

のこり20m。

撃つてくるとしたらそろそろだと思う。

グラスホッパーを角度、位置を変えて多数展開する。

相手に動きを読ませないためと、読まれてしまってもすぐに別のルートで距離を詰めるためだ。

あと10メートル詰めれば旋空弧月という手もあるけれど、

グラスホッパーと弧月・旋空は同じ右手側。

同時に起動できないから旋空起動時に動きがとまる。

そこを狙われると思う。

だから直接行くのが一番かな。

よし!!

右から行くと見せかけて正面から攻める!!

そうして相手の狙いを右にそらせてよけきる。

のこり15m。

ここだ。

右に飛ぶ、それから直接行くと見せかけて正面に戻る。
銃口は……

「この距離なら!!」

正面を向いたままだった。

フェイントに釣られてない!?

初めから狙いを正面に絞っていたってことか?

もう引き金を引く瞬間だ。今から新しく足場を用意する暇はない……

大きく飛ばばよけられたかもしれないけれど、この足じゃ……

諏訪隊の人に片足をとられたのがここで響いてきた。

迷ってる暇はない。

あえて空中で姿勢を崩す。状態を前に回転させ。最後の足場を弧月で突く。

そうすることによって予定より高く飛ぶ。

「っ!？」

僕の動きを予想していなかった

日浦さんは引き金を引きつつ慌てて照準を合わせる。

ズドン!!!

伸ばした右腕が持っていかれた・・・。

さつき熊谷先輩に左腕を切られていたため、

これで両腕がもう使えない・・・。

これなら反撃はない——

そう思ったに違いない。

だけど、

「ごめんね。」

回転の勢いをそのままに、残った右足からスコープピオンを出して、

急所へ切りかかる。

そして・・・

『トリオン供給機関破損。ベイルアウトします。』

光を残して日浦さんがベイルアウトした。

「こつちの仕事は果たしたよ。けどごめん、こつちはもう戦えそうにないや。もう右足しかのこつてない。ベイルアウトするね。」

——ベイルアウト——

しようとする・・・

ピーー!!

緊急脱出不可

アラートが鳴り、警告が表示される。

このアラートは・・・

誰かが60m以内にいるってことか・・・

「椿君。諏訪さんが近くにみたい。移動できる？
いまルート表示するから。」

村中さんから警告、そして逃走経路が表示される。

かなりまずい……。

バッグワームを起動して片足で移動する。

ただでさえ少なかったトリオンがさらに減っていくけれど仕方がない。
いま諏訪さんに見つかったら終わりだ。

建物の影に隠れながら移動する。

「あれ、椿君？バッグワームしてるよね？」

——と村中さんから警告が入った。

初ランク戦 ラウンド2 ⑧

「あれ、椿君？バググワームしてるよね？」

村中さんからの通信だろう？

バググワームは起動している。

「してるよ？どうして？」

「こっちでもバググワームはオンになってるはずだけど、隠れてないってアラートでてる。トリオン不足？」

正直、ベイルアウト寸前だけど、まだすこしだけなら起動できるはずだ。

「まだ少しなら大丈夫なはずだよ？」

「なら、どうし・・・」

「椿!!今すぐバググワームを切って逃げろ!!」

明野からの通信。確かに効果ないならしてただけトリオンがもったいない。いや、

そういえば・・・

「スタアメーカーだ！。諏訪隊にはもう位置がばれてる。多分まっすぐに向かっていく。」

今度は浅上からの通信。思い出した。

そういえばそんなトリガーがあつた・・・

使う人が少なくて前に軽く聞いたただだから忘れていた・・・。

場所が割れてるならトリオンの消費を気にしても仕方がない、バツグワームを解除と同時に、グラスホッパーで・・・

「おっと、鬼ごっこは終わりだぜ？」

その言葉が聞こえると同時に、僕の体を散弾が貫いた。

ここまでか・・・。2点とつたし、まあまあかな。

『トリオン体活動限界。バイルアウトします。』

視界が一瞬暗転して瞬きすると見慣れた作戦室の自分のマットに転送されていた。すぐに起き上がって村中さんのところへ向かう。

「ごめんね、やられちゃった。」

「お疲れ様、2点とつたんだからすごいよ。」

「ありがとう。」

そういつて村中さんの後ろに移動してモニターを見る。

まだランク戦は終わってない……。

——明野サイド

「つつ、椿がやられたか……。」

動揺している暇はない。足をとめるな、たたみかけろ、押し切るんだ。

椿と別れたあと、ただひたすらに笹森に切りかかる。

最初の旋空弧月で笹森の腕を落とせていたのがよかった。

片腕なら笹森も受けに回らざるをえないから反撃はあっても浅い。

いまなら負けることはほぼない……けど……

しかたねえ、諏訪さんが帰ってくるまでに削りきる。

——観戦ルームサイド——

「椿隊員、ここで無念のベイルアウト!!あの傷ではさすがに逃げ切れなかった!!」

「両腕、片足欠損ならな。ろくにトリオンも残ってねえだろうし、仕方がねえよ。それに位置ももろばれだったしな。」

「対ステルス用オプシヨントリガーのスタアメーカー。一度つけられたら最後。バググワームでもカメレオンでも隠れることができせん!!」

武富がやや興奮気味に実況をする。

それでいて、観戦しているC級隊員のためにマイナーなトリガーであるゆえによく知られていないスタアメーカーについても一言添える気配りを忘れていない。

「さあ1点をとった諏訪隊!!そして明野隊のピンチはまだ続いています!!」

2対1となっている明野隊長。押ししているように見えるが攻め切れない!!

「……とおもうじゃん?」

米谷から本日二回目の口癖がでた。

「どうました? 米谷先輩?」

実況に水を差された形になり、少し興奮が冷めた武富が聞き返す。

「笹森もがんばらばつちやいるけどな、明野の変わった3刀流あいてに、それも片腕じゃあな。分が悪い。明野は今までに3回は切るチャンスあつたけどそれを全部わざとやらなかつたな。」

「えつと……笹森隊員を倒してしまつと、堤さんから撃たれるからわざとそうしなかつたつてことですか?」

「そうそう、そうなると残つた浅上が一人で那須ちゃんと諏訪さんら二人相手にしなきゃなんねーからな。時間を稼いでるつてとこだろな。2回目のランク戦つて1のに周りがよくみえてんじゃん。」

「時間稼ぎ……。となると、明野隊長の狙いは浅上隊員との合流でしょうか?しかし、諏訪隊長が合流目指して移動しています。これは……諏訪隊の合流のほうが早そうですよ?」

「それもそうだな。」

——諏訪隊が合流すれば明野隊の勝ち目はほとんどなくなる。

さてどうする?——

口には出さないが、そうおもい明野の戦いに注目する。米谷、そして出水だった。

初ランク戦 ラウンド2 ⑨

「明野君。こつちより先に諏訪隊に合流されそう。」

村中さんからの通信。

「悪い、雅樹。フレアが那須先輩に対応されてきてるしこつちの動きも読まれてきてる。さすがに振り切れそうにない。」

続いてヒロからの通信。

合流したかったが仕方がないか・・・

「わかった。予定変更する。村中さんはヒロのサポートを頼む。こつちは、諏訪さんとの距離を出してくれてたらそれでいいから。」

「了解!! 気を付けてね。」

後のヒロのことを考えると、

合流が無理なら前の敵を倒すしかない。

笹森の攻撃を起動していない右手側の弧月で受け止める。

左手側で切りかかると同時にスコープオンを展開。

左右両方から・・・

ガギギイツ!!

「っ!!そう来るよな!!」

二つの刃は二つのシールド。

笹森と堤さんのシールドで防がれた。

読み通りではあったが防御された。

さつきから笹森へ深く切りかかろうとすると堤さんのシールドで妨害される。

かなりうつとうしい・・・

タイミング次第で隙ができてこつちがどこか持っていかれそうになる・・・

だから迂闊に攻められなかったが・・・

守りをあまり考えなくてよくなったからな。

もう次の手は考えた。

笹森の反撃に対して防御ではなく回避、そしてそのまま距離を詰める。

「!？」

受け、ではなく避ける行動をとった俺に対して笹森が驚いた表情を見せる。

まあそれはそうだろうな。

バシユツ!!

距離を離されまいと前のめりに戦っていたから

さすがにかわし切れない。

多分俺も相手がこれだけ距離をつめてるのによけようとしてきたら驚くな。

伝達系がある程度やられたらしく、足の反応が鈍る。

けど、

間合いは詰めた。勢いも十分。

再び左右両方から

今度は両方を弧月で切りかかる。

ガギイ!!

先ほどと同様に2枚のシールドが展開されたが・・・

「今回はちよつと違うんだな」

「自分から武器をつ!!」

右手側はシールドで防がれる直前に弧月から手を放す。

シールドには実体がないからトリオン体には干渉しない。

つまりは・・・

俺の右腕はシールドをすり抜ける。

「くっ!!」

あわてて笹森が体を捻るが、遅い。右手の先からスコープオンを展開。左足を切り落とす。

そして、追撃を入れようとしたところで、

ガシッ!!と組みつかれた。

片足・片腕欠損している状態だから、逃げるのは簡単だが・・・

「堤さん!!」

その時間がないな・・・

味方ごと撃つ気だ・・・

堤さんはフルアタック寸前。

笹森はシールドを展開。

位置的には堤さん、俺、笹森だから。

俺がシールドを張れば、笹森も同時に守ることになる。

それを見越してのこれか・・・

そもそも諏訪隊のショットガンのフルアタックはシールドで防ぎきれるか怪しい。

それならやることは一つか・・・

俺はあえてシールドは張らずに、

左右の手にあるそれぞれのブレードを投げた。

「!!」

シールドを張らなかつたことに対して二人が驚きを見せる。

けど、引き金はもう引かれた・・・

パウウオン！ズドン
!!!!

ザシュツ!! ザクツ!!

俺、そしてシールドを貫通して、笹森が被弾。

俺と違って笹森はシールドがある分致命傷ではないがそれなりに重症だ・・・

『警告、トリオン漏出甚大』

そして、堤さんも・・・

急所はさけられたものの、スコープオンが右腕を切り落とし、弧月が左の肩口に突き刺さっていた。

あれは伝達系にまで届いたな。

もう満足には動かせないはずだ・・・

それを確認して、

『トリオン体活動限界。ベイルアウトします。』

俺はベイルアウトした。

初ランク戦 ラウンド2 ⑩

視界の端に光の帯が見えた。

雅樹がやられたか・・・。

これで残りは私と那須先輩、それに諏訪隊の3人。

人数の上では不利だが・・・。

「雅樹！村中さん！諏訪隊の3人のダメージは？」

那須先輩の攻撃をシールド、フレアを駆使しながら確認する。

「諏訪さんが無傷、笹森君が右腕、左足欠損それとかなりダメージ入ってるよ。堤さんは右腕欠損とあと左腕にも深いのが入ってるね。」

「諏訪さん以外はダメージがでかいから逃げられる前なら十分に落とせる。いけるか？」

2人からの返事。これならまだ勝ちの目は十分に残っている。

諏訪隊のところへ移動を急ぐ。

状況が1対1対3になっているから那須先輩もターゲットを私から諏訪隊に切り替えたいだ。

たまにけん制目的の攻撃が来るだけだから
諏訪隊の二人に逃げられる前に追いつける。
と考えている間に遠目に視認できた。

那須先輩も確認できたらしく、キューブを展開している。
このままある程度距離を詰めれば仕掛けるつもりだろう。

けど、射程距離ならこっちのほうが上だ。

ライトニングを生成し、笹森に狙いをつける。

その次は両腕の死んでいる堤さんだ。この二人はここで落とす。

そして私は引き金を引いた。

ビギン！ビギンツ！！

3発続けて放つ。

ガガギンツ！！バシユツ！！

2発シールドで防がれたが一発は右足へ当たった。

あの傷ならベイルアウトは避けられない!!

体に亀裂が入り始めている。

続けて堤さんを・・・

狙いをつけようとした瞬間、諏訪隊の周囲から何かがきらりと光った。

そして、

ドゴオオウオオン!!

直後に爆発が起きる。

同時に光の帯が見えた。

「っ!!メテオラ?爆破用のやつか!!」

爆炎で視界が遮られる。スコープから視線を外したところで、

バイパーがこちらに飛んできていることに気づく。

笹森もベイルアウトしたようだが、それに思考をさく暇がない。

バシユツ！ギギギン！！

とつさにシールドをはりつつ回避を試みるが、左腕に被弾。

伝達系を損傷しみたいで満足に動かせない。移動しながらの射撃はもう無理そうだ。

続いて追撃がくるが、フレアとシールドでしのぐ。

何発かかすめるもののダメージはまだ無視できる。

諏訪隊への距離をつめつつ那須先輩に応戦していると。爆炎が晴れる。案の定、堤さんの姿が消えていた。

両腕が死んでいたし、メテオラがあるとはいえ、本職のシューター相手にそれで戦うのは不利と判断したからだろう。

諏訪さんも隠れる可能性はあったけれど、残って堤さんが逃げる時間を稼ぐことを選んだようだ。

これで、実質1対1対1。

少し予定は狂ったけれどもまだ想定内、諏訪さんと協力して那須先輩を倒せば……。

諏訪さんも私より実力のある那須先輩を先に狙うはず。大丈夫、うまく立ち回ればいけるはずだ。

諏訪さんが那須先輩に狙いを定める。

いまだ、

「決めるー」バイパーとアステロイドを展開。

那須先輩の逃げ道を防ぐように打つ。

タイミングは問題ない。諏訪さんの攻撃と合わせればシールドを間違はなく貫通する。

どこまでダメージが入るかはわからないけれど、このままたたみかける。追撃のイメージを固めようとしたところで、

——ショットガンの銃口がこちらへ向いていることに気づいた。

「悪いな。ルーキー。そう毎回思い通りにいくと思つたら間違いだぜ。」

ズドオウン!!

フルアタックの途中だったために防ぐ手段がなかった私は。そのまま弾丸に貫かれた。

『トリオン体活動限界 ベイルアウトします。』
そしてそのままベイルアウトした。

初ランク戦 ラウンド2 ⑪

——観戦ルームサイド——

「ここで浅上隊員がベイルアウト!!明野隊長、笹森隊員と合わせて3人が一気に落ちました!!明野隊は奮戦するもここで全員がベイルアウト。最後の戦いは那須隊と諏訪隊になりました!!」

試合が大きく動きを見せたことで桜子がより一層興奮した様子で実況の声を響かせる。

「ま、そうだな。明野がいい働きだったじゃん?あの状況なら最悪那須ちゃん、浅上に諏訪隊の3人つてのもあり得たし。2点もぎ取ったのはでかかったな。」

「あれはすごかったな。とっさにアレができるのはさすがだな。隊長としてきちんと仕事してくれたな。」

米屋、出水が続ける。

「浅上隊員の動きに対してはどうでした?あそこで那須隊長へのフルアタックは味方が落とされたことで焦りが見えた・・・といったところですか?」

「まあそうだな。味方二人が落ちて多少は焦りが出てたかもな。けど、あそこで那須

ちゃんを狙うのはありっちゃありだ。間違った判断ってわけじゃねーよ。那須ちゃん、諏訪さん、浅上じや単独で一番厄介なのは那須ちゃんだからな。強力して狙うのはこの場合むしろセオリーだな。」

「問題は、協力しようとしたのが諏訪さんだったってことだな。諏訪さんから見ればどっちを落としても同じ一点だし、多少の違いはあるにせよ、大筋明野隊の考えた展開だろうからそれに載せられるのを嫌って浅上を狙ったってこつたな。」

「なるほど、あえてセオリーを崩して相手の読みを外しに行った。というところでしょうか。さすがだ諏訪洗太郎。ギャンブルはお手の物か!!」

さて、では残りが諏訪隊の二人と那須隊長となったわけですが、この後の展開はどのようなことが予想されますか?」

桜子が解説をまとめ、そして次の話題を提供する。

「堤さんは両腕ほとんど死んでるからな。あのままバイルアウトつてのが普通だな。メテオラ持つてるけどさすがに本職のシューター相手にはきついだろうな。」

「トリオンがもつなら試合終了まで隠れてるつてもありだけどな。けどどちらにせよ、諏訪さんと那須ちゃんの一騎打ちになるつてこつたな。そうなると那須ちゃんが有利だな。」

瞬間的な火力だと諏訪さんだけど、射程、機動力が那須ちゃんがうえだからな。それ

に、もう一つ大きな違いとして那須ちゃんのバイパーなら遮蔽物は関係ねーし、建物に隠れたら一方的に攻められる。」

モニターでも出水が解説しているように、諏訪さんに対して建物越しに一方的に攻撃している那須の姿が映っている。

諏訪が射線にとらえようと仕掛けるもその前に別の遮蔽物に隠れている。

そしてまた攻撃を再開する。

「機動力を活かした那須ちゃんいつもの戦い方だな。このままだとただやられるだけだが・・・」

「いや、動いてきたぜ!!」

ここで諏訪がバググワームを起動した。

「おっと!ここで諏訪隊長がバググワームを起動!!距離をとって逃げ切りを狙うのか!!」

「そうじゃねーよ。あれは那須ちゃんをおびき出すためだ。」

「え、出水先輩？どういうことですか？」

「遮蔽物越しに攻撃するならレーダーか、あとは誰かが観測して位置情報を正確に把握しねーとな。日浦ちゃんがいればバググワームで隠れられても安全に観測できてそのまま攻められるけど……」

「1人になった今だと、直接観測しないと攻撃できない……ということですか？」

現在の得点は諏訪隊の3点に対し、那須隊が0点。

無得点は免れたいであろう那須隊は多少危険を冒してでも攻めに出る必要がある。

「そうだな。バググワームでレーダーに移んねーし直接見ないといけない。そして……」

「見えるってことは射線が通るってことだから、それが諏訪さんの狙いってこと。」

出水の解説の結論を米屋が盗み取る。

「……」

「♪」 キラーン

桜子が怪訝な感じに見つめ返すが、笑顔で返した。

桜子はコホンッと咳払いをして

「出水先輩、解説ありがとうございます。しかしそれだとバググワームで片手がふさが

「りますよね?」

「そうだな。だから守りを捨てて攻めをとったってことだ。諏訪さんらしいぜ。」
「なるほど。リスクを恐れぬ行動・・・ということですね。」

「さあいよいよクライマックスだ!!勝つのは諏訪隊か!それとも那須隊か!!」

初ランク戦 ラウンド2 ⑫ 十解説

「くそつたれ、めんどくせえ。」

バイパーが四方八方から飛んでくる中、それをシールドで防ぐ。建物越しに攻撃されているため、諏訪からは反撃できない。

近づいても機動力で劣っているために逃げられて距離を詰めることができない。このままではシールドを割られて負けるだけだが……

「諏訪さん、進路誘導するからそつちに逃げて〜」

「待ってたぜオサノ!!」

オペレーターから連絡が入る。

そしてバググワームを展開する。

片手分シールドが使えなくなるが向こうの弾道の精度は落ちる。

そのため、まだある程度はしのぐことができる。

誘導に従っていると、これまで以上に那須が接近してきている。

「待ってたぜ!!鬼さんこちらつてな!!」

すぐには迎撃しない。

まだ逃げる。

得点の欲しい那須はそれを追いかけるを得ない。

待ち伏せを警戒しつつ、距離を詰めていく。

そして、とあるポイントで、諏訪が逃げるのをやめて振り返る。

「ヒヤッハー！ビンゴだぜ!!」

那須が、角を曲がると、逃げるのではなく、こちらに銃口を向けようとしている諏訪が視界に入る。

そのまま

防御するために展開していたパイパーを解いてシールドを展開しようとしつつ、相手の銃口の動きを注視する。

——注視してしまった。

それによって足元の注意がおろそかになり気づくのが遅れた。

「つメテオラトラップ!!いけない!!」

角を曲がった先にはメテオラトラップが多数仕掛けられている。

—これだけの数、いつの間に・・・

すぐに堤が仕掛けたものだど気づくがそれに思考を割いている余裕はない。すぐに離れようとするが、すぐには逃げられない。

そして、

「もうおせえよ。もらったぜ!!」

十分に引き付けてから諏訪が引き金を引いた。

ドゴオオオオオオオオオン!!!

爆発が起き、それによって爆音と振動・衝撃波そして煙が引き起こされる。

「諏訪さん!!まだ!!」

オサノからの報告。

レーダーの反応は消えていない。

「おうよ!!」

諏訪が追撃しようとサイド引き金を引こうとしたが・・・

ヒュンツ!!

飛んできた高速の弾丸によって体を貫かれた。

「なっ!!マジかよ」

そう言い残し、諏訪がバイルアウトした。

煙が晴れると左足と左腕を欠損した那須が立っていた。・・・

そして、少し遅れてもう一つ光の帯が飛び、勝敗が決した。

「決着!!勝ったのは那須隊長!!堤隊員の仕掛けた大量のメテオトラップとショットガ
ンによる散弾をかいぐり、諏訪隊長を仕留めた!!」

そしてその結果を見て堤隊員が自主ベイルアウト!!」

本日一番の興奮ぶりを見せつつ、実況をする桜子。

「マジか!」

この展開に解説の二人も驚きを隠せない。

「最後よく対応してたな。俺でもあれはきついぞ。」

「だな、よく反応してたと思うぜ。」

「?お二人とも、どういうことですか?」

「那須ちゃん、フルガードは間に合わないと判断して、展開していたバイパーを自分の近
くのメテオトラップに向けて撃ってたんだよ。もう片方の手はシールド使ってたけ
どな。」

桜子の疑問に米屋が返した。

「自分から・・・?」

「そうそう、で、爆発ってのは外に外に広がっていく。

だから、最初に自分の近くで爆発させれば威力は多少はましになる。

それでも片腕と片足ですんだってところは運がよかったな。」

「走ってた勢いそのままに壁際に行つてシールド張る面積少しでも小さく済むようにもしてたな。よくあの一瞬でできたと思うぜ。」

「あの一瞬でそれだけのことがあつたんですね……。さすがA級。」

「ちなみに最後の攻撃も弾速重視にチューニングしてたぜ。」

それがなかったら相打ちで堤さんが残つて諏訪隊の価値だったな。

まあその堤さんも両腕が死んで、メテオトラップにトリオン使い込んだみてーだから逃げ切りできそうになくてベイルアウトしたけどな。」

出水が補足を入れる。

「明野隊長によるダメージが響いてきたということですね。

さて!!最終結果ですが・・・

堤さんが自主ベイルアウトして残ったのが那須隊長一人。

那須隊に生存点の2点が入り・・・

今回の結果は・・・なんと!!

3対3対3!!

引き分け!! 3チームすべての得点が並んだ!!」

ランク戦2回目にして中位のチームと引き分けの新チームに観戦していた隊員たちに驚きと興奮が走っていた・・・

「さて、興奮冷めやらぬ・・・というところではございますが、

お二人とも、今回の試合。どうでしたか？」

桜子がまとめの解説を促す。

「そうだな。今回は明野隊がよく頑張ってたイメージだな。

うまくマップを使つて予定していた展開に乗せようとしてたし、事実、那須ちゃんが1点しか取れてねーってことだからな。明野隊にすればほほほ予定通りだったと思うぜ。

・・・那須隊に対しては、だけどな。」

出水が答える。一呼吸置き、そして続ける。

「ここは経験の差つてるところと、あとは那須隊、特に那須ちゃんを意識しすぎたな。那須隊の動きを知り尽くしてる動きを見る限り、今回の作戦は浅上が建てたみてーだけど、那須隊に意識を向けすぎてて諏訪隊にかき回された感じだな。

作戦の予定が乱されて、明野隊の3人ともが諏訪隊にやられてる。諏訪隊の動きをを
読み切れず、対策が不十分だったってとこだな。」

「ランク戦は3つ巴、4つ巴の戦いだからな、転送位置もランダムだから、予想通りの展
開なんてそうそうおきるもんじゃねー。どうなつてもいいように作戦を考えておく、あ
るいは、何が起きてもすぐに対処できる対応力を磨く。これが今後の明野隊に必要なこ
とってところか?」

出水に続き、米屋も解説する。

「けどそれ抜きにしたって、結成したばかりでこの動きは優秀だな。これは今後に期
待って感じた。」

「だな。俺後で明野隊のアタッカー二人とバトってくるわ!」

すぐにでも戦いたいという様子で米屋がうきうきとしながら発言した。

「なるほど、今後の期待も大きいということですね。」

さて、時間もおしてきていますのでそろそろ、まとめに入らせていただきます。

今回、引き分けで全チームに3点が加算されますが・・・

那須隊、諏訪隊の両隊は中位に残留。ですが、残念ながら、今回奮戦した明野隊であ
りませんが、わずかに点数が足りず、漆間隊と入れ替わりで下位に降格です。さすがに初
期ボーンナスの有無は大きかった・・・。

そしてそれにより、次回の明野隊の対戦相手は・・・

茶野隊、吉里隊だ!!

ガンナーが多いため、中距離での戦闘が多くなるか・・・

また、次の試合ではこれまでのようにマップの選択権はないので、対応力が問われます。これは次の試合も楽しみだ!!

諏訪隊と那須隊については——

さて、といったところでお時間です。本日はありがとうございました。」

「ありがとうございます。」

初ランク戦 ラウンド2 反省会 そして・・・

ランク戦翌日の翌日の昼下がりに、私たち明野隊はラウンジに集まっていた。

目的はもちろん反省会のためだ。

「さて、全員分の注文はそろったな。それじゃあ昨日の反省会と行こうか。」

隊長である雅樹の声で反省会を始める。

昨日の反省点といえば・・・。

「諏訪隊の動きを読み切れなかったことだな。作戦の立案担当の私の落ち度だ。すまない。」

そう、那須隊への対策はうまく作用していたが、諏訪隊への対策が不十分だったために予定していたより点数を稼げず、引き分けに終わってしまった。

そして、下位に降格。

「作戦を立てたのは浅上だけど、試合前にみんなで話し合っただけでいいってなったじゃないか。浅上一人の責任じゃないよ。」

「そうだよ、浅上君。みんなの責任だよ?」

椿と村中さんがフォローを入れてくれた。

確かにみんなで話し合ったが責任は感じているため、そういつてもらえたとありがたい。

「それに、今回の反省会は反省点を見つけるためのもので、誰かに責任を追及するためのものでもねえしな。諏訪隊を足止めできなかった俺も悪い。」

「僕だって、もうちよつとでもはやく熊谷先輩を倒せていたら結果は違うことになってたと思うよ。」

「私も、スタアメーカーのこと気づくの遅れて警告できなかったし、浅上君のサポートも十分にできなかったからね。お相子だよ。」

3人も口々に先の戦いの失敗を上げる。

「ランク戦でうちの隊のデータが増えてきて、うちの隊の行動パターンや狙いが少しずつ読まれやすくなってるってところか……。」

「諏訪さんたちには特に入隊のころからいろいろ知られてるからね。」

こつちの狙いが読まれたっばいね。」

相手チームの特性やメンバーの性格だけじゃなくて、いかにこつちについて知っているかも考えながら作戦を考えていかないとな……。

「戦術は相手の戦術のレベルも考慮して立案する。だったか。前に東さんが言った。」

次の試合は気を付けるさ。」

「次・・・か、茶野隊と吉里隊だったな。」

ヒロがつぶやく。

「そうだな。茶野隊は2丁拳銃のガンナーが二人。吉里隊はガンナー、アタッカー、オー
ルラウンダーというバランスのいい編成だな。特に吉里隊は作戦に応じて空きスロッ
トになにか入れているから、何が来てもいいように備えておく必要があるな。」

それと、次の戦いは撃ちにマップの選択権がない。つまり・・・」

「いままで私たちは相手に対して対策する側だったけど、次のランク戦では対策される
側になるってことだよな。」

村中さんが結論を述べてくれた。

「そう、だからそれを踏まえて作戦を考えていく必要がある。」

マップ選択権を持っているのは吉里隊で、吉里隊がうちにたいして有利に戦えるよう
になるのは——」

——中距離戦闘だから、それに対する対策をかんがえていこうか・・・

と続けようとしたところで、ラウンジの入り口に、小柄な女の子―雪下さんの姿が見
えた。

そして、『私の視線を感じたのだろう。』

私に気づいて、そして逃げるようにラウンジから出ていこうとした。「ヒロ?」「浅上(くん)?」

話の途中で口を止めた私に対して三人がいぶかしむ。が、詳しく説明する暇がない。

「すまない、すぐに戻る!」

反省会の途中だが、急いで追いかけることにした。

3人にはあとで事情を話すとしよう。

一言だけ断って雪下さんを追いかける。

いまならまだ間に合うはずだ!!!

通路にて・・・

ラウンジからでて急いでおいかける。

「見つけた！雪下さん!!待って！」

通路を二つ曲がったところで追いついた。

もうまくことはできないと悟ったようで、雪下さんが振り返る。

「・・・えっと・・・」

なにか言おうとしているようだ。があえてそれを遮る。

「すまない。先に一つ謝らせてほしい。」

この間は怖がらせるようなまねをしてしまつて申し訳ない。

私と・・・あと当真さんもだが雪下さんの秘密に土足で立ち入るような真似をしてしまった。

「すまない。」

頭を下げて謝る。

実際のところ、この間立ち去つたのは当真さんが雪下さんにいろいろ話を聞こうとし

たからなのだが、当真さんがいなければ私が聞いていただろう。そうならば結局途中で話を切り上げて逃げていたに違いない。

少しして顔を上げると、雪下さんは私を驚いた様子で見ている。

「……あなたが謝る必要はない。隠し事をする私がわるいだけだから……。」

「その隠しごとについてだけれど、言っておくことが二つある。」

「……二つ?」

雪下さんは不思議そうな顔をしてこちらをみてる。

「ああ。一つ目は、その隠し事に関しては無理に話してくれる必要はない。」

雪下さんの様子からあまり人に知られたくないのは理解しているつもりだ。

だからこちらから詳しく聞くことはしない。」

「……いいの?」

「ああ、そして、また時間のある時にうちの隊にも雪下さんのことを紹介しようと思うけれど、そのことは徹底させる。」

「……そう。……ありがとう……。」

「……えっと、それじゃあ、二つ目は?」

すこし首をかしげながら聞いてくる様子がなんとなくかわいい。

「二つ目に言っていたことと矛盾するところがでてくるのだが・・・」

そう前置きを言いつつ、二つ目を告げる。

「その隠し事に関して、大体予想はついている。」

「・・・え・・・」

雪下さんが目を開いて驚いている。

——考えてみれば、ヒントはそれなりにあった。

『・・・この訓練では私はズルしてるようなものだから。そんなに誇れない。』

捕捉&掩蔽訓練の時の会話。

ズルと言っていたけれど、雪下さんの性格上、何かしらの不正を行ったとは考えにくいし、

この訓練で上位だったことが後ろめたい様子だった。そうになると、意図的ではなく

——意図に反して、訓練で雪下さんに有利なことがあるということだ。それは何か。

サイドエフェクトだと考えるのが自然だろう。

サイドエフェクト——トリオン能力の高い人に発現する特殊能力。

副作用といわれることもあるように、自身の意思とは関係ないところで働き、オンオフの切り替えができない。

強化聴覚や感情受信体質など当人からすればあまりよくは思っていないことがあるようだが、たいていの場合戦闘に有利に働く。

雪下さんの隠し事というのはそれであっているはずだ。

だからこそ、私は告げる。

「さつきも言った通り、私は雪下さんからもちかけられない限りは隠し事については聞くことはしない。けれど、これだけは言っておく。何かあればいつでも相談に乗る。同姓の相手がよければ可能な範囲で紹介する。以上だ。それがいいだった。」

「・・・・・・・・」

驚いた表情の次は口をパクパクさせている。

今日だけで雪下さんの表情がいろいろ見られてなかなか新鮮味を感じる。

「・・・・・・・・ありがとう。」

そうだ、この際だから勧誘もしておくべきか。

「2つ、といったけれど訂正する。もう一つあった。この前も言っていたけれど、B級に昇格したら、うちの隊にきてくれないか？」

雪下さんがいてくれたら、もっと上を目指せるはずだ。

だから、一緒に来てほしい。」

今の明野隊は私の狙撃技術が未熟なこともあり、遠距離線に弱い。それに、私が狙撃をするときは中距離戦が弱くなる。

それを雪下さんに埋めてもらえたらA級だって現実味を帯びてくる。

「・・・・・・・・」

雪下さんは返事を戸惑っている。

雪下さんは前に「ランク戦に力になれない」と言っていた。

それが引つかかかって迷っているんだろう。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

互いに気まずい空気が流れる。

—— 答えは急がない。よく考えてから聞かせてほしい。

そういつて話を切り上げようとしたが、この空気は思わぬ形で壊れた。

「熊ちゃん熊ちゃん。浅上君だったらこんなところで女の子に告白するなんて大胆ね。」

振り向くと那須先輩と熊谷先輩がいた。

2人ともニヤニヤしながらこちらを見ている。

その視線はやめてもらいたい。というか、告白ではない。

「ちよつと、玲。告白じゃないわよ。」

熊谷先輩がニヤニヤしつつ、訂正を入れて・・・

「あれはプロポーズよ。」

入れてくれなかった。というかよりひどくなっている。

「那須先輩、熊谷先輩。わかっていているとは思いますが、違いますからね。」

「あらそう? 『雪下さんがいてくれたら、もつと上を目指せるはずだ。だから、一緒に来てほしい。』 だったかしら? プロポーズとも取れるわよ?」

・・・確かに、そう取れる、

しかし、その前のセリフも聞いていたならばそんな勘違いはするはずがない。

それを抗議しようとしたところ・・・

クスリ・・・と音が聞こえた。

そして、あはははと小さく笑う雪下さんがいた。

「・・・笑ってしまつてごめんなさい。・・・そっか、私プロポーズされてたのね。

そこまで熱心に言われたらしかたないね・・・。

・・・わかった。昇格してからになるけれどこれからよろしく願います。」

そういつてペコリ・・・と雪下さんが頭を下げた。

何はともあれ、問題は残っているけれど、勧誘に成功したようだ。

この空気を作ってくれた那須隊の二人には感謝しないといけないな。

・
・
・あのニヤニヤした目をやめてくれたらただけれど。

通路にて・・・② そして顔合わせ

話が一段落ついたところで話を変える。

「それで、お二方は何か私・・・か雪下さんに用事ですか？」

熊谷先輩はともかくとして、那須先輩まで本部に来てるのは珍しい。わざわざ話しかけてきたのだから用事があるのだろうか？

「あたしら？別にないわよ。ただの通りすがり。ラウンジに行こうとしてたら面白い人が面白い話してたからちよつかい・・・もとい、話しかけただけよ。」

「そうね。熊ちゃんの言っている通り、面白い話が聞こえてたから・・・。お邪魔しちゃって悪いわね。」

まだ若干ニヤニヤした表情が残っている。

とはいえ、確かにこの人通りのある場所ですんなり話をした私が悪い。

しかし、それだけではないような気がしてならない。

「ちなみにですが・・・私怨入ってないですか？」

この前のランク戦の恨み・・・とか入っている気がするの気のせいだろうか。

「アハハ、何を言っているのかしらねこの子は!!」

「どうやら墓穴を掘ったようだ。」

熊谷先輩のこめかみがひくついている……。

「い、いえ、何でもありません。」

慌てて訂正する。

用事がないということなので挨拶をして別れようか。

そろそろラウンジに戻らないと……

と、そこで。

「そうだ。浅上くん、今度時間のある時でいいから相手をしてくれないかしら?」

那須先輩からの提案。これはつまり……。

「相手……といいますが、個人ランク戦ということですか?」

「ええ。浅上くんならいい相手になってくれそうだな。いいかしら?」

やはり個人ランク戦の申し出だ。

願ってもない。

「こちらこそ、よろしく願います。しっかりと勉強させていただきます!!」

「ええ、こちらこそよろしくね。」

そうして、互いに連絡先を交換して那須隊の二人と別れた。

「さて、少し予定が狂ったけれど、これからよろしく。」

雪下さんに話しかける。

「・・・ええ」

「さっそくだけれど、この後時間はあるか？ いまちょうど私の隊がラウンジに集まっているから紹介したいのだが・・・。」

「・・・大丈夫。わかった。」

そうして二人でラウンジに向かった。

——ラウンジにて——

ラウンジに帰ってきたところでさっそくうちの隊の各々と目があう。

そして、一緒にいる雪下さんに気づく。

「お、ヒロがやつと帰ってきたぜ・・・。って、ヒロが女連れで帰ってきた!？」

「え、ほんと!?! あ、ほんとだ〜! かわいい!!」

「おかえり、浅上。その子はどうしたの? 見たところまだ訓練生みただけけれど・・・」

とりあえずうちの隊長兼幼馴染にはあとで何かするとして・・・

「雅樹? 断っておくが、ナンパとかではないからな。」

「・・・そうね。プロポーズだったものね」

雪下さんがぼそりと言う。

幸い、3人には聞かれてはいなかったようなのでそのまま続ける。

「コホン、この子は雪下月花さん。ポジションはスナイパーでまだC級だけれど、早く今週末あたり昇格する予定だ。

で、少し気は早いけれど、優秀なのでスカウトしてきた。」

「・・・雪下月花です。まだ訓練生ですが、よろしくお願いします。」

「私は村中桔梗。月花ちゃんでもいいかな？明野隊のオペレーターだよ。

よろしくね。」

「俺は明野雅樹。一応隊長だ、アタッカー、よろしく。」

「僕は椿健太。明野と同じくアタッカーだよ。よろしくね。」

そうして、自己紹介を済ませる。

「しかし、よく見つけてきたな。村中さんは柿崎隊の人からの紹介だったけど、次は誰からの紹介だ？」

「誰かからの紹介とかじゃないな。たまたま訓練で一緒になっただけだ。

そして、私の狙撃の師匠でもある。」

「ああ狙撃の上達が早いとは思っていたけれど、雪下さんから教わっていたんだね。」

「ああ。椿の言う通りだ。的確なアドバイスをくれるからとても助かっている。」
椿の理解が早くて助かる。

みんな好印象で受け入れてくれているが、まだ話さないといけないことがある。

「で、ヒロ、雪下さんが昇格次第4人で戦うってことでもいいのか？」

ちようど雅樹が聞いてくれた。

「よく聞いてくれた。その話はしないとイケない。」

が、ここだとほかの人に聞かれる恐れがある。

悪いが、その話は場所を作戦室に変えてからにしてくれ。」

そうして、訝しむ三人を説得して、ラウンジから場所を作戦室へ変えるべく、私たち

は席を立った。

移動、それから・・・

場所を変えるべく、ラウンジをでて、5人で作戦室へ向かう。

さて、どうしたものか・・・

雪下さんの加入に関しては本人からは了承をもらっているのですが、あとはうちの隊の3人の許可をもらうだけだ。

けれど、その前に雪下さんが今の段階ではランク戦に出られないことを説明する必要がある。

その理由にかんして、ある程度の予想が立っているものの、具体的に、正確に理解しているわけではないし、雪下さんの秘密に関するところだから本人の同意なしに話すわけにもいかない。

ある程度はぼかして伝える必要がある。

さて、どうすればみんなに納得してもらえるのだろうか・・・。

と考えていると・・・

「おっと、浅上じゃねーの。今日は明野隊そろってんのな。それに、嬢ちゃんも。」

偶然通りかかった当真先輩に話しかけられた。

今日はよく話しかけられる日のようだ。

「当真先輩、こんにちは。お疲れ様です。」

「あいよ、嬢ちゃんが明野隊といるってことは、・・・そういうことか?」

そういうこと・・・つまりは雪下さんの加入についてか・・・

「ええ、その予定です。雪下さんからは了承は得られました。」

といつてもついさっきの話ですけど・・・

ですので、これからみんなに雪下さんの紹介をするために移動しているところです。「なるほどね。ま、嬢ちゃんにとつてもそれがいいだろうな。」

じゃ、俺からいうことは一つだけだ。

なんかあつたらいつでもいいな。相談に乗るぜ。

・・・とくに、上との交渉なら俺を挟んだほうがいいと思うぜ。」

当真先輩の言葉に雪下さんがピクリと少し反応する。

やはり、いろいろ気づいている様子だ。

しかし、上との交渉？

なんのことだろうか・・・気になるけれど、雪下さんの秘密にかかわることだから聞くに聞けない。

「・・・わかりました。その時はまた頼りにさせていただきます。

それでは、失礼します。」

「おう、じゃあな。」

そういつて当真先輩は立ち去って行った。

「お前つていつの間にか交友関係結構広がってるよな」

当真先輩と話していた様子を見て、雅樹が話しかけてくる。

「まあ確かにボーダーに入つて広がったな。今度那須先輩に稽古付き合ってもらえるようにもなったし・・・」

だが交友関係が広がっていることに関してはお互い様だろう。アタッカーのいろいろな先輩方と話してるのよくみるぞ。」

「それはあれだ、同じポジションの人とはよく戦うし、一緒に練習もする。

当然っちゃあ当然だな。」

まあ実際その通りだろう。ボーダーは基本隊員同士での教えあいが盛んだ。必然戦闘スタイルが同じ人と仲良くなる機会に恵まれる。

「それにしても・・・那須先輩とねえ。よかったな。」

「ああ、そうだな、これでもつとバイパーを使いこなせるようにしていきたいところだな。」

といった話をしている間に作戦室へとついた。

「さて、それじゃあ、雪下さんの話の続きだな。

ランク戦の加入に関してだったな。

昇格してすぐには残念ながら参加できない。4人で戦うのはもう少し後になる。」

そして、私の話には3人が首を傾げる。

「ちよつとまって、浅上君、ランク戦への加入は昇格してさえいればいつでもできたはずよ。」

3人を代表して、村中さんが聞いてくる。

村中さんの言う通り、家庭の事情などで、隊を抜ける場合があるから、シーズン中で

あつても入隊、脱隊は自由だ。

けれど、今回は事情が違う。

「そうだな。けれど、雪下さんの場合、それとは違う理由で、ランク戦に参加することができない。」

「別の理由？」

3人の疑問はもつともであるが、素直に答えるわけにはいかないし、そもそも私も具体的な理由は知らない。

答えられないか、嘘でごまかすか考えていると……

「……ええ、私の個人の理由でランク戦に参加できないんです。」

私が答えるより早く雪下さんが意を決したように答えた。

「いいの？」

「……ええ。これからチームメイトになる人に隠し事はしたくないもの。」

それに、当真先輩が言つてた通り、ここにいることが私のためになると思うから……。

……当真先輩の言葉が最後の一押しになったようだ。

その期待には応えないといけないな。

「ヒロ？2人の世界を作るならよそでやってくれないか？」

「2人の世界とまではいかないけど、ごめん、僕も話が見えないや。」

ランク戦に参加できない雪下さん個人の理由ってなんなのさ。家庭の事情とか？」
椿の問いに雪下さんが首を横に振る。

そして・・・

「・・・違います。私の・・・、

・・・私の持っているサイドエフェクトが関係しているんです。」

雪下さんはそういった。

—サイドエフェクト—

やはりそれが雪下さんの隠し事だったか・・・。

「・・・ちなみに浅上さんに聞きます。私の隠し事がサイドエフェクトだったって言うことは当たってた？」

「こないだ当真さんと3人で話したときに気づいた。」

「・・・そう。それじゃあ、サイドエフェクトの内容については？」

雪下さんのサイドエフェクト。

「そつちに関しては何んとなくだけだな。何度か雪下さんを見かけていた時から違和感があった。私が見つけると同時に雪下さんも私に気づいていたからな。」

それに、この前の当真先輩が言っていた離れていた先輩に気づいたこと。

これらのことから私の予想だと、雪下さんのサイドエフェクトは

—視線感知—

じゃないかと思っている。私の時も、先輩の時も視線を感知して気づいた。

・・・違うか？」

ランク戦に出れないのは人前で目立つようなことをしたくないから・・・そういった理由じゃないかと考える。

そして、雪下さんの返事は・・・

「・・・違うわ。」

どうやら、違っていたようだ。

いくらかは自身があつて喋つていたのでどことなく恥ずかしい。
3人の・・・特に雅樹の視線が痛い。

しかし・・・違うとなると一体なんなのだろうか・・・

「・・・正しくは、『視線過敏体質』。それが私のサイドエフェクト。」
雪下さんはそうつぶづけた。

視線過敏体質

「・・・正しくは、『視線過敏体質』。それが私のサイドエフェクト。」

雪下さんはそう答えた。

「視線過敏体質・・・？」

雅樹などはピンと来ていないようで首をかしげている。

「それは・・・私の言っていた視線感知との違いはなんになる？」

過敏・・・とあるからには何かしらデメリットがあるということか？」

「・・・そう。」

雪下さんは小さくうなづく。

そして続ける。

「・・・私は、誰かに見られていること・・・視線を感知できます。」

どこから見ているのか、どこを見ているのか、どれくらい注視しているのかを・・・なるほど・・・

その三つがわかれば確かに捕捉&掩蔽訓練ではズルしているようなものだな。

どこからどこを狙われているのか・・・そして、どれくらい注視しているかで狙撃のタイムリングもつかめる。

むしろそのうえで当てる当真さんがおかしいとしか言えない・・・。

「それはすごいね。えっと・・・それじゃあその・・・浅上くんがいつてたデメリットつというのほ？」

私が考えにふけつっている間に村中さんが続けて尋ねる。

「・・・一度にたくさんの人から見られると、頭痛、めまい、吐き気とか・・・。気分、体調不良に・・・。」

「ふむふむ・・・って・・・ええ!! 月花ちゃん、こんなに大人数でごめんね!! いまは大丈夫!？」

デメリットをきいて村中さんが慌てた様子で真っ先に心配する・・・。

「・・・今は大丈夫。10人くらいまでなら・・・平気。」

・・・それに今はトリオン体だから・・・。トリオン体なら症状もある程度はましになるから・・・。」

たしかに、トリオン体は痛覚遮断などがあるから多少は良くなるだろうが・・・。

ん？まてよ？

「雪下さん、それはランク戦にでれない理由でかまわないか？」

ランク戦ではなくさんの隊員が観戦に来る。

10人どころではなく日によつては100人を超える人がいる。

一度に見られればその体調不良・・・過敏症はとも大きなものだろう。

だがそれはモニタ越しだ。直接見られるわけではない・・・。

まさか、モニタ越しでも感じるというのだろうか？

・・・いや、ランク戦中ではなくてもランク戦に参加して活躍すれば注目を浴びる。それを避けたいのだろうか・・・。

「・・・ええ。私のサイドエフェクトはカメラ越しの視線も感じるから・・・。

といつても、少し感じ方は変わるのだけれど・・・。」

雪下さんによると・・・

カメラ越しの場合はカメラからの視線——カメラの位置を感じるだけで対象がどこから見ているのかはわからない。

けれども何人から見られているのはわかるし、どこを見ているのか、どれくらい注視

しているのかもわかるようだ。

これは困ったことになった。

・・・と同時に解決すべき問題が見えてきた。

「ということは・・・雪下さんがランク戦に参加するには、

そこをなんとかすればいいってことだね。」

「そうだな・・・、本部に頼んで、ランク戦で雪下さんは移さないようにしてもらおうとかか？」

椿、雅樹が続けて述べる。

雅樹の案は確かに実行できたらそれで解決できるが・・・。

「それは難しいんじゃないかな。いくら事情を説明しても、さすがにうちの隊に有利に働きすぎるから・・・。」

本部も承認してくれないと思うよ？」

「椿の言う通りだな。確かにそれができればいいが、うちの隊をひいきしてるって批判が出かねない。」

さて・・・どうしたものか・・・。

それからしばらく話し合ったものの、具体的な解決策は出ず、雪下さん加入の件は保留として解散となった。

一応、昇格後は防衛任務で優先的うちの隊と一緒になるようシフトの申請をしておいたの、ひとまずはそれでいいだろう。

雪下さんの問題もわかったし、解決策はそのうち出てくるはずだ。

資料 2

浅上 博雅

左手

メテオラ

アステロイド

バググワーム

シールド

サイドエフェクト：

好きなこと：数学・ログを見ること・射撃（狙撃含む）

最近では合成弾にもはまっている様子。合成にかかる時間は少しは短縮された様子だが、実践で使うにはまだまだ足りない様子。

明野 雅樹

左手

右手

バイパー

スパイダー

ライトニング

シールド

右手

弧月

弧月

旋空

スコープオン

バツグワーム

アステロイド（突撃銃）

シールド

シールド

サイドエフェクト：なし

好きなこと：個人ランク戦・ゲーム

コミュ力の高さを活かしてアタッカーを中心に交流を広めている様子。

どうにかしてスコープオン2本、弧月2本の4刀流ができないか考えている。

椿 健太

左手

右手

スコープオン

弧月

free

旋空

バツグワーム

グラスホッパー

シールド

シールド

サイドエフェクト：なし

好きなこと：剣道・飛行機

雪下 月花 (B級昇格後)

左手 右手

free イーグレット

free ライトニング

バッグワーム アイビス

シールド シールド

サイドエフェクト：視線過敏体質

トリオン量：多い 入隊時で北添・加古と同じくらい。BBFで直すと9くらい

年齢：15 (高校1年生)

血液型：A型

誕生日：3月7日

星座：みつばち座

好きなこと：読書・落語

長所：視線を集めないようにしていたため、目立たず行動することが得意

忍耐力もつよい

成績もそこそこよい

ストレートロングの黒髪がきれい

短所：サイドエフェクトのために人の目が多いところは苦手

人付き合いも基本避けていたため人見知り

身長が低く、容姿の良さもあり、かわいいと評判の女子高生。

それゆえに視線を集めやすいので、普段は地味な服装で目立たないよう心がけている。

高校1年生ではあるもののスカウト組で県外出身。

サイドエフェクトのことで生活に支障があったが、それを改善したいとボーダーへ入隊。現在はボーダーが提供している寮に住んでいる。

家族仲は良く、特殊な体質である娘を両親はとても心配しており、頻繁に電話がかかってきている様子。

村中 桔梗

年齢 16歳

サイドエフェクト：なし

トリオン量 少ない B B Fに換算して2くらい

好きなこと：猫・ネットサーフィン・恋愛小説

誕生日：7月21日

血液型：A型

星座：つるぎ座

長所：並列処理

肩まで伸ばした栗毛のウェーブヘアがかわいい

明るい性格で交友関係が広い

短所：お化けが苦手

実は風間隊オペレーターの上とクラスメイト。クラスメイトが三門市のみんなのために働いているところをみて自分もなにかできることはないかと思い、相談してボーダーに入った。

ペットの猫を溺愛しており、よく明野隊のメンバーに自慢している。

吉里隊・茶野隊対策①

雪下さんを紹介した翌日。

私たち明野隊は再び作戦室に集まっていた。

次のランク戦についてのミーティングが目的だ。

「さて、それじゃあ次のランク線の対策考えてくぞ。ヒロ、なんか考えてるか?」

雅樹の掛け声でミーティングが始まる。

そしていつもの如く私に話が振られる。

「そうだな。策があるにはある。けれど、その前に一応状況を整理する。

次の相手は吉里隊と茶野隊だ。全体的にガンナーが多い傾向にあるから中距離線が主体になるな。

逆に言えば、接近戦に持ち込むことができれば負けはないだろう。」

「つまり、どう近づくか作戦を立てればいいってことだね。」

わかりやすくいいね。とても言いたいかなのように椿が補足する。

「そうだな。このうち、茶野隊はガンナーとはいえ、使用するのはハンドガンタイプのト

リガーだ。有効射程は20mから30mといったところだな。

一発一発の威力は高いが、連射性能は突撃銃にくらべ劣る上、確実に当てるためにむこうから近づいてきてくれるはずだからあまり苦労はしなれないと思われる。」

「つつーと、あとは吉里隊だな。うまく弾幕かいくぐって進まねーとな。」

「うーん。バググワームで奇襲できたらいいけど、いつもそれが出来るわけじゃないから作戦として入れるにはダメだよな。」

明野、村中さんも意見を述べる。

雅樹と村中さんの言うことはもつともだ。

特に村中さんの案は状況次第ではかなり有効だ。

「村中さんの奇襲も十分に有効だな。初期配置次第にはなるが作戦のひとつとして入れておきたい。」

「僕のグラスホッパーは？走るより速いからアリだよな？」

グラスホッパーも接近の手段としては有効だな。

「そうだな。それも有りだな。」

「割と選択肢は多そうね。それなら今回は割と楽勝だったりするのかな。」

「この前のランク戦と比べるとそうなるな。けど・・・」

「マップ選択権・・・だろ？」

私の言葉を遮って雅樹が言う。

「え〜と次のマップ選択権は確か・・・吉里隊だね。」

村中さんが少し考える仕草をして答える。

「地形しだいではこちらが不利になるかもって感じだね。」

「それと補足だが・・・吉里隊は作戦に応じてトリガーを追加することが多い。だから、作戦の幅が広い。対策を立てるに越したことはないな。」

「けどよ、作戦の幅が広いっていつでもそう頻繁にトリガーいじったらとっさの切り替えミスしやすくなるよな？」

「そうだね。じゃあそこも攻めの切り口の一つになるね。といっても、ミスしそうな状況に持ち込むにはやっぱり奇襲とか乱戦とかいった状況を作らないといけなくなるけど。」

初期配置という運要素が絡んでくる作戦になりそうだな。

なので、話を変える。

「運要素が大きくなりそうだな。初期配置が悪かった場合の対処を考えようか。」

「ま、そうだな。どうするよ？」

雅樹がすぐに振ってくる。

が、椿がそれに突っ込みをいれた。

「少しは自分でも考えてよ……」

まったく……とてもいいたそうな表情をしている。

私も村中さんもそれについては同意見である。

私と椿、村中さんは相手の考えを読んで作戦を考えるタイプだけれど、雅樹は自分の勘に頼って作戦を立てる。

雅樹は勘が鋭いから、相手の狙いも外しやすしい、いい案が出るときがそれなりにある。

もちろん、明らかにダメだろうという意見もそれなりにあるが……

とはいえ、今回の作戦では策があればあるほどいい。

いろいろ考えてもらわないとな……

「乱戦に持ち込むってことはただ接近するってことじゃないよな。いかに相手を崩すかってことでいいか？」

それなら、メテオラでどうだ？影浦隊のゾエさんみたいにメテオラバラまいてくれてたらさすがに崩れるぞ。」

ふむ、割とまともな案ですこし驚いた。

「となると私か。まあそれくらいのもオーダーはたやすい。いくらか条件限られるが引き

受けた。」

「条件？」

三人で聞いてくる。

「私はバイパー使いでシューターだからな。ゾエさんみたいな曲射射撃でメテオラが打てるわけでもないし、真つ向からの撃ち合いじゃガンナーには勝てない。」

ガンナー相手ならフレアもつかえないしな。だから地形が有利か、二人にサポートに入ってもらう必要があるな。」

「そっか、じゃあまた別の案も考えないとね……。どんなのがあるかな……」

——そして、しばらく意見を出し合った。

いくら出たけれど特にこれといったものは出てこず、また次回考えるということになった。

幸いにして、次のランク戦は日程調整のために一週間空く。

考える時間は十分にあるはずだ。

さて、どうしようか……

飯屋 秋人

会議の翌日。

私は技術開発室を訪れた。

トリガーの調整及び、ある人物と話があるからだ。

部屋に入つてすぐに見つけた。

白衣を着た男。身長は190cmを超えるだろう。

いつ見てもエンジニアとは思えない体である。

顔は年齢のわりに少し老け気味で表情にはやや疲れが見て取れる。

また寝る間も惜しんで開発にいそしんでいるのだろう。

「やあ飯屋。また調整を頼みたいのだが、かまわないか？」

飯屋秋人（かりや あきと）

雅樹たちと同様に私のクラスメイトである。

私たちより1年早くボーダーに入り、エンジニアとしてはたらいている。

聞いたところによるとトリオン量は少ないものの、

戦闘員になるための必要量はあるらしい。

しかしながら、戦闘よりも開発がしたいと希望を出し、そのまま技術開発室へ配属となった。

クラスではグループが違うため、かわりは多くはないが、仲はそれなりに良いため、これも縁と考え、トリガーの調整は彼に依頼している。

「いいとも。任された。今日はどんな調整だい。また弾道のパターン設定をいじるのか？」

「それもあるが……。チューニングの切り替えパターンも変更したい。」

私の処理能力だと、とっさの時に弾道をうまく設定しきれないため、弾道パターンを設定している。

そして私は攻撃用やけん制用、フレア用、近接用など、普通のバイパー使いより多く設定しており、次の相手に合わせて微調整を行うのがランク戦の前の準備になっている。

「わかった。すぐにとりかかるさ……。と言いたところだけど、いい知らせがある。」

「いい知らせ？」

「ああ。前に申請していたトリガーの調整の件。許可が下りた。」

「本当か!!」

つと、私としたことが、少し声を荒げてしまった。

「……すまない。それで、本当なのか？」

謝罪して言い直す。

そして仮屋は私の行動を気にした様子なく答える。

「ああ。許可が下りた。調整するから少しもらうよ。ちようどこつちからも連絡しようと思っていたからね。浅上のほうからきてきてくれて助かったよ。」

「そうか。時間はあるから焦らなくていい。必要なら席を外すが？」

「いや、そんなにかかるわけではないし、適当なところに座つてて。」

それから、その調整もするならもう一人呼んできたほうがいいだろうな。」

「ふむ、それもそうだな。」

トリガーを渡し、仮屋が調整・カスタマイズしていく様子を観察する。

A級隊員にはトリガーの改造特権があり、自由にカスタマイズできる。

一方でB級隊員におけるトリガーのカスタマイズは制限がある。

公平にランク戦を行うためと、一人一人に大きな改造をするほどのトリオンも人手もないからだ。

しかし、まったくカスタマイズできないわけではない。

レギュレーション内であれば問題はない。

例えば、ガンナーの使用している銃。同じアサルトライフルでも人によつてモデルに

なっている銃がことなる。

アタツカーでも弧月の刀身や鍔の有無などカスタマイズしている。

今回私が申請したのはトリオンキューブの分割方法の変更。

これまでは立方体しかできなかったが立方体もできるようにするカスタマイズ許可を申請していた。

シューター1位の二宮さんやA級の加古さんという前例があるし、技術的にはもうできている。

ならば大丈夫だろうと思っていたが許可がでるのが意外に早くて少し驚いた。

直方体の弾丸も作れるようになったので、これでフレアがしやすくなるはずだ。

さて、じゃあ、練習相手になってくれそうな人に連絡を……

そうして、私は携帯を出し、何人かに連絡をすることにした。